児玉町文化財調査報告書第35集

女　池　遺　跡

（B・D地点の調査）

－町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書30－

埼玉県児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書第35集

女池遺跡

（B・D地点の調査）

－町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書30－

２００１

埼玉県児玉町教育委員会

序

埼玉県の北端部を占める児玉地方は、県内でも埋蔵文化財（遺跡）の宝庫として知られている地域の一つです。特にその中心に位置する我が児玉町には、町内に300箇所以上もの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。そのため、様々な開発事業に伴う事前の発掘調査も多くの遺跡で実施されており、我々の住む児玉町の歴史を知るうえで、学問的にも大きな成果を上げています。

本書は、個人宅造に伴う事前の記録保存を目的として実施した、吉田林に所在する女池遺跡のＢ地点とＤ地点の発掘調査報告書です。平成８年と９年に実施したこの調査は、狭い範囲にもかかわらず、縄文時代と古墳時代の竪穴式住居跡や中世鎌倉時代の溝跡など、当時の生活の一端を窺い知ることのできる多くの遺構や遺物が検出され、大きな成果を得ることができました。

本書が、遺跡の記録保存としてだけではなく、学術研究や地域研究の資料としてはもとより、広く生涯学習の場でも活用いただければ、この上ない幸せに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり、文化財の保護に対して深いご理解と絶大なご協力を賜りました、篠永作・福島彰・福島由美子の各氏に、心から感謝申し上げます。

平成13年３月１日

児玉町教育委員会
教育長　冨丘文雄

例　　言

1．本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字吉田林字堀之内93－８及び93－９に所在する女池遺跡のＢ地点とＤ地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、Ｂ・Ｄの両地点とも個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施したもので、調査期間はＢ地点が平成８年２月26日から３月28日、Ｄ地点が平成９年７月１日から８月５日である。

3．発掘調査は、児玉町教育委員会が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。

4．発掘調査から本書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・町費である。

5．本書の執筆は、第Ⅳ章１～４を増田久江と恋河内が、縄文土器観察表と第Ⅳ章５を松澤浩一が、その他については恋河内が行った。

6．　本書の編集は、増田の協力を得て、恋河内が行った。

7．各遺構の番号は、いずれもＡ地点からの続き番号をつけているが、同一の遺構と考えられるものについては同じ番号とした。

8．出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
Ａ－法量、Ｂ－成形、Ｃ－整形・調整手法、Ｄ－胎土、Ｅ－色調、Ｆ－残存度、Ｇ－出土層位、Ｈ－備考

9．本書に掲載した地図は、国土地理院発行の５万分の１・２万５千分の１、児玉町役場発行の２千５百分の１である。

10．本書に提載した写真は、遺構を恋河内が、遺物は主に増田が撮影した。

11．発掘調査から本書刊行に至るまで下記の方々や機関からご教示やご協力を賜った。記して感謝いたします。

赤熊浩一、荒川正夫、岩瀬　譲、太田博之、金子彰男、坂本和俊、篠崎　潔、篠永　作、外尾常人、瀧瀬芳之、田村　誠、富田和夫、中沢良一、長瀧歳康、中村倉司、永井智教、西田親史、坂野和信、福島　彰、福島由美子、増田一裕、松本　完、丸山　修、矢内　勲、山本　靖、

埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、
早稲田大学本庄考古資料館、

目　　次

序

例言

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　遺跡の概要 …… 5

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物 …… 9

1．竪穴式住居跡 …… 9
2．掘立柱建物跡 …… 33
3．土　　壙 …… 34
4．溝　　跡 …… 38
5．調査区内出土の縄文土器・土製品 …… 42

《参考文献》 …… 46

写真図版

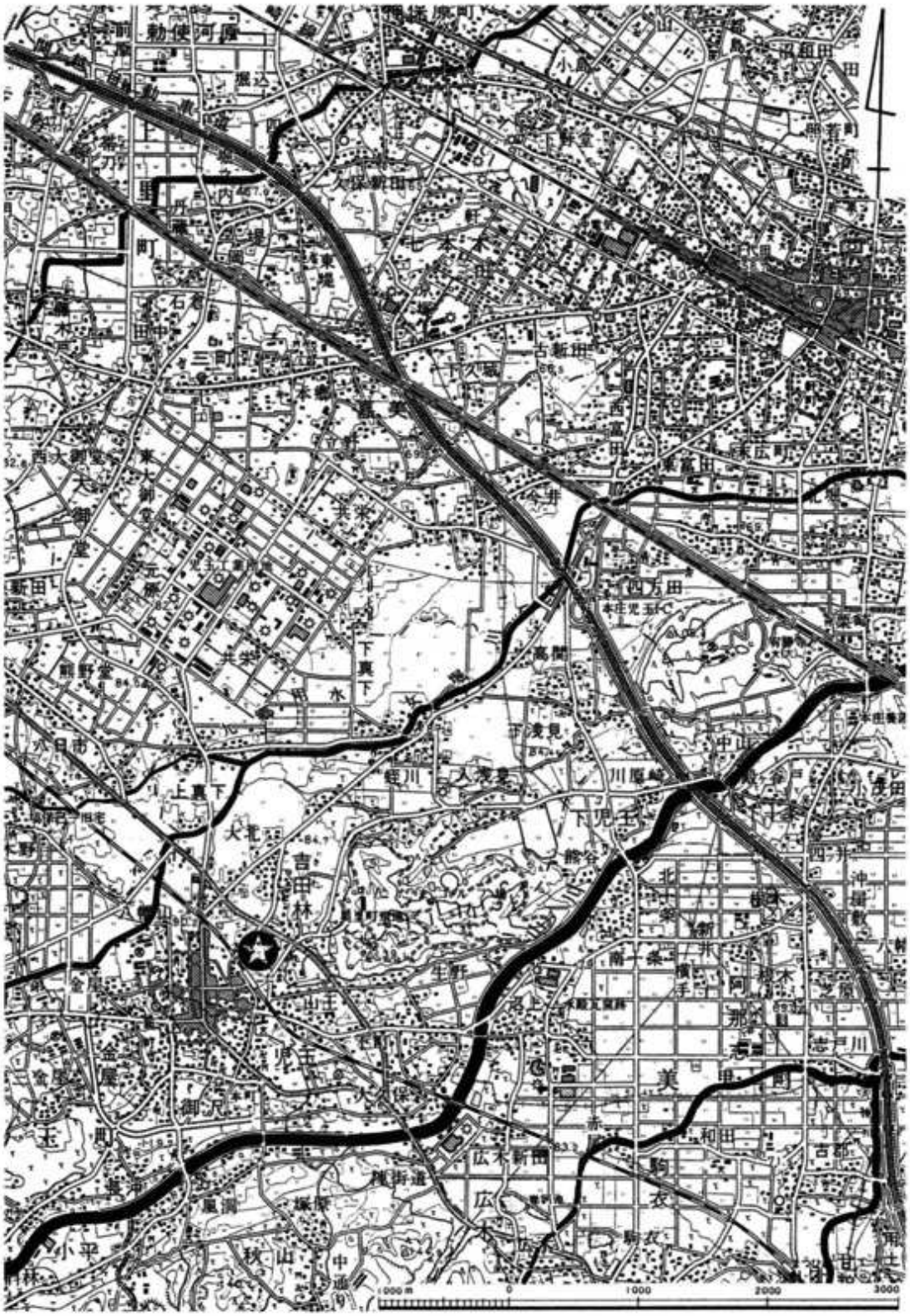
挿　図　目　次

第１図　女池遺跡位置図
第２図　周辺の古墳時代遺跡…… 2
第３図　女池遺跡調査地点位置図 …… 4
第４図　女池遺跡Ａ～Ｄ地点位置図 …… 6
第５図　女池遺跡Ａ・Ｂ・Ｄ地点位置関係図…… 7
第６図　女池遺跡Ｂ・Ｄ地点全体図 …… 8
第７図　第13Ａ号住居跡（１）…… 10
第８図　第13Ａ号住居跡（２）…… 11
第９図　第13Ａ号住居跡カマド…… 12
第10図　第13Ａ号住居跡出土遺物（１）…… 13
第11図　第13Ａ号住居跡出土遺物（２）…… 14
第12図　第13Ａ号住居跡出土遺物（３）…… 15
第13図　第13Ｂ住居跡出土遺物…… 17
第14図　第13Ｂ号住居跡（１）…… 18
第15図　第13Ｂ号住居跡（２）…… 19
第16図　第14号住居跡…… 20
第17図　第14号住居跡カマド…… 21
第18図　第14号住居跡出土遺物…… 22
第19図　第15号住居跡（１）…… 23
第20図　第15号住居跡（２）…… 24
第21図　第15号住居跡出土遺物（１）…… 25
第22図　第15号住居跡出土遺物（２）…… 26
第23図　第16号住居跡…… 29
第24図　第16号住居跡出土遺物…… 30
第25図　第17号住居跡出土遺物…… 30
第26図　第17号住居跡…… 31
第27図　第５号掘立柱建物跡…… 32
第28図　第５号掘立柱建物跡出土遺物…… 33
第29図　第36号土壙出土遺物…… 34
第30図　第38号土壙出土遺物…… 34
第31図　土　壙…… 35
第32図　第41号土壙出土遺物…… 37
第33図　第5号溝跡 …… 38

第34図　第5号溝跡出土遺物 …… 38
第35図　第13・14号溝跡 …… 40
第36図　第16～22号溝跡 …… 40
第37図　第20号溝跡出土遺物 …… 41
第38図　調査区内出土の縄文土器・土製品（1） …… 43
第39図　調査区内出土の縄文土器・土製品（2） …… 44
第40図　調査区内出土の縄文土器・土製品（3） …… 45

図　版　目　次

図版1　女池遺跡B地点遠景
女池遺跡B地点全景
図版2　B地点全景（東より）
B地点全景（南東より）
図版3　女池遺跡D地点遠景
女池遺跡D地点全景
図版4　D地点全景（北より）
D地点全景（南東より）
図版5　第13A号住居跡（B地点側）
第13A号住居跡（D点側）
図版6　第13A号住居跡カマド
第13A号住居跡貯蔵穴
図版7　第13A号住居跡須恵器高坏出土状態
第13A号住居跡土師器甕出土状態
図版8　第13B号住居跡（B地点側）
第13B号住居跡（D地点側）
図版9　第13B号住居跡（B地点側）
第13B号住居跡（D地点側）
図版10　第14号住居跡
第14号住居跡カマド
図版11　第15号住居跡（南側より）
第15号住居跡（北西側より）
図版12　第15号住居跡炉
第15号住居跡P13
図版13　第16号住居跡（南側より）
第16号住居跡（東側より）
図版14　第17号住居跡（西側より）
第17号住居跡（北側より）
図版15　第5号掘立建物跡
第36号土壙
図版16　第37号土壙
第38号土壙
図版17　第40号土壙
第41号土壙
図版18　第5号溝跡
B地点ピット13
図版19　女池遺跡出土遺物（1）
図版20　女池遺跡出土遺物（2）
図版21　女池遺跡出土遺物（3）
図版22　女池遺跡出土遺物（4）
図版23　女池遺跡出土遺物（5）
図版24　女池遺跡出土遺物（6）
図版25　女池遺跡出土遺物（7）
図版26　女池遺跡出土遺物（8）
図版27　女池遺跡出土遺物（9）


勅使河原
上里
町
三町
古新田
西富田
東富田
四方田
高崎
下真下
上真下
下児玉
吉田林
生野
美
駒衣
広木
秋山
小平
1000m
0
1000
2000
3000

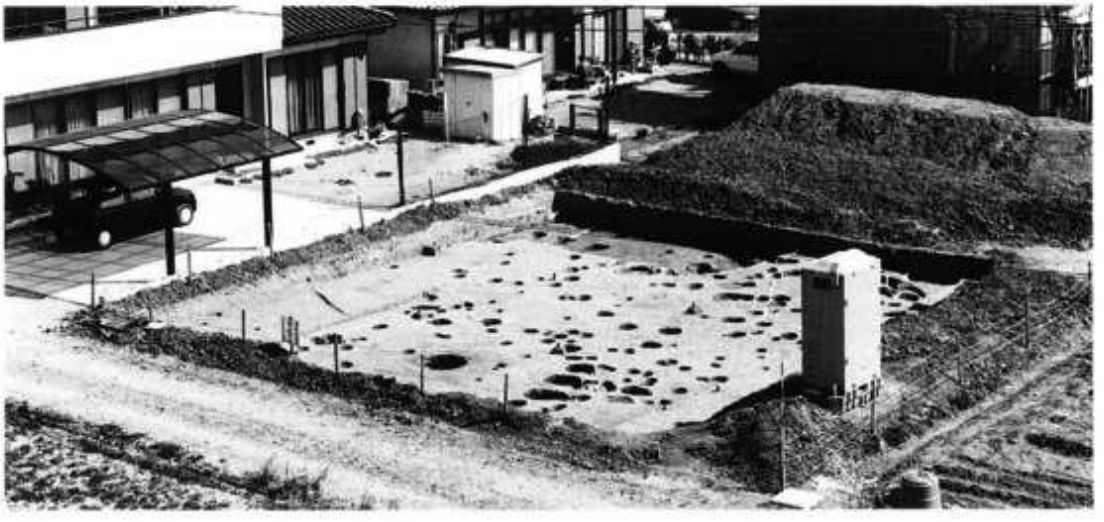
第１図　女池遺跡位置図

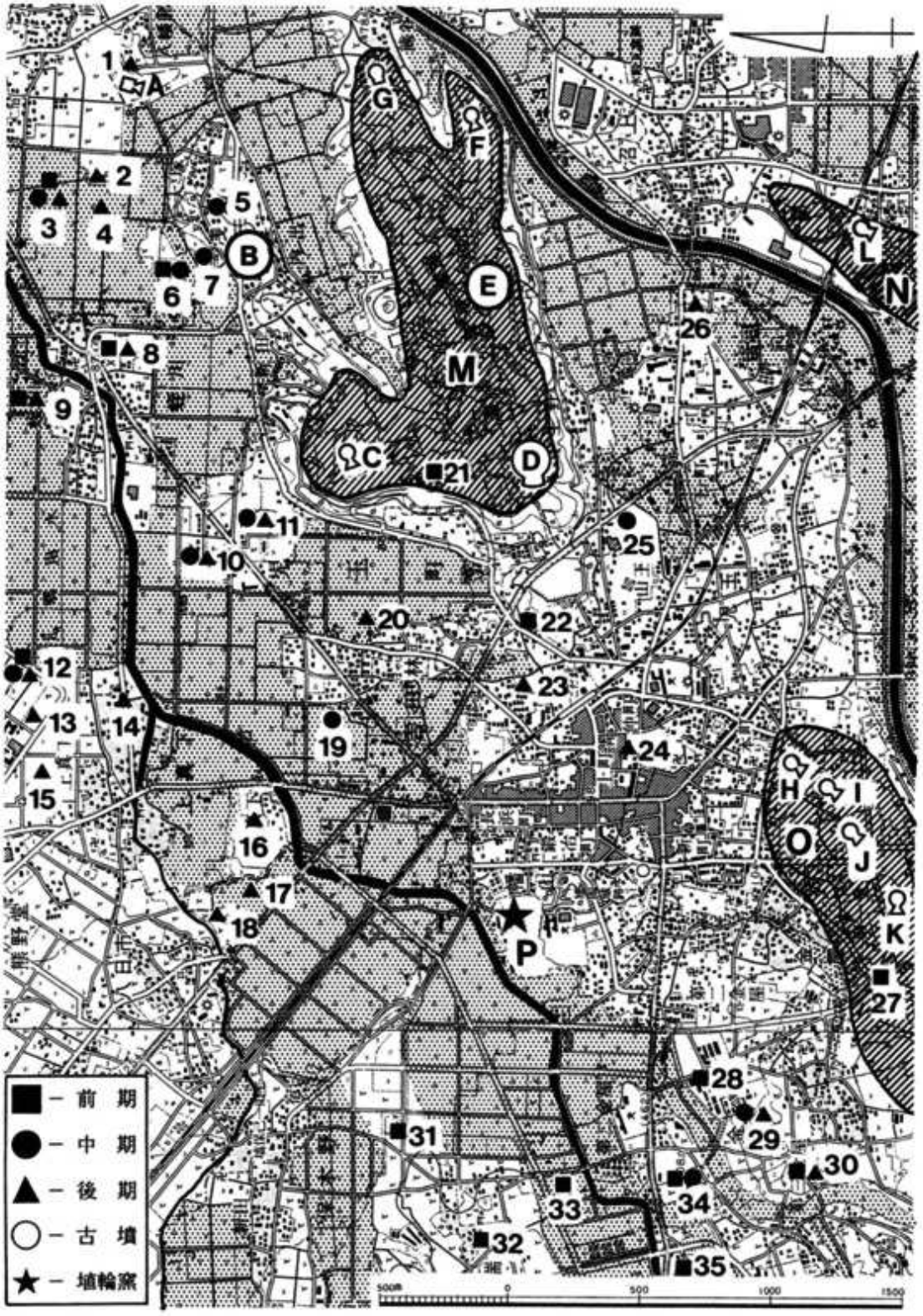
第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

児玉町大字吉田林に所在する女池遺跡は、『児玉町遺跡分布地図』記載の「児玉町№305遺跡」に該当する周知の埋蔵文化財包蔵地である。今回報告する同遺跡のＢ地点(93番地の８)とその隣接地のＤ地点(93番地の９)については、両地点が分筆される以前の平成４年３月に、当時の地権者の依頼に基づいて児玉町教育委員会がすでに試掘調査を実施しており、縄文時代～古墳時代の竪穴式住居跡等の遺構の存在が確認されていた。このことについては、当時の同地権者が同地を分筆した後に改めて提出したＢ地点(93番地の８)側の「文化財の所在及びその取り扱いについて」の照会文書(平成７年10月２日付)に対しても、その試掘調査の結果と現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会と埋蔵文化財の保存措置について協議する必要があることを、平成７年10月３日付の児教社第166号により回答している。

その後、Ｂ地点の土地は、同地に個人住宅の建設を予定している篠永作氏が取得し、これまでの経緯を踏まえて、平成７年11月30日に同氏より児玉町教育委員会に対して、住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査の依頼があった。これを受けて児玉町教育委員会は、年が明けた平成８年２月26日から、同地の発掘調査を実施することになった。Ｂ地点の発掘調査に関する届出は、平成８年１月25日付けで篠永氏より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会から同日付けの児教社第292号による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」が、埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出されている。

隣地のＤ地点についても、その後個人住宅建設のため同地を取得した福島彰氏により、平成９年２月４日に児玉町教育委員会に対して、住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査の依頼があり、同年の７月１日より発掘調査を実施する事になった。Ｄ地点の発掘調査に関する届出は、平成９年６月30日付けで福島氏より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会から同日付けの児教社第65号による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」が、埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出されている。





第２図　周辺の古墳時代遺跡

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 －古墳時代を中心に－

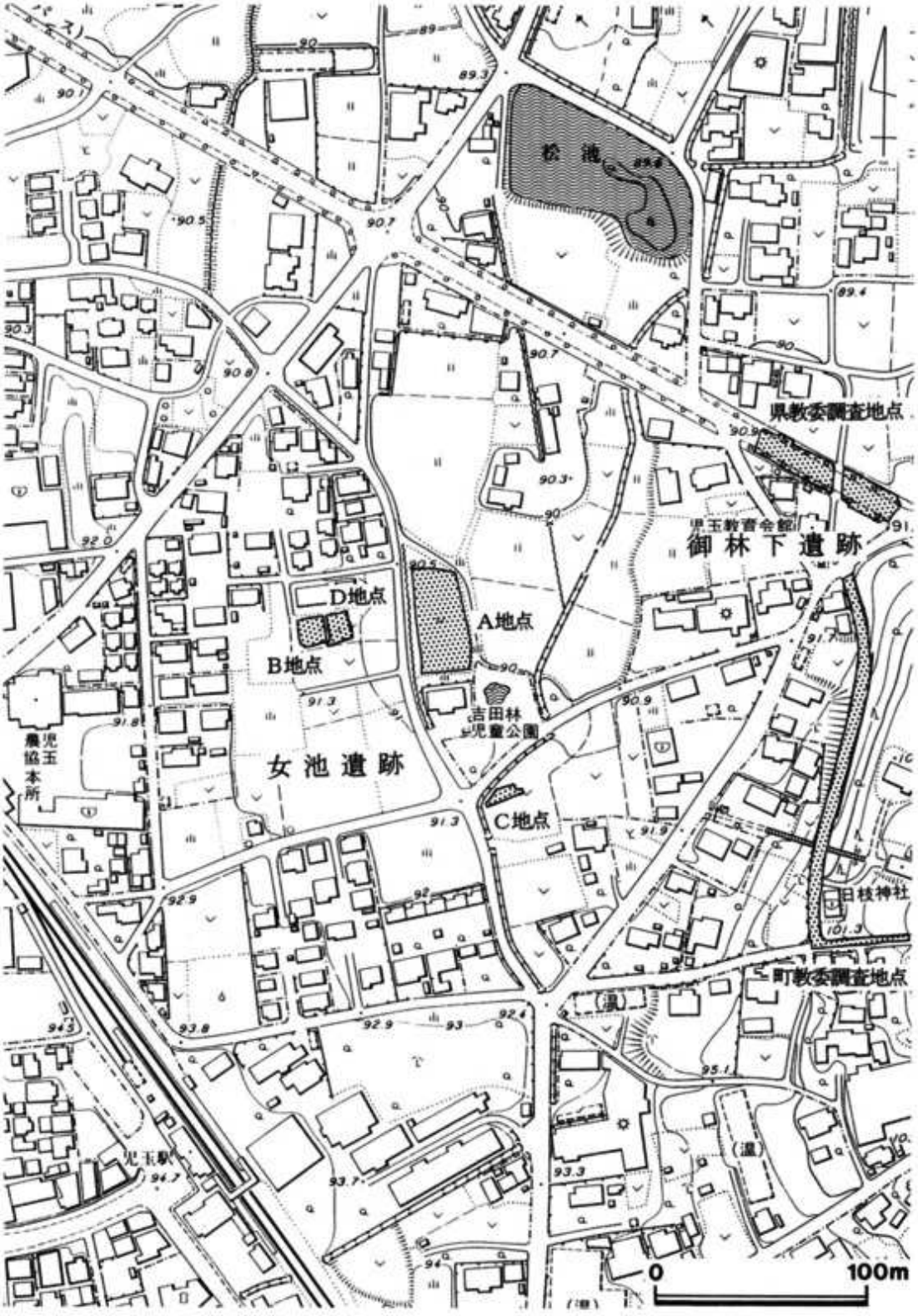
本遺跡は、ＪＲ八高線の児玉駅から北へ約200m離れた場所にある。地形的には、児玉町の南側半分を占める上武山地から北西方向に向かって半島状に延びる児玉丘陵と、丘陵から河川等の開析作用によって分断された生野山残丘との間に挟まれた低台地の縁辺部に立地している。標高は、91m前後を測り、本遺跡の西側に位置する小規模な谷田との比高差は50cm程度である。

本遺跡が位置する女堀川の中流域では、帯状に広がる沖積低地を中心に、その中の自然堤防上や微高地上、北西側の本庄台地縁辺部、南東側の残陵上及びその斜面下の低台地上を主体に多くの遺跡が立地している。しかしながら中流域の遺跡は、丘陵部を主体とする上流域に比べて、概して弥生時代以前の遺跡は希薄な状態で、古墳時代になってから集落の進出が顕著になり、遺跡数が急激に増加する特徴が認められる。

女堀川流域の古墳時代前期の遺跡は、まず弥生時代後期からの伝統を受け継ぐ丘陵上の遺跡に、西方の外来系土器が客体的に流入する状況で出現し、その後前期中葉頃になって、外来系土器を主体とした日延遺跡（恋河内1999）・浅見境北遺跡（恋河内1997）・川越田遺跡（富田・赤熊1985、恋河内1993）などの小規模な集落が中流域の低地内に進出し、沖積低地の本格的な開発が着手されるようになる。そして前期後葉には、川越田遺跡から発展した大規模集落の後張遺跡（立石1982・1983）を中心として、その周辺に多くの小規模集落が展開するようになり、低地開発の一定の成果と安定を見る。中期には、集落の分布が中流域のほぼ全域に広がり、当地域の個々の住居にカマドが普及するようになる後半段階には、畿内系の布留式甕を出土した二本松遺跡（長谷川1983）・夏目遺跡（長谷川1985）・夏目西遺跡・雌濠遺跡（本庄市1986）などが近接して群在する西富田遺跡群が形成され、当地域の新たな核的地域を構成する。中期に発展した中心的集落は、後期になっても継続するが、6世紀後半になると中流域の集落分布にやや変動が見られ、本遺跡のように新たに形成される集落が多く見られるようになり、集落数が増加するようである。これらの集落も、7世紀中葉頃になると低地内に立地するほとんどの集落が廃絶され、沖積低地を取り囲むようにその縁辺に移動し、集落の大規模な再編成が行われるようである。

このように中流域は、女堀川流域社会の政治的・経済的な中心として発展し、その右岸の鷲山や生野山の残丘上に前期には前方後方墳の鷲山古墳（坂本他1986）、中期には大形円墳の金鑽神社古墳（坂本他1986）、後期には前方後円墳の生野山銚子塚古墳などの、いずれも60m級の規模を有する首長墓が、時期によって墳形を変えながらも集中的に築造され、在地首長層の奥津城として利用される。そして後期以降には家父長層の台頭により多くの小円墳が作られ群集墳化する。

1．鷲山南、2．浅見境、3．浅見境北、4．東田、5．新屋敷、6．日延、7．城の内、8．共和小学校校庭、9．左口、10．辻堂、11．南街道、12．塚畠、13．新宮、14．上真下東、15．辻ノ内、16．金佐奈、17．反り町、18．八荒神南、19．高縄田、20．宮田、21．生野山、22．御林下、23．**女池**、24．仲町、25．清水ノ上、26．大久保、27．長沖久保、28．金屋池脇、29．倉林後、30．念仏塚、31．十二天、32．田端中原、33．田端南堂、34．枇杷橋、35．塩谷下大塚、A．鷲山古墳、B．金鑽神社古墳、C．生野山銚子塚古墳、D．物見塚古墳、E．生野山将軍塚古墳、F．生野山16号墳、G．熊谷後1号墳、H．長沖31号墳、I．長沖32号墳、J．長沖25号墳、K．長沖79号墳（十兵衛塚古墳）、L．広木大町40号墳、M．生野山古墳群、N．広木大町古墳群、O．長沖古墳群、P．八幡山埴輪窯跡、



第3図　女池遺跡調査地点位置図

第Ⅲ章　遺跡の概要

女池遺跡は、丘陵下に広がる標高91mの低台地上に立地する、縄文時代中期末～後期前葉と古墳時代後期の集落跡や中世前半頃の屋敷地を主体とした複合遺跡である。本遺跡の周辺は、狭く浅い開析谷が複雑に入り込み、以前はそれらの湧水を集めた女池・藤池・松池等の小規模な溜池が多く作られ、それらによって周囲の水田を灌漑していたが、現在は周辺の宅地化が急速に進行し、それに伴う造成や埋め立て等によって地形が平坦化し、本遺跡周辺の旧地形もかなり不明瞭な状況になりつつある。

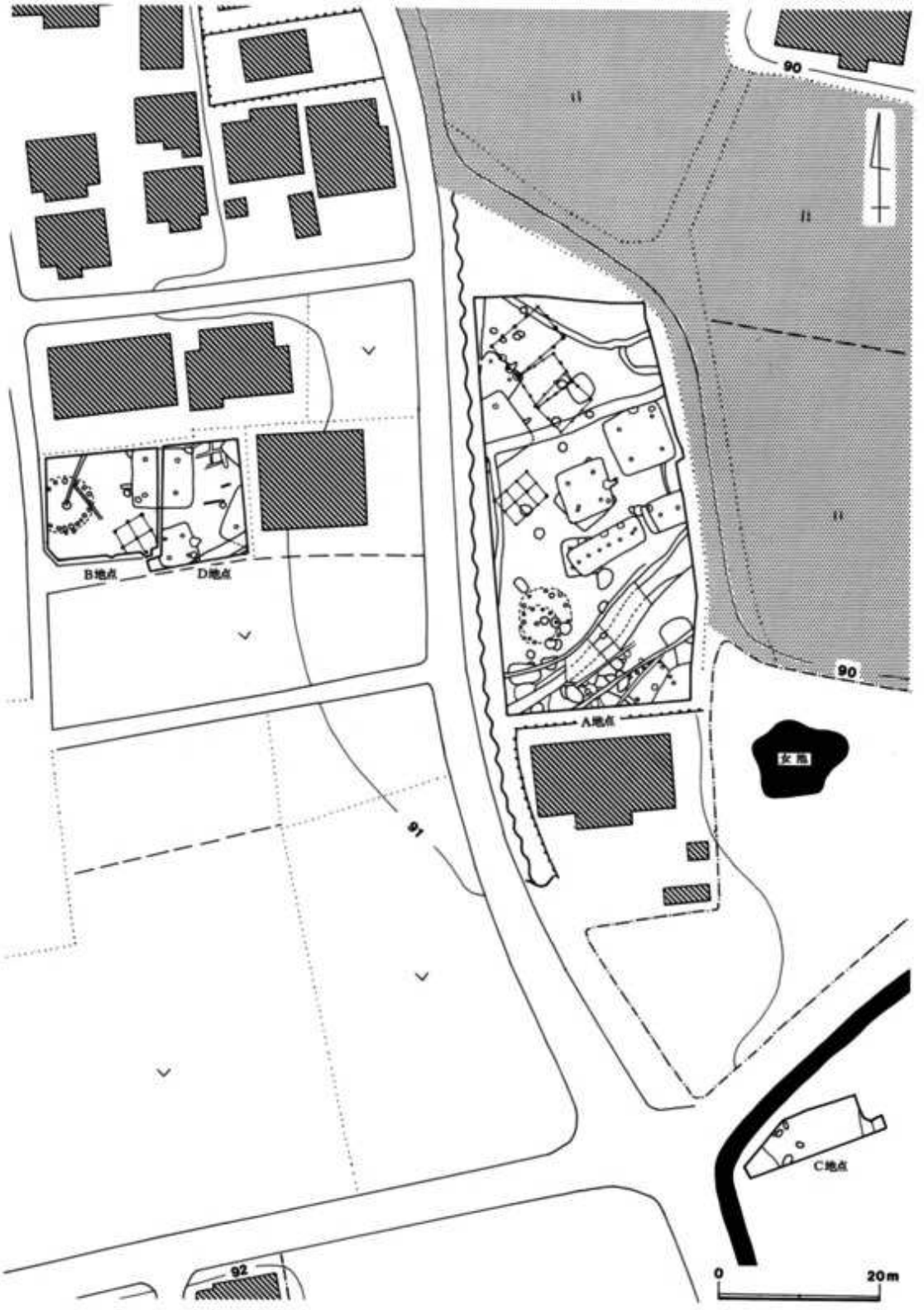
本遺跡は、これまでにA～D地点の４地点が調査されており、総数で竪穴式住居跡19軒・掘立柱建物跡５棟・井戸跡４基・土壙41基・溝跡22条などの遺構が検出されている（第４図）。この４地点のうち、A地点とB・D地点は、いずれも近接してほぼ同じ時期の竪穴式住居跡等の遺構群が検出されているが、A地点の南側約50mに位置するC地点は、これらの３地点とは溜池の女池がある小支谷を挟んで対峙する位置関係にあり、検出された遺構の様相も他の地点とはやや異なっている。

今回報告するB地点とD地点は、A地点の西側約30mの位置に隣接しており、両調査区内からは竪穴式住居跡６軒・掘立柱建物跡１棟・土壙６基・溝跡11条とピット多数が検出されている（第６図）。縄文時代の遺構は、竪穴式住居跡１軒（第15号住居跡）・土壙４基（第36・37・38・41号土壙）とピットで、時期は中期末～後期前葉までのものである。第15号住居跡は、壁柱穴が等間隔に円形に巡る形態の住居で、中央には大きく深い炉を有し、南側には住居外に対ピットを伴う入口部施設がある。時期は、称名寺Ⅱ式～堀之内１式であるが、類似した住居跡はA地点でも検出されている。

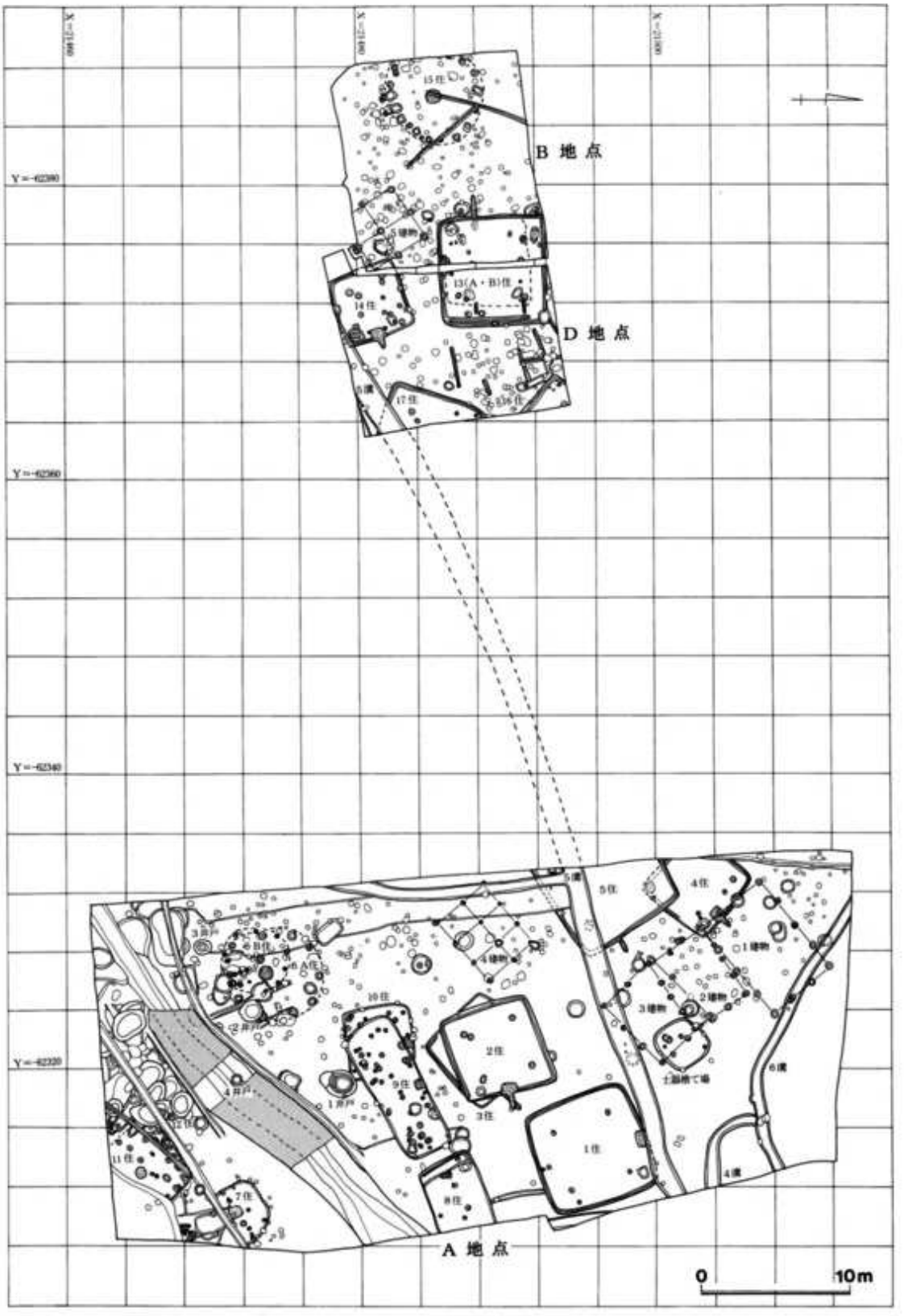
土壙は、中期（第38・41号土壙）と後期（第36・37号土壙）のものがあり、中期の土壙は土器を伴っている。尚、本遺跡の縄文時代の遺構は、A地点で堀之内２式の時期まで確認されている。

古墳時代後期の遺構は、竪穴式住居跡５軒と掘立柱建物跡１棟である。この中で、B地点の第５号掘立柱建物跡は、その重複関係や出土遺物から、D地点の第16号住居跡とともに本遺跡における後期の集落では比較的初期の段階のものと考えられる。また、B地点とD地点にまたがって検出された第13A号住居跡と第13B号住居跡は、同一場所での建替えによる拡張住居である。本遺跡の古墳時代後期集落は、A地点で長方形の工房的住居（第８・９号住居跡）や性格不明の窯跡が検出され、また大形の第５号住居跡の覆土中からは鉄滓や複数の羽口の破片などが出土していることから、何だかの工人を伴った集落であることが窺えるが、B・D地点ではそれらの工人に直接関係するような遺構や遺物は見られない。

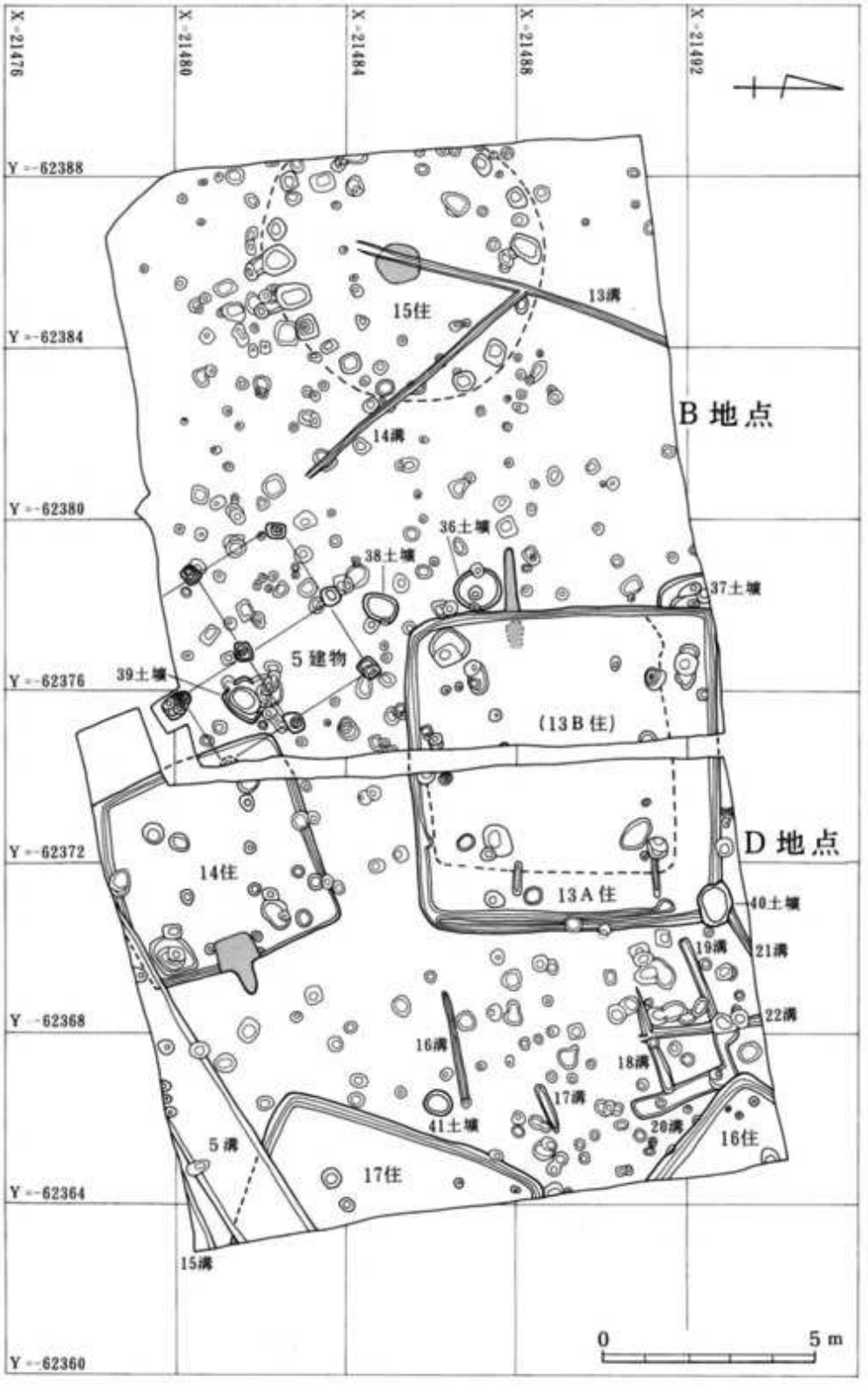
中世の遺構は、溝跡２条（第５・20条溝跡）だけであるが、A地点では複数の建物跡や井戸跡が検出されている。D地点の第５号溝跡は、東側のA地点でもその延長部分が検出されており、その溝断面の形態や比較的直線的な流路から、何だかの屋敷地の区画と関係する排水路と推測される。この溝は、現在の地割りと一致していないため、現地表面の地割りによる屋敷地の推測は困難であるが、本地点が所在する場所は小字名が中世的地名の「堀之内」であり、在地有力者層の館か屋敷の存在が推測される場所として注目される。遺物は、概ね14世紀頃までのものが主体で、A地点では古代末に遡る可能性がある平瓦の破片や、舶載品の青磁碗や白磁皿・碗の破片などが出土している。



第４図　女池遺跡Ａ～Ｄ地点位置図



第5図　女池遺跡A・B・D地点位置関係図



第6図　女池遺跡B・D地点全体図

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

1．竪穴式住居跡

第13Ａ号住居跡（第７・８図）

Ｂ地点とＤ地点の調査区北側に位置し、両調査区にまたがってそれぞれ住居跡の東西半分ずつが検出されている。南側には第５号掘立柱建物跡やそれと重複する第14号住居跡が、東側には第16号住居跡や第17号住居跡が近接している。本住居跡の北西コーナー部は第37号土壙を切っており、北東コーナー部は第40号土壙に切られている。本住居跡は、床面下から検出された第13Ｂ号住居跡（第14図）と重複関係にあるが、両住居の形態がほぼ相似形で、壁の方向を一致させた入れ子状の重複であることから、おそらく第13Ｂ号住居跡の拡張に伴って築造された住居と考えられる。

平面形は、比較的整った方形で、東西方向7.44m、南北方向7.20mを測る比較的規模の大きな住居跡である。住居の主軸方位は、N―95°―Wをとり、ほぼ東西方向に向いている。

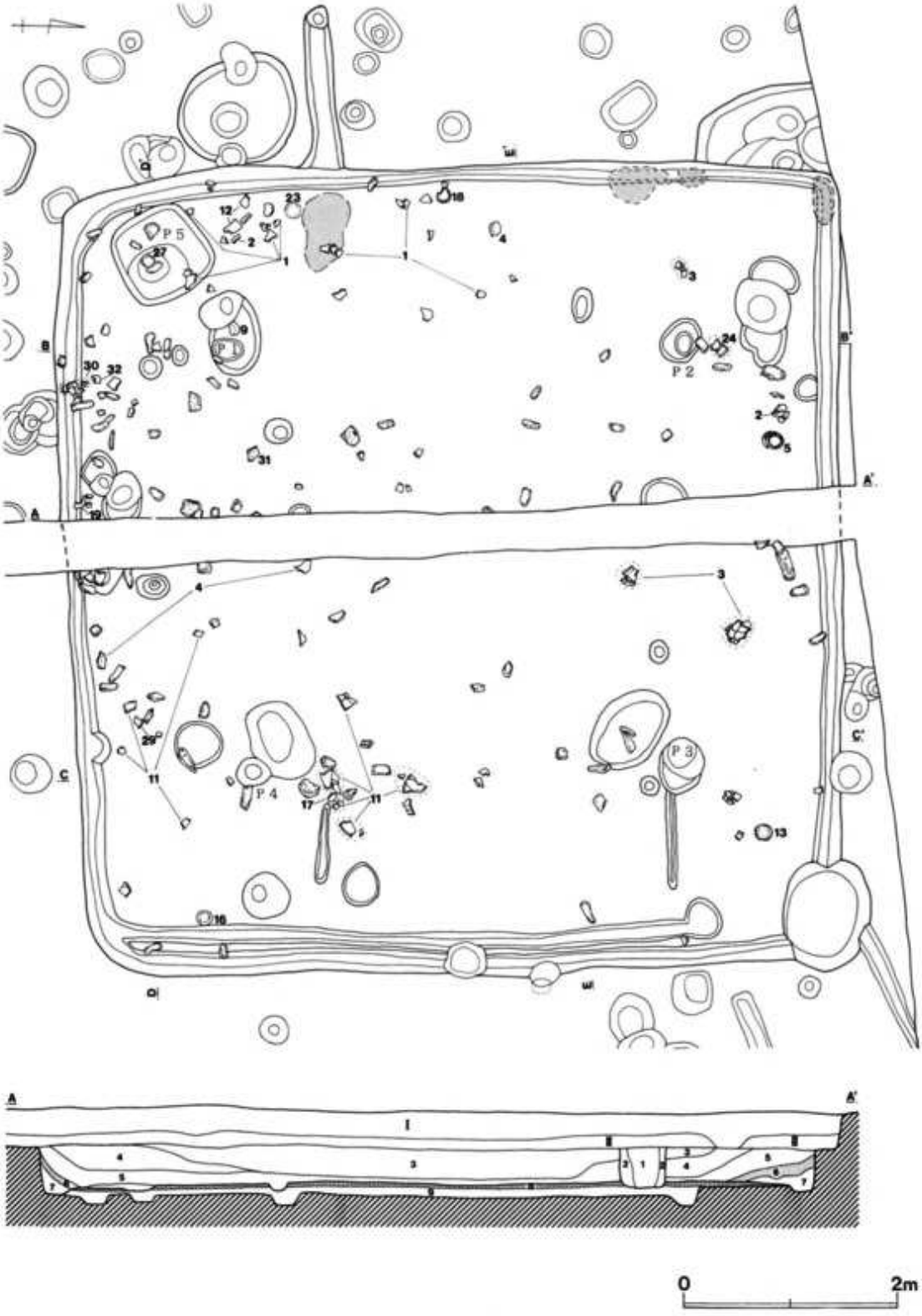
壁は、直線的で垂直ぎみの立ち上がりを示し、確認面からの深さは、最高で40cmほどある。各壁下には、幅18cm～20cm、深さ６cm程度の浅い壁溝が、途切れずに全周している。東壁下では壁溝が二重に検出されているが、壁の補修か若干の拡張に伴うものと思われる。

床は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土（第８層）を埋め戻した貼床式である。若干起伏が見られるが、非常に堅く締まっている。

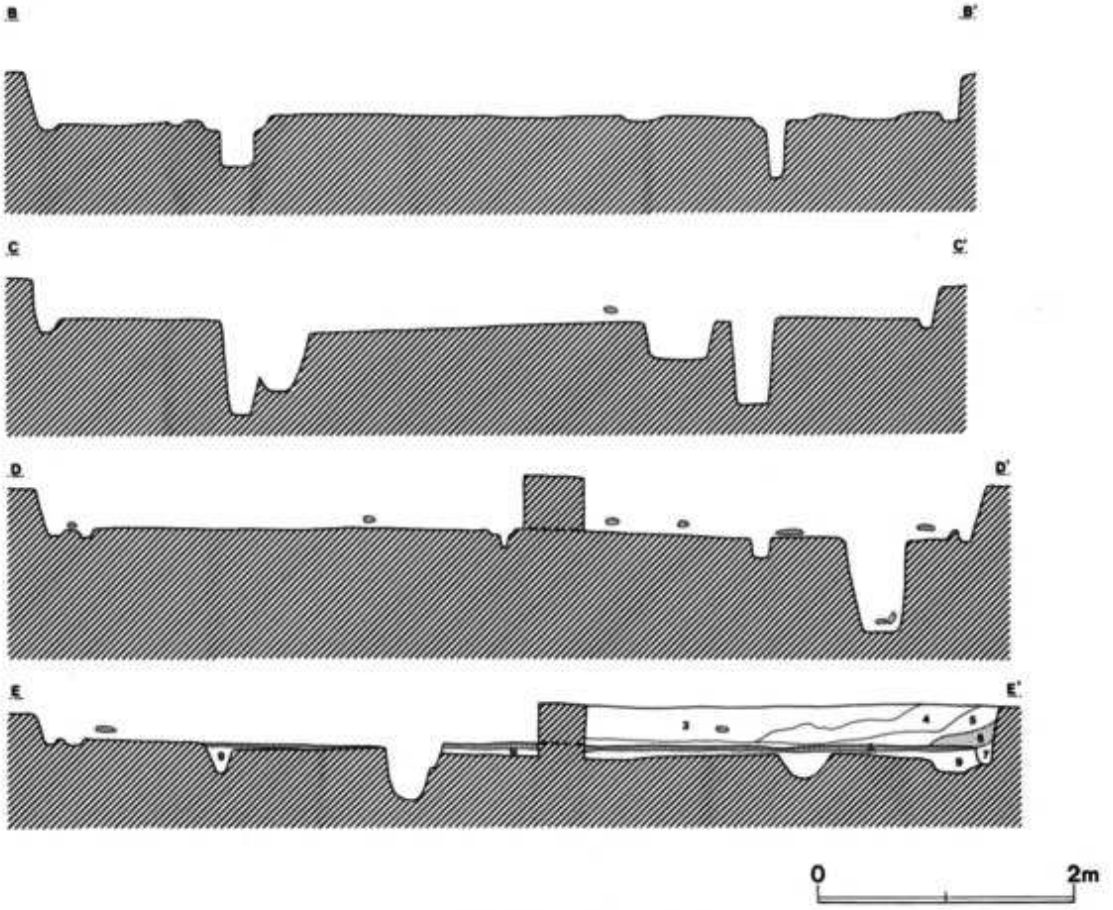
ピットは、住居内から比較的多く検出されているが、本住居との帰属関係やその性格が分かるものはＰ１～Ｐ５の５箇所である。Ｐ１～Ｐ４は、その位置から主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に配置されている。平面形は直径32cm～45cmの円形や楕円形のものが多く、床面からの深さはＰ１の最低40cmからＰ４の最高73cmまでややばらつきが見られる。Ｐ５は、カマド左側の住居南西側コーナー部に位置し、その位置や形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。平面形は、86cm×86cmのコーナー部が丸みをもつ方形であるが、住居の壁とは平行させずに、やや斜めに向いている。その内部東側には、60cm×58cmの方形ぎみで、床面からの深さが80cmを測る深い掘り込みを伴っており、その中からは№27の完形の坏が１個体出土している。

住居の東側壁と主柱穴Ｐ３・Ｐ４の間の床面上には、住居の南北両側壁と平行する東西方向に向いた２条の細い溝が検出されている。いずれも10cm程度の比較的均一な幅で、深さは５cm～10cmを測る。これらの溝は、いずれも壁溝まで達していないが、北側の溝は主柱穴のＰ３から延びており、おそらくは住居内の間仕切り施設と関係する溝ではないかと推測される。

カマド（第９図）は、住居西壁の中央からやや南側に寄った位置に構築されている。天井部や袖部の痕跡やそれらの崩壊土などは確認できなかったが、住居内の他の場所にカマドを構築した痕跡がまったく認められないため、このカマドが住居廃絶時のカマドと考えられる。おそらく本カマドは、住居の廃絶に伴って人為的に破壊され、そのカマド構築材は住居外に持ち出されたものと思われる。燃焼部は、住居床面を掘り窪めずに、床面をそのまま火床にしていたようで、その箇所は非常に良く焼けて赤色化している。煙道部は、約25cm程度の比較的均一な幅で、住居壁とほぼ直角に向



第７図　第13Ａ号住居跡（１）



第８図　第13Ａ号住居跡（２）

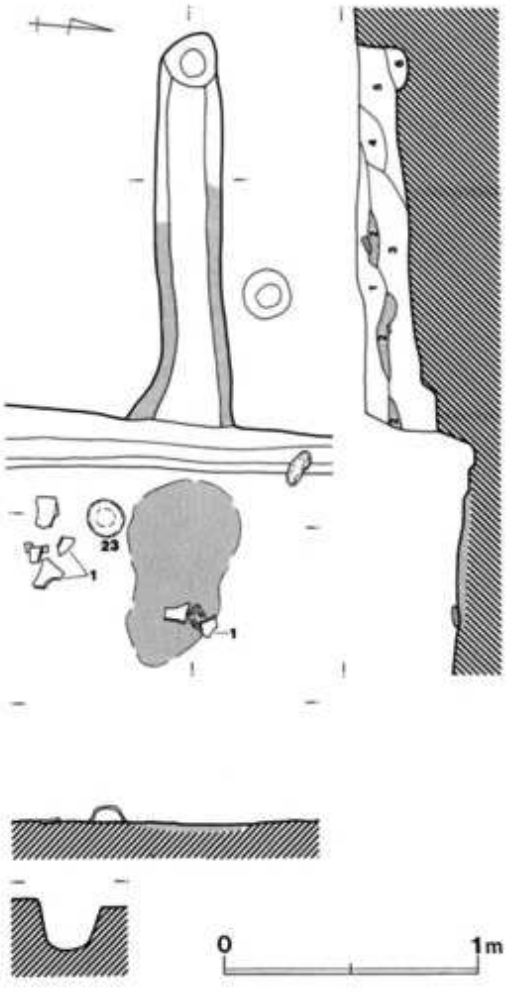
第13Ａ・Ｂ号住居跡土層説明

第Ｉ層：現耕作土。
第Ⅱ層：黒褐色土層（Ｂ軽石混入。）

<ピット>
第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第13Ａ号住居跡>
第３層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第13Ｂ号住居跡>
第９層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第９図　第13Ａ号住居跡カマド

第13Ａ号住居跡カマド土層説明

第１層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：赤褐色土層（焼土ブロックを多量ふくむ。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

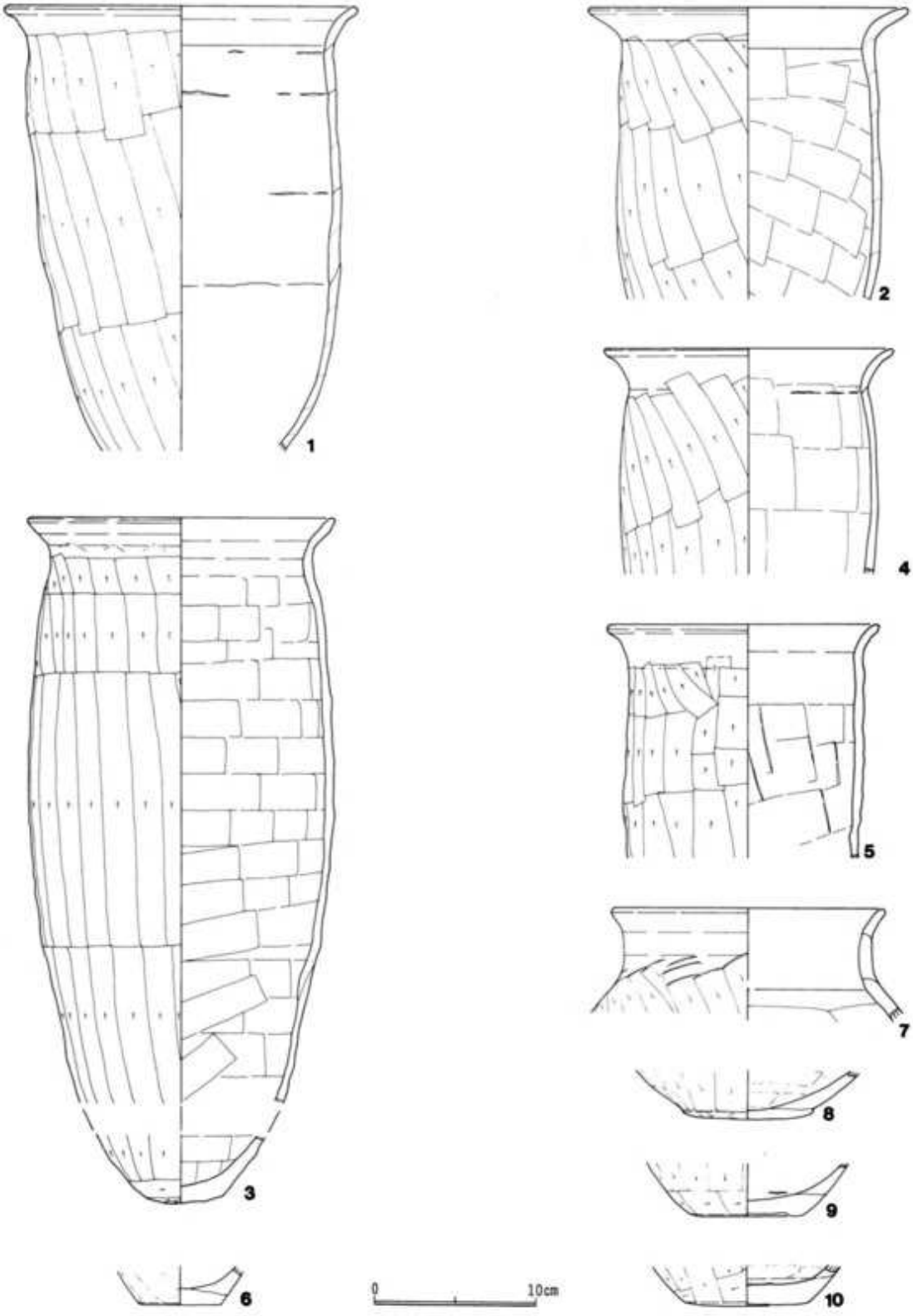
第５層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第６層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

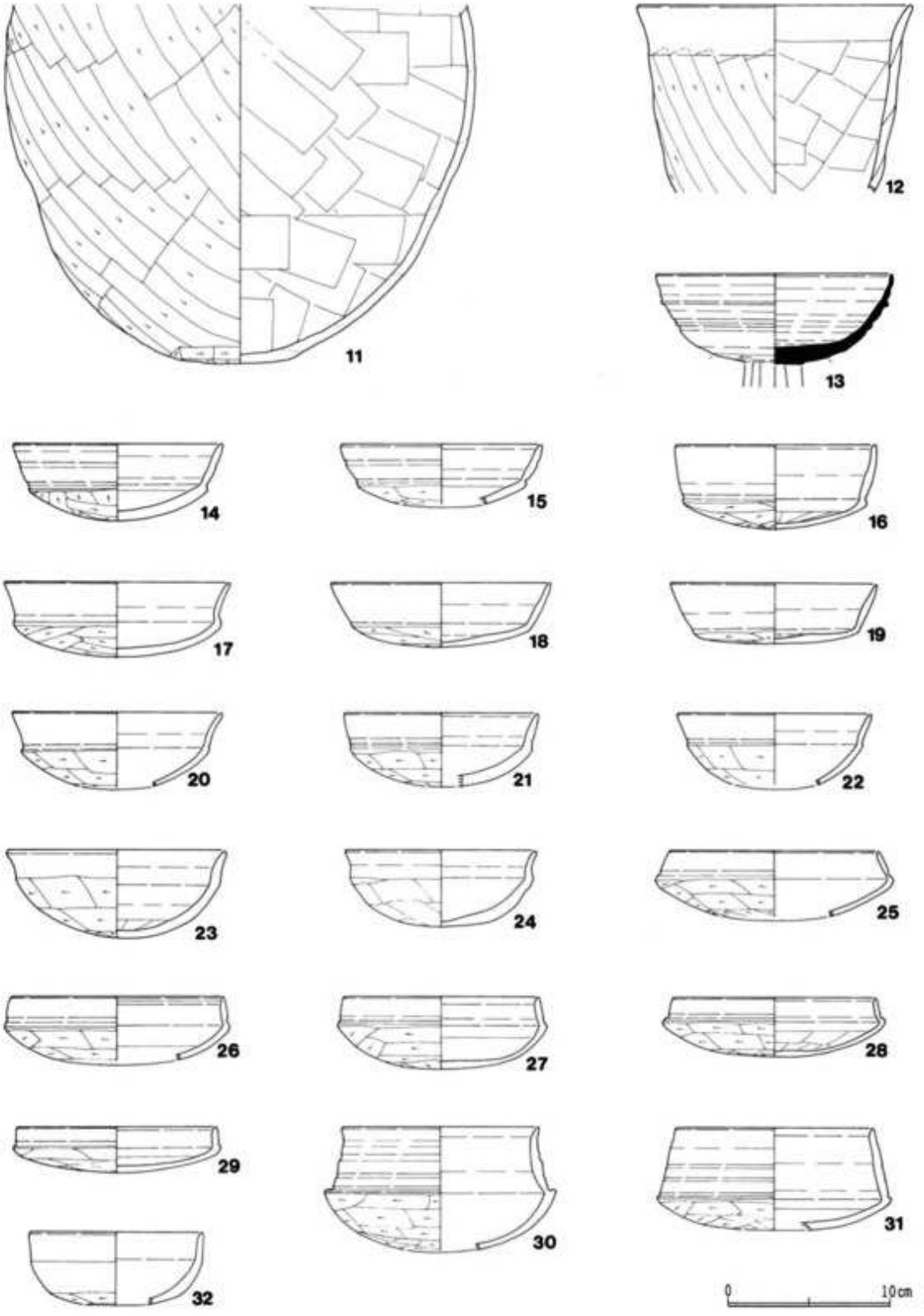
いて壁の外側に1.5mほど延びている。煙道の形態は、煙道部底面を若干上方に傾斜させて地山を掘り抜いたトンネル式と考えられ、覆土上層の第１層と第２層は、天井の崩落土と考えられる。煙道端部はほぼ垂直に立ち上がるものと思われるが、端部の底面にはピット状の窪みが見られる。

住居跡の覆土は、その観察結果から見て、ほぼ自然堆積と考えてよい。壁際の覆土中には焼土粒子や焼土ブロックを均一に含む暗赤褐色土(第６層)が見られるが、これらは住居跡内に炭化材等の火災の痕跡が見られないことから、本住居の住居廃絶後に堆積もしくは流入したものと考えられる。

出土遺物は、住居跡の床面上や覆土中から比較的多くの土器片が出土しているが、完形品に近いものは、床面付近からの出土が多い。また、主柱穴のＰ４内から№14の坏が、貯蔵穴のＰ５内から№27の坏が出土している。この他には、覆土中よりやや粗雑な作りで比較的大きな滑石製の臼玉がＢ地点側で３個・Ｄ地点側で２個の合計５個出土しており、鏃と思われる鉄製の金具がＢ地点側の住居中央部寄りの覆土中から１点出土している。



第10図　第13A号住居跡出土遺物（1）



第11図　第13A号住居跡出土遺物（2）

第12図　第13Ａ号住居跡出土遺物（３）

第13Ａ号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(21.8)、残存高27.4。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外－淡褐色。F. 1/3。G. 床面直上。H. 外面黒斑あり。胴部外面下半は二次焼成を受けている。器形はかなり歪んでいる。
2	甕	A. 口縁部径(19.8)、残存高18.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－明黄褐色。F. 1/4。G. 床面直上。H. 器表面は荒れている。
3	甕	A. 口縁部径(19.0)、推定高(42.4)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 口縁部1/3、胴部1/2。G. 床面直上。
4	甕	A. 口縁部径(18.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外－茶褐色。F. 口縁部1/2。G. カマド煙道内、床面直上。
5	甕	A. 口縁部径16.8。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－暗褐色。F. 上半部のみ。G. 床面直上。H. 外面黒斑あり。
6	甕	A. 底部径5.0。B. 底部円盤外縁での粘土紐積み上げ成形。C. 胴部及び底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外－灰褐色。F. 底部1/4。G. B地点側覆土中。H. 外面は二次焼成を受けて荒れている。
7	甕	A. 口縁部径(17.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外－黄褐色、内－淡橙褐色。F. 口縁部1/4。G. B地点側覆土中。H. 外面黒斑あり。
8	甕	A. 底部径8.0。B. 底部円盤外縁での粘土紐積み上げ成形。C. 胴部及び底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－暗褐色。F. 底部3/4。G. D地点側覆土中。H. 外面は二次焼成を受けている。
9	甕	A. 底部径6.5。B. 底部円盤外縁での粘土紐積み上げ成形。C. 胴部及び底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 底部1/2。G. 床面直上。H. 外面は二次焼成を受けている。
10	甕	A. 底部径7.6。B. 底部円盤外縁での粘土紐積み上げ成形。C. 胴部及び底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－橙褐色。F. 底部のみ。G. 貯蔵穴内。
11	甕	A. 底部径7.0。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－明茶褐色。F. 2/3。G. 床面直上。H. 外面は二次焼成を受けている。
12	小形甕	A. 口縁部径(17.0)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－明橙褐色。F. 口縁1/6。G. 覆土中。
13	須恵器高坏	A. 口縁部径13.9～14.6。B. ロクロ成形。脚部貼り付け。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転篦ケズリの後ナデ。D. 白色粒。E. 内外－暗灰色。F. 坏部ほぼ完形。G. 床面直上。H. 還元焔焼成。脚部は三方透かし。
14	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－淡褐色。F. 1/2。G. 主柱穴Ｐ４内。H. 内外面に黒斑あり。

15	坏	A.口縁部径(12.4)、残存高3.7。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/4。G.B地点側覆土中。
16	坏	A.口縁部径12.4、器高5.3。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.完形。G.床面直上。H.外面に黒斑あり。
17	坏	A.口縁部径(14.0)、器高4.7。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/4。G.D地点側覆土中。
18	坏	A.口縁部径(13.6)、器高4.0。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.3/4。G.B地点側覆土中。H.外面に黒斑あり。
19	坏	A.口縁部径12.7、器高3.8。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.B地点側覆土中。
20	坏	A.口縁部径13.0。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－橙褐色。F.1/2。G.D地点側覆土中。
21	坏	A.口縁部径(12.0)、器高(4.5)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.1/4。G.覆土中。
22	坏	A.口縁部径(12.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.口縁部1/2。G.B地点側覆土中。
23	坏	A.口縁部径13.6、器高5.5。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.完形。G.床面直上。H.外面に黒斑あり。
24	坏	A.口縁部径(11.8)、器高4.7。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗茶褐色。F.1/2。G.床面直上。
25	坏	A.口縁部径(12.8)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/2。G.D地点側覆土中。
26	坏	A.口縁部径(13.0)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.口縁部1/6。G.貯蔵穴内。H.外面に黒斑あり。
27	坏	A.口縁部径12.0、器高4.5。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.完形。G.床面直上、貯蔵穴内。
28	坏	A.口縁部径(12.6)、器高3.6。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.1/4。G.D地点側覆土中。
29	坏	A.口縁部径12.4、器高2.8。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/3。G.床面付近。
30	坏	A.口縁部径(12.2)、残存高7.6。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、黒色粒。E.内外－茶褐色。F.1/3。G.B地点側覆土中。
31	坏	A.口縁部径(12.2)、残存高6.3。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、黒色粒、白色粒。E.外－暗茶褐色、内－明茶褐色。F.1/3。G.床面付近。
32	坏	A.口縁部径(10.8)、器高4.5。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗褐色、内－茶褐色。F.1/3。G.B地点側覆土中。
33	鉄製品 鏃	A.口径1.9×1.4、長さ1.7、厚さ0.1～0.2。C.外面の中程に稜か段をもつ。D.鉄製。F.ほぼ完形。G.B地点側覆土中。
34	石製品 白玉	A.直径1.8、厚さ0.9、重さ4.3g。B.管玉状の形態から切断。C.上面及び側面研磨。下面未調整。D.滑石製。E.淡白褐色。F.完形。G.D地点側覆土中。
35	石製品 白玉	A.直径1.8、厚さ0.4、重さ2.4g。B.管玉状の形態から切断。C.側面研磨。上下両面未調整。D.滑石製。E.淡白褐色。F.完形。G.B地点側覆土中。
36	石製品 白玉	A.直径1.6、厚さ0.9、重さ3.2g。B.管玉状の形態から切断。C.上面及び側面研磨。下面未調整。D.滑石製。E.淡白褐色。F.完形。G.B地点側覆土中。

37	石製品 白　玉	A.直径1.5、厚さ0.6、重さ2.3g。B.管玉状の形態から切断。C.側面研磨。上下両面未調整。D.滑石製。E.淡白褐色。F.完形。G.D地点側覆土中。
38	石製品 白　玉	A.直径1.1、厚さ0.9、重さ1.3g。B.管玉状の形態から切断。C.側面研磨。D.滑石製。E.暗茶褐色。F.完形。G.B地点側覆土中。

第13B号住居跡（第14・15図）

本住居跡は、第13A号住居跡の床面下より検出されており、先に述べたように第13A号住居跡の拡張前の住居と推測される。そのため，住居の大半は第13A号住居跡によってすでに床面近くまで削平されており、遺存状態はかろうじてその痕跡を留める程度である。

平面形は、ややコーナー部が丸みをもつ方形で、規模は東西方向5.80m、南北方向5.42mを測る。住居跡の主軸方位は、N－90°－Eをとり、第13A号住居跡と同じく、ほぼ東西方向を向いている。

壁は、ほとんど残存しておらず、その形態は明確ではないが、各壁下には浅い壁溝が見られる。壁溝は、南北両壁下と西側壁下は途切れずに巡っているが、カマドが構築されていたと考えられる東側壁下の中央部付近だけ途切れている。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に平坦に作られている。住居中央部は比較的堅く締まっているが，壁際に近い周辺部はやや軟弱である。

住居内には多数のピットが確認されたが、本住居跡と関連するものは、P１～P７までの７箇所と考えられる。P１～P４は、その位置から主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に配置されている。形態は、直径38cm～54cmの円形で、床面からの深さはP３の最低70cmからP４の最高81cmまであり、いずれも比較的深い。P５は、住居南東側コーナー部付近に位置する。他のピットに切られて形態などは明確ではないが、72cm×100cm程度の楕円形ぎみの形態である。床面からの深さは14cmと浅いが、その位置からは貯蔵穴の可能性も推測される。P６は、主柱穴P２とP３の間に位置する。平面形は、52cm×43cmの不整円形で、床面からの深さは13cmを測る。このP６から住居北側壁に向かって小溝が直線的に延びており、あるいは第13A号住居跡の小溝と同じく、住居内の間仕切り施設と関係する溝の可能性もあろう。P７は、住居の南側に位置する。38cm×114cmの不整形で、床面からの深さは22cmを測る。その性格は不明であるが、あるいは住居掘り方の一部であった可能性も推測される。

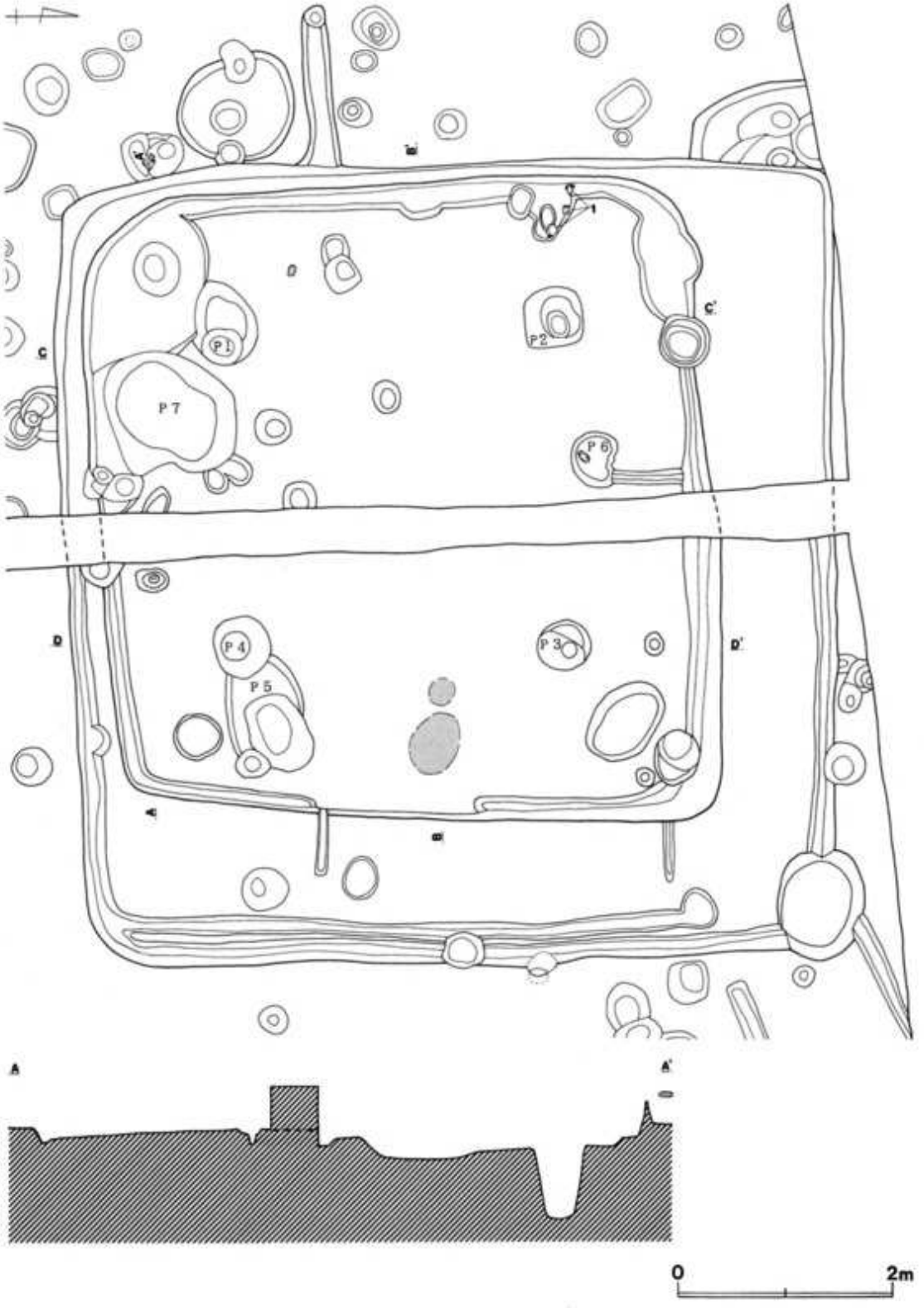
カマドは、すでに削平されて確認することができなかったが、住居東側の壁際中央部の床面上に、カマド燃焼部の火床と推測される焼けて赤色化した箇所が見られることから、おそらくカマドはその住居東側壁の中央付近に付設されていたものと考えられる。

出土遺物は、土器片がごく少量出土しただけであるが、住居西側壁下の壁溝内より第13図No.１の完形に近い有段口縁坏が出土している。

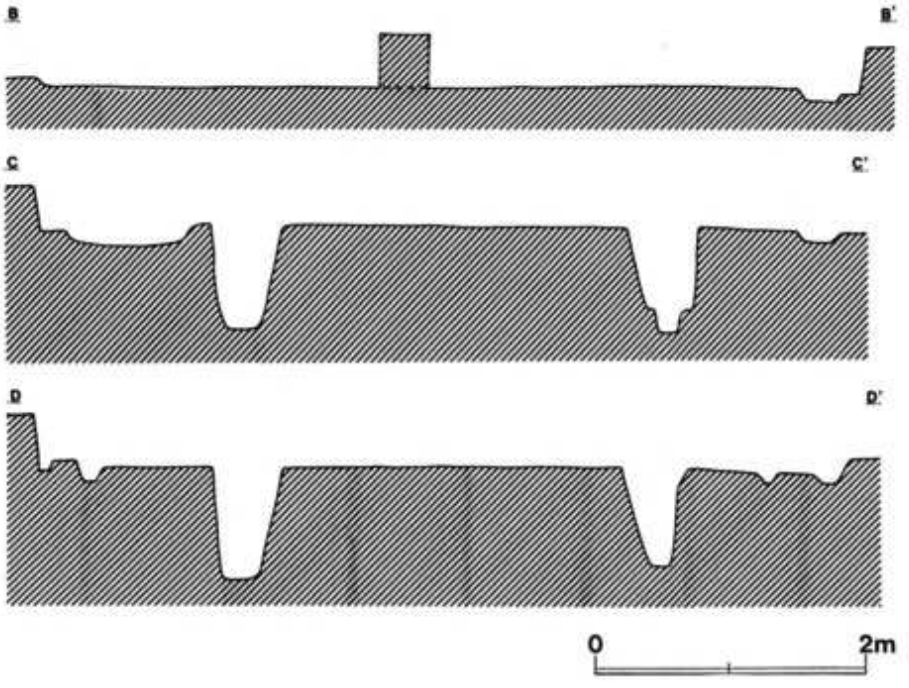
第13図　第13B号号住居跡出土遺物

第13B号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径13.2、器高3.8。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－暗褐色。F.体部ほぼ完形。G.西側壁溝内。H.器表面は荒れている。



第14図　第13B号住居跡（1）



第15図　第13B号住居跡（2）

第14号住居跡（第16図）

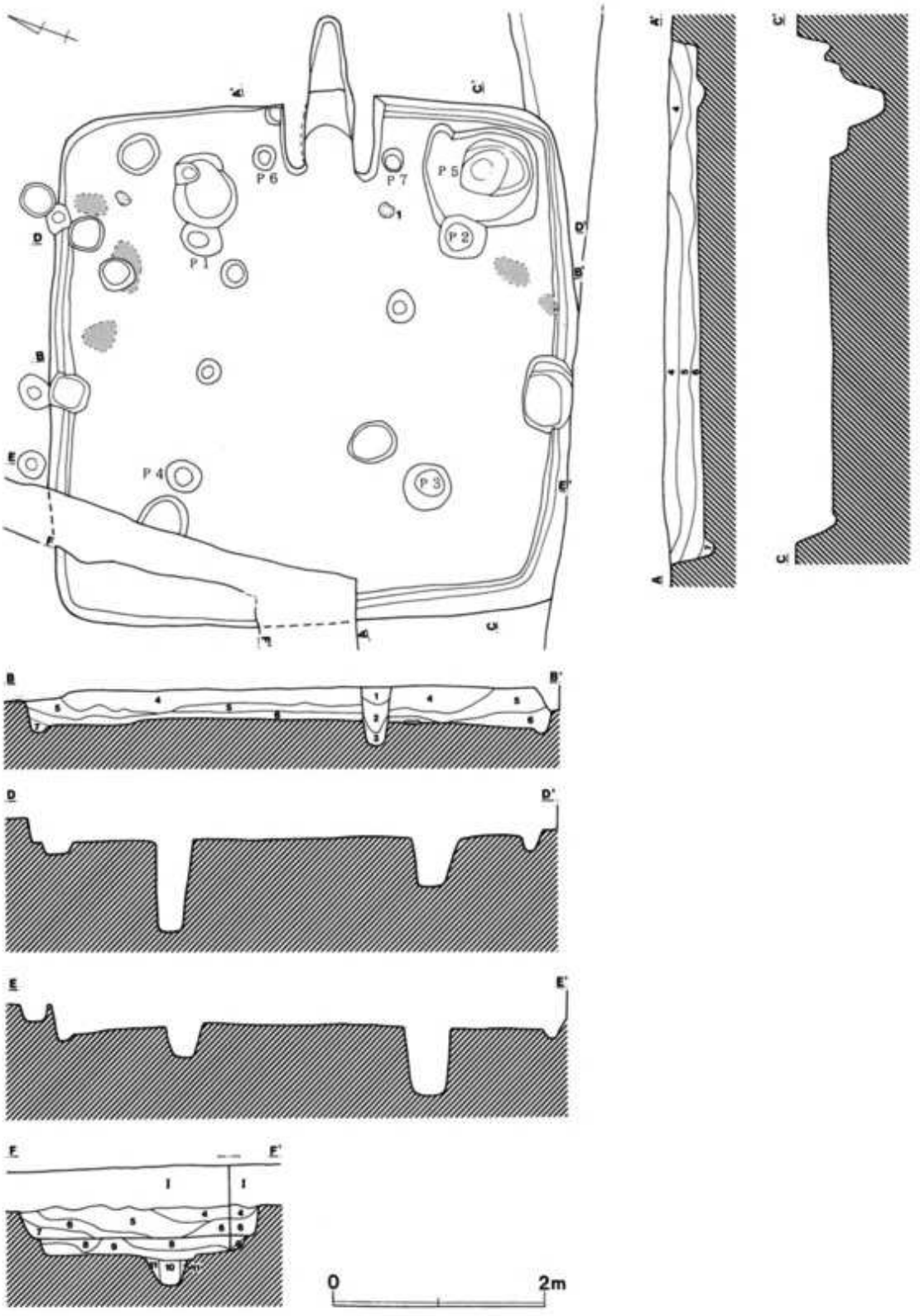
B地点とD地点の調査区南側に位置し、D地点より住居跡の大半が、B地点より住居の北西側コーナー部が検出されている。北側には第13号住居跡が、東側には第17号住居跡が近接している。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居南東側コーナー部の上面を中世の第５号溝跡が切っている。また、本住居跡は、B地点側で第５号掘立柱建物跡の柱穴と一部重複しているが、土層観察の結果や出土土器の比較では本住居跡の方が新しいようである。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形である。規模は、東西方向4.82m、南北方向4.90mを測る。住居の主軸方位は、N－70°―Eを向いている。

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmある。各壁下には幅約20cm・深さ10cm前後の壁溝が見られるが、住居の北東側コーナー部付近と北西側コーナー部付近の壁下には巡っておらず、途切れている。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居北側と南側の壁際に近い床面上には、炭化物の分布が数箇所で認められたが、本住居跡が焼失したような形跡は見られない。

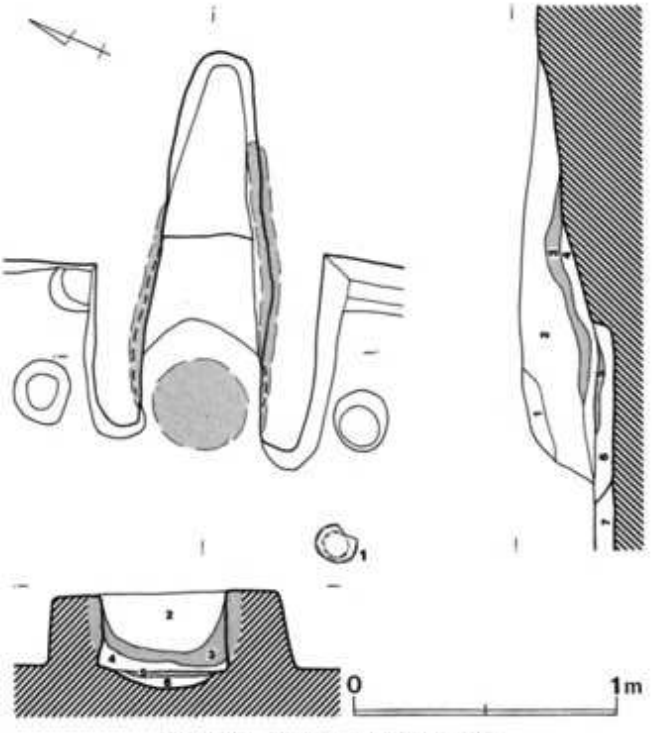
住居跡内からはピットが多く検出されているが、本住居跡に関係すると思われるものは、Ｐ１～Ｐ７の７箇所である。Ｐ１～Ｐ４は、その位置から主柱穴と考えられるものである。ほぼ住居の対角線上に配置されているが、その配置は住居跡の平面形と相似せず、やや平行四辺形状に歪んだ配置をとっている。形態は、直径30cm～42cmの円形で、床面からの深さはＰ１の最低30cm～Ｐ３の最高60cmまでややばらつきがある。Ｐ５は、いわゆる貯蔵穴と考えられるもので、カマド右側の住居



第16図　第14号住居跡

第14号住居跡土層説明

第Ⅰ層：現 耕 作 土。
第１層：淡灰褐色土層（ロームブロックを均一に、Ｂ軽石・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰褐色土層（ローム粒子・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗 褐 色 土 層（ロームブロックを均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗 灰 色 土 層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗黄褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗 褐 色 土 層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第９層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
＜第５号掘立柱建物跡柱穴覆土＞
第10層：暗 褐 色 土 層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第11層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第17図　第14号住居跡カマド

第14号住居跡カマド土層説明

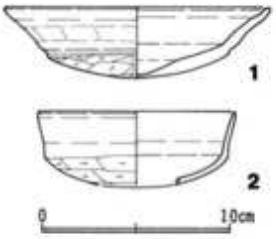
第１層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗灰色土層（鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：赤褐色土層（焼土層。）
第６層：暗灰色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。住居掘り方埋土。）

南東コーナー部に位置している。平面形は、102cm×90cmのコーナー部が丸みをもつ方形ぎみである。断面は、東側の住居壁寄り側が２段に深くなる形態で、床面からの深さは53cmある。Ｐ６とＰ７は、カマドを挟んで対状に位置している。形態はいずれも直径22cmの円形で、床面からの深さはＰ６が8cm・Ｐ７が15.5cmと比較的浅い。その性格については不明であるが、その位置や配置からはカマドと関係する可能性が高いと思われる。

カマド（第17図）は、住居東側壁の中央から若干南側に寄った位置に、壁に対してほぼ直角に付設

されている。規模は、全長150cm・最大幅98cmを測る。天上部はすでに崩壊しており、袖部と煙道部が残存している。袖部は、左右とも地山ローム土を掘り残して直接袖にしたもので、粘土等による被覆の痕跡は見られない。燃焼部は、非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面の火床は、当初は住居の床面とほぼ同じ高さ(第5層)であったが、その後上面にもう一面(第3層)形成されている。煙道部は、燃焼部の内法とほぼ同じ幅で、住居の壁外に約80cm延びたところで端部が削平されている。煙道部底面は、燃焼部との境に段をもたず、燃焼部の火床から直接つながってやや上方に直線的に傾斜させている。この燃焼部火床からの直接的な底面の傾斜は、排煙機能を高めるための工夫と思われる。一般的には、燃焼部奥側に堆積した土や灰を利用したり、あるいは意図的に土を盛って傾斜面を作る場合が多く見られるが、本住居跡のカマドの場合は、袖の構築と同様に、地山ローム土を直接削って傾斜面を作り出している。

出土遺物は、No.1の完形の坏がカマド右袖前の床面上に伏せた状態で出土しており、その他では覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。



第18図　第14号住居跡出土遺物

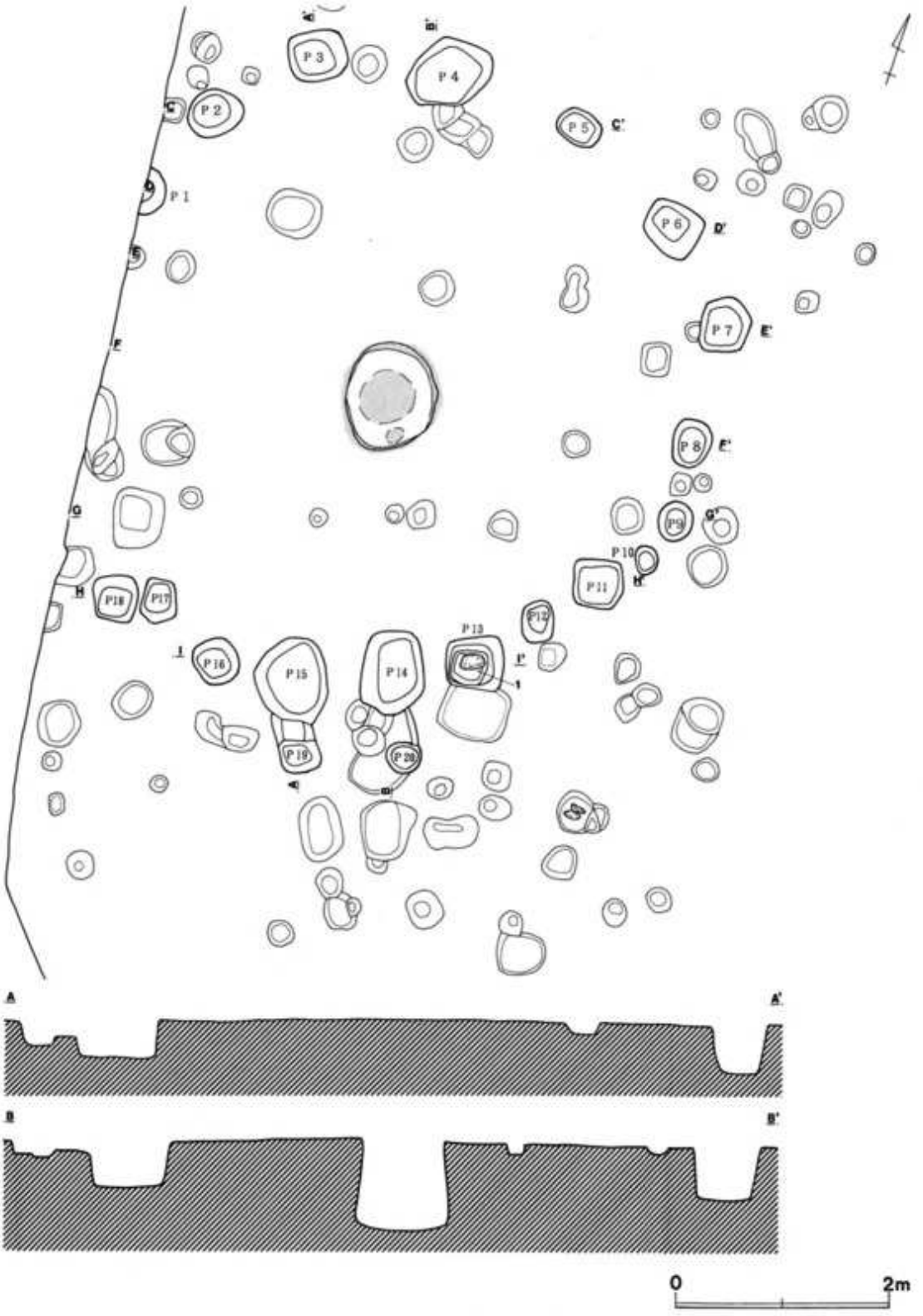
第14号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径14.0、器高3.8。C.口縁部内外面ヨコナデの後、口縁部外面筦ナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面直上。H.外面に黒斑あり。
2	坏	A.口縁部径(10.4)、推定高(3.9)。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒。E.内外ー淡褐色。F.口縁部1/3破片。G.覆土中。

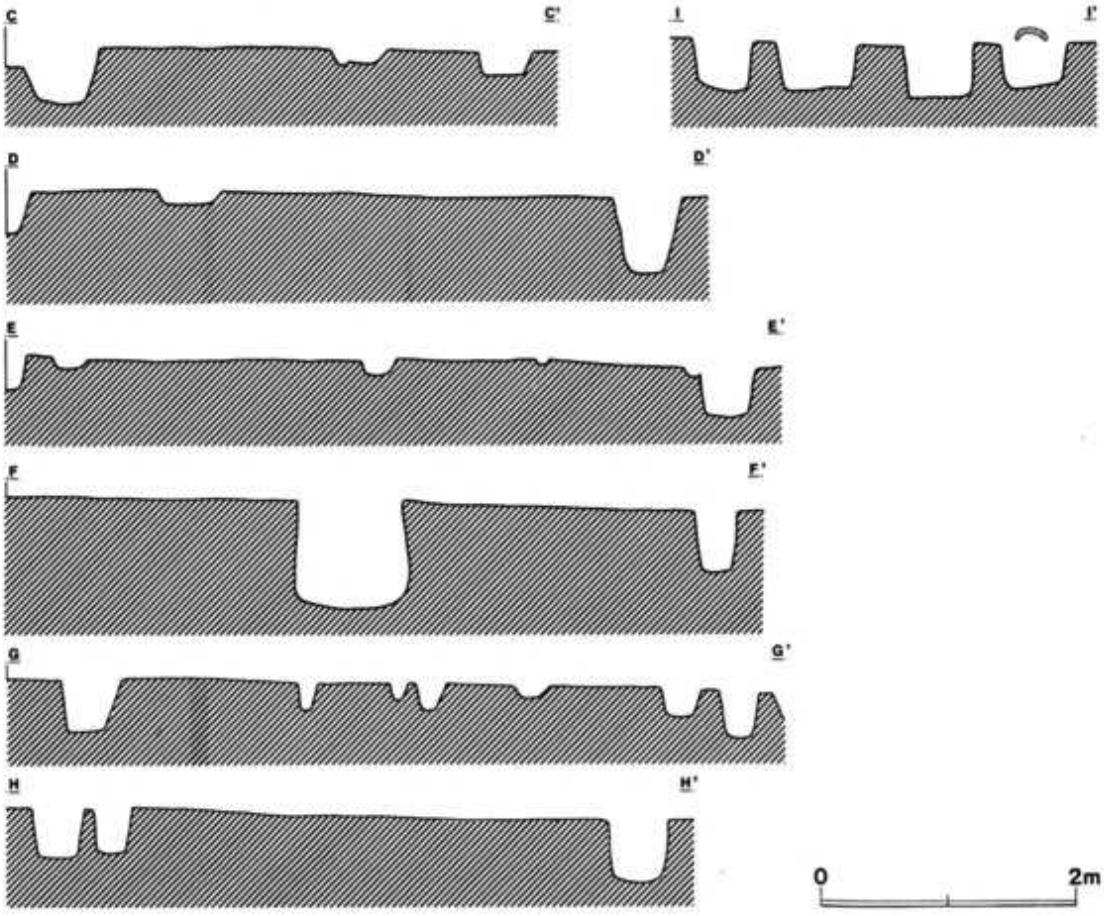
第15号住居跡（第19・20図）

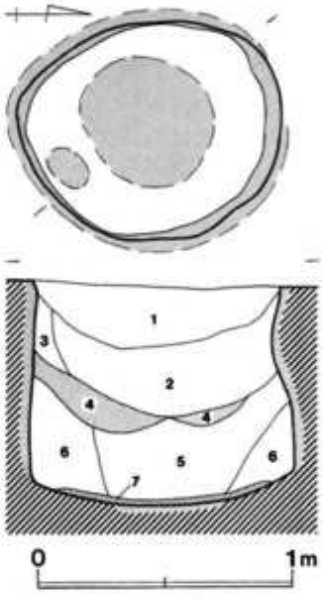
B地点の調査区西端に位置する。住居跡は、すでに床面下まで削平されており、かろうじて確認できたのは、炉と壁際を巡っていたと考えられる側柱穴と入口部の施設と推測される対ピットだけである。

調査区内で検出されたほぼ等間隔に巡る側柱穴と、それに関係すると思われるピットは、P1～P18の18箇所である。これらの側柱穴やピットの配列から推測すると、本住居跡は直径約6.5m程度の円形に近い形態であったと思われる。側柱穴(P1～P8，P11，P13～P16，P18)は、規模が40cm～50cm前後のやや角をもった長方形ぎみの形態のものが主体で、確認面からの深さはP5が17cmで他の側柱穴に比べて極端に浅い他は、いずれも40cm～50cmで比較的しっかりしている。これらの側柱穴の中で、住居跡の南側に位置するP14とP15、及び北側に位置するP3とP4は、他の側柱穴に比べて規模が大きい形態をとっている。これらは、住居の炉を挟んで対峙する位置関係にあり、おそらく住居構造の上で中軸的な役割をもつ柱の柱穴であったものと推測される。P14とP15は、その南側に浅い溝状の掘り込みによって連結するP19とP20の小規模な対ピットをもつことから、住居の入口部と考えられる。その入り口部の施設は、P19とP20の南側にもさらにピットが対になって列状に延びる様相も窺えるが、あまり明確ではない。



第19図　第15号住居跡（1）





第15号住居跡炉土層説明

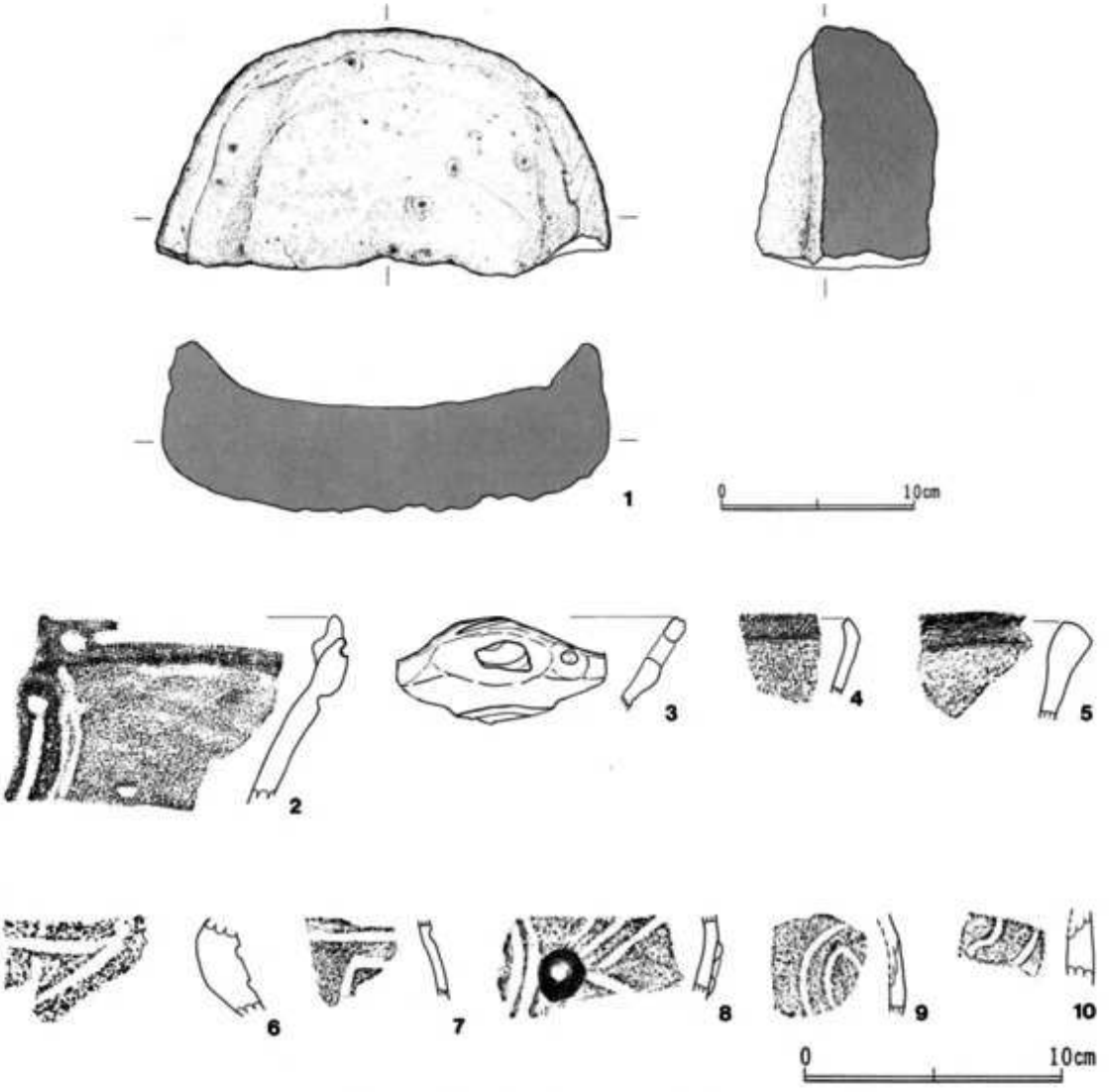
第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第7層：黒色土層（炭化粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第20図　第15号住居跡（2）

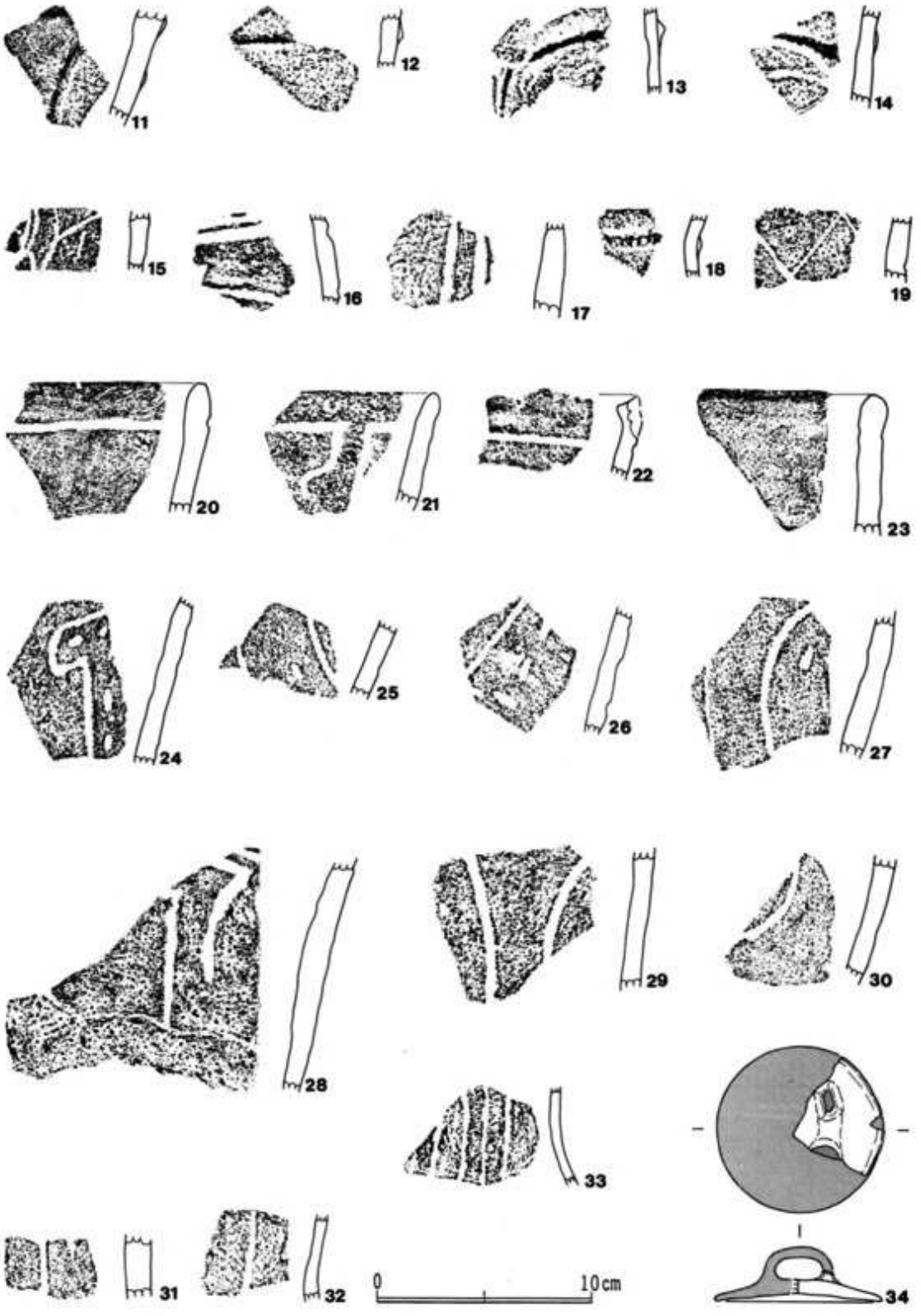
ピット(P 9, P10, P12, P17)は、いずれも住居の南東側の側柱穴間かその近くに位置している。それらの性格については不明であるが、いずれも側柱穴に比べて小規模で、確認面からの深さも20cm前後の浅いものである。

炉は、住居中央部の真ん中から若干東側に寄った位置にある。平面形は106cm×85cmの南北方向に長い楕円形に近い形態である。炉壁は、ほぼ垂直かあるいは若干オーバーハングしており、確認面からの深さは86cmある。炉の底面は、やや中央部が深く若干湾曲ぎみであるが、比較的広く平坦で、底面直上には炭化粒(第7層)が層状に薄く被覆していた。炉壁及び底面は、非常に良く焼けて赤色化し硬化している。火床は、炉を掘削した当初の底面と覆土中位(第4層)の2面が見られる。炉の覆土中からは、炉壁の崩壊土と思われる焼土塊が多数出土している。

出土遺物は、炉や柱穴内の覆土中及び本住居跡の遺構確認面付近から、縄文時代後期の称名寺Ⅱ



第21図　第15号住居跡出土遺物（1）



第22図　第15号住居跡出土遺物（2）

式～堀之内１式土器の土器片が多く出土している(第21・22図)。また、土器以外では入口部右隣の側柱穴Ｐ13内から、石皿の破片(第21図No.１)が１個出土している。

本住居跡の時期は、遺構の遺存状態が悪く、本住居跡に確実に伴うと考えられる遺物がほとんどないため明確ではないが、土器片の出土状態から推測すると、おそらく縄文時代後期の称名寺Ⅱ式期～堀之内１式期の頃ではないかと思われる。

第16号住居跡出土遺物観察表

1	石　皿	A.残存幅23.5cm、残存長11.8cm、厚さ4.9cm、重量2620g。C.表面は良く擦れている。裏面には小さな窪み状の凹凸が顕著に見られる。D.多孔質安山岩。E.暗灰色。F.1/3。G.Ｐ13内。
2	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内面は箆状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はナデの後に沈線の始点に刺突もつ。口端部に刺突を持つ。D.片岩粒、砂粒。E.内外－淡褐色、肉－黒褐色。F.口縁部破片。G.Ｐ８内。
3	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内面は箆状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はナデの後に横位沈線。刺突。横ナデ。D.片岩粒、砂粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.突起部破片。G.炉内。
4	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面ともは箆状工具による横ナデ。工具痕あり。D.片岩粒、砂粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部破片。G.炉内。
5	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも箆状工具による横ナデ。工具痕あり。D.片岩粒、砂粒、白色粒。E.内外－淡褐色。F.口縁部破片。G.炉内。
6	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。沈線による三角形状の施文。D.砂粒、白色粒。E.内外－褐色。F.胴部破片。G.覆土中。
7	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。沈線による三角形状の施文。D.白色粒。E.内外－淡褐色。F.胴部破片。G.Ｐ4内。
8	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。隆帯貼付後刺突。沈線による三角形状の施文。D.砂粒、長石、黒雲母。E.内外－淡褐色。F.胴部破片。G.覆土中。
9	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.外面は横ナデ。沈線によるＪ字状文の施文。D.砂粒。E.内外－淡褐色。F.胴部破片。G.覆土中。H.内面の剥離が酷い。
10	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.外面は横ナデ。沈線によるＪ字状文の施文。D.砂粒、長石。E.内外－淡褐色、肉－灰色。F.胴部破片。G.覆土中。H.内面の剥離が酷い。
11	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。微隆起。D.砂粒、長石。E.内外－淡褐色。F.胴部破片。G.炉内。
12	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。微隆起。D.砂粒。E. 外－淡褐色、内－橙褐色。F.胴部破片。G.覆土中。H.内外面の剥離が酷い。
13	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。微隆起。D.砂粒。E. 内外－茶褐色。F.胴部破片。G.覆土中。H.内外面の剥離が酷い。
14	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。微隆起に沈線を施文。D.砂粒。E.内外－淡橙褐色。F.胴部破片。G.炉内。H.外面の剥離が酷い。
15	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも横ナデ。微隆起に沿って沈線を施文。D.砂粒。E.内外－淡橙褐色。F.胴部破片。G.炉内。
16	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも箆状工具による横ナデ。工具痕あり。３条の沈線を施文。D.片岩粒、砂粒。E. 外－淡橙褐色、内－灰色。F.胴部破片。G.炉内。
17	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面とも箆状工具による横ナデ。工具痕あり。２条の沈線を施文。D.砂粒、白色粒。E. 外－灰褐色、内－淡褐色。F.胴部破片。G.炉内。18
18	深　鉢	B.粘土紐積み上げ成形。C.外面は横ナデ。隆帯上にキザミあり。D.砂粒。E.内外－橙褐色。F.胴部破片。G.覆土中。

19	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面とも篦状工具による横ナデ。斜格子状の沈線を施文。D. 砂粒、片岩粒。E. 内外－暗褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。
20	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。口端部はナデ。外面はナデの後縄文を施文し、その後１条の沈線を施文。D. 白色粒、砂粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 口縁部破片。G. P14内。
21	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はナデの後１条の沈線を施文。D. 砂粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。H. 剥離が酷い。
22	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はナデの後１条の沈線を施文。D. 砂粒。E. 内外－橙褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。H. 一部剥離。
23	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面とも細い篦状工具による横ナデ。工具痕あり。D. 砂粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 口縁部破片。G. 炉内。
24	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はＪ字状の沈線を施文後、内側に列点を加える。D. 砂粒、白色粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。
25	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は横ナデ。外面はＪ字状の沈線を一部、列点を施文。D. 砂粒、白色粒。E. 内外－橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。H. 内面は剥離が酷い。
26	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は横ナデ。外面はＪ字状の沈線を一部、列点を施文。D. 砂粒、白色粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。
27	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面はＪ字状の沈線を一部、列点を施文。D. 砂粒。E. 外－褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。H. 煤の付着あり。内面は剥離が酷い。
28	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面はＪ字状の沈線を一部を施文。D. 砂粒、片岩粒。E. 外－淡橙褐色。F. 胴部破片。G. P11内。H. 内外面は剥離。
29	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はＪ字状の沈線を一部を施文。D. 砂粒、片岩粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。
30	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面はＪ字状の沈線を一部を施文。D. 砂粒、片岩粒。E. 内外－橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。
31	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面は１条の沈線を縦位に施文後ミガキ。D. 砂粒、片岩粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。H. 内面は剥離。
32	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面は１条の沈線を縦位に施文。D. 砂粒。E. 内外－橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。33
33	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は篦状工具による横ナデ。工具痕あり。外面は５条の沈線を縦位に施文。D. 砂粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 胴部破片。G. 炉内。
34	蓋	A. 直径(7.8)、残存高(1.5)。B. 鈕は貼り付け。C. 内面は篦状工具によるナデ。工具痕あり。外面はナデ。D. 片岩粒、砂粒。E. 外－淡褐色、内肉－黒褐色。F. 1/4。G. 覆土中。H. 鈕は橋状のものが２個対に付く形態と思われる。

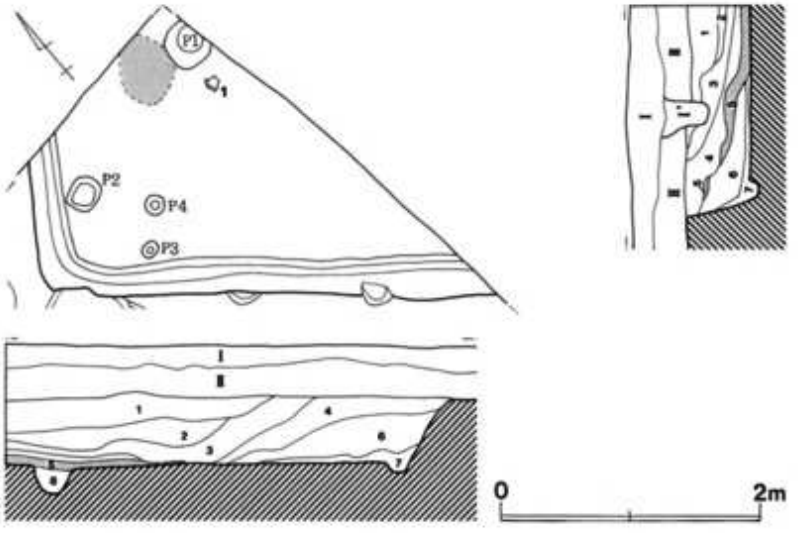
第16号住居跡（第23図）

Ｄ地点の調査区北東隅に位置し、西側には第13号住居跡が、南側には第17号住居跡が近接している。調査区内では住居跡の西側コーナー部付近が検出されただけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居西側コーナー部の上面の一部を、第20号溝跡に切られている。

住居南西壁の方位は、N—52°—Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。調査区内で検出された住居北西壁と南西壁の壁下には、幅は20cm程度で深さ6cm前後の比較的整った形態の壁溝が巡っている。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体に平坦に作られており、比較的堅く締まっている。

ピットは、調査した範囲内ではＰ１～Ｐ４の４箇所が検出されているが、その性格が判明するものはない。Ｐ１は、直径34cmの円形、深さは25cmを測り、比較的しっかりしたピットである。他のＰ



第23図　第16号住居跡

第16号住居跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石混入。）
第１層：暗茶褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗灰褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

２～Ｐ４は、小規模で浅いものである。

覆土は、概ね自然堆積を示すが、中央部の床面上には住居廃絶後に焼土粒子や焼土ブロックを均一に含む暗赤褐色土（第５層）が薄く堆積している。

出土遺物（第24図）は比較的少なく、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。

第24図　第16号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高4.5。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外－淡茶褐色。F. 体部1/4破片。G. 覆土中。

第17号住居跡（第26図）

Ｄ地点の調査区東端に位置し、北側には第16号住居跡が、西側には第13号住居跡や第14号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居跡の南側壁の一部上面を中世の第５号溝跡に切られている。

平面形は不明であるが、検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもった方形か長方形と考えられる。規模は、南北方向が6.50mをあり、東西方向は最高3.75mまで測れる。

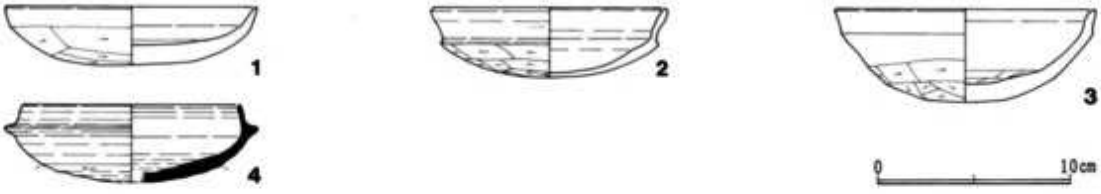
壁は、直線的にやや外傾して立ち上がりで、確認面からの深さは56cmある。各壁下には、幅20cm・深さ５cm～10cm程度の壁溝が途切れずに巡っている。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居の中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

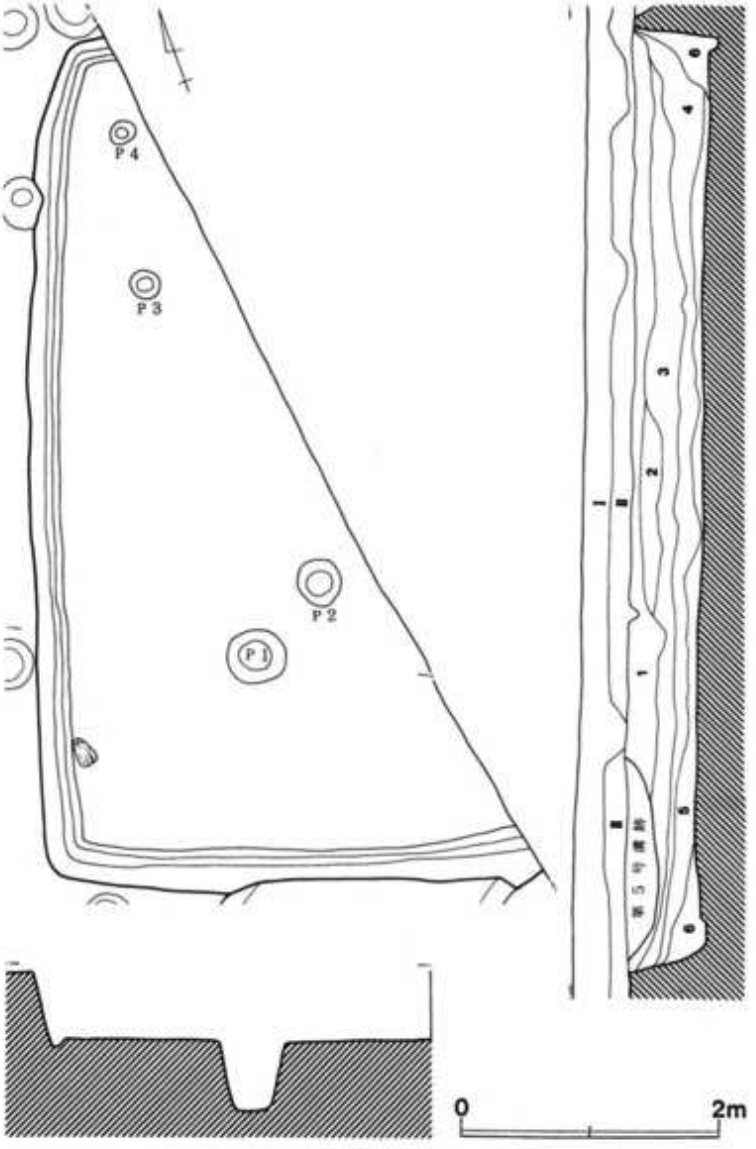
ピットは、調査された範囲内では４箇所検出されている。Ｐ１は、その位置から４本主柱穴の一部と推測されるもので、46cm×40cmのやや楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは54.5cmある。他のピットは、本住居跡との関連その性格は明確ではないが、Ｐ２は直径34cm・深さ12.5cm、Ｐ３は直径22cm・深さ５cm、Ｐ４は直径20cm・深さ６cmである。

覆土は、土層観察の結果では自然堆積と考えてよいが、他の住居跡の覆土の状況とはやや異なり、覆土上半（第２・３層）には風化したロームブロックやローム粒子が多量に見られる。

出土遺物は、覆土中から土器片が少量出土しただけである。



第25図　第17号住居跡出土遺物



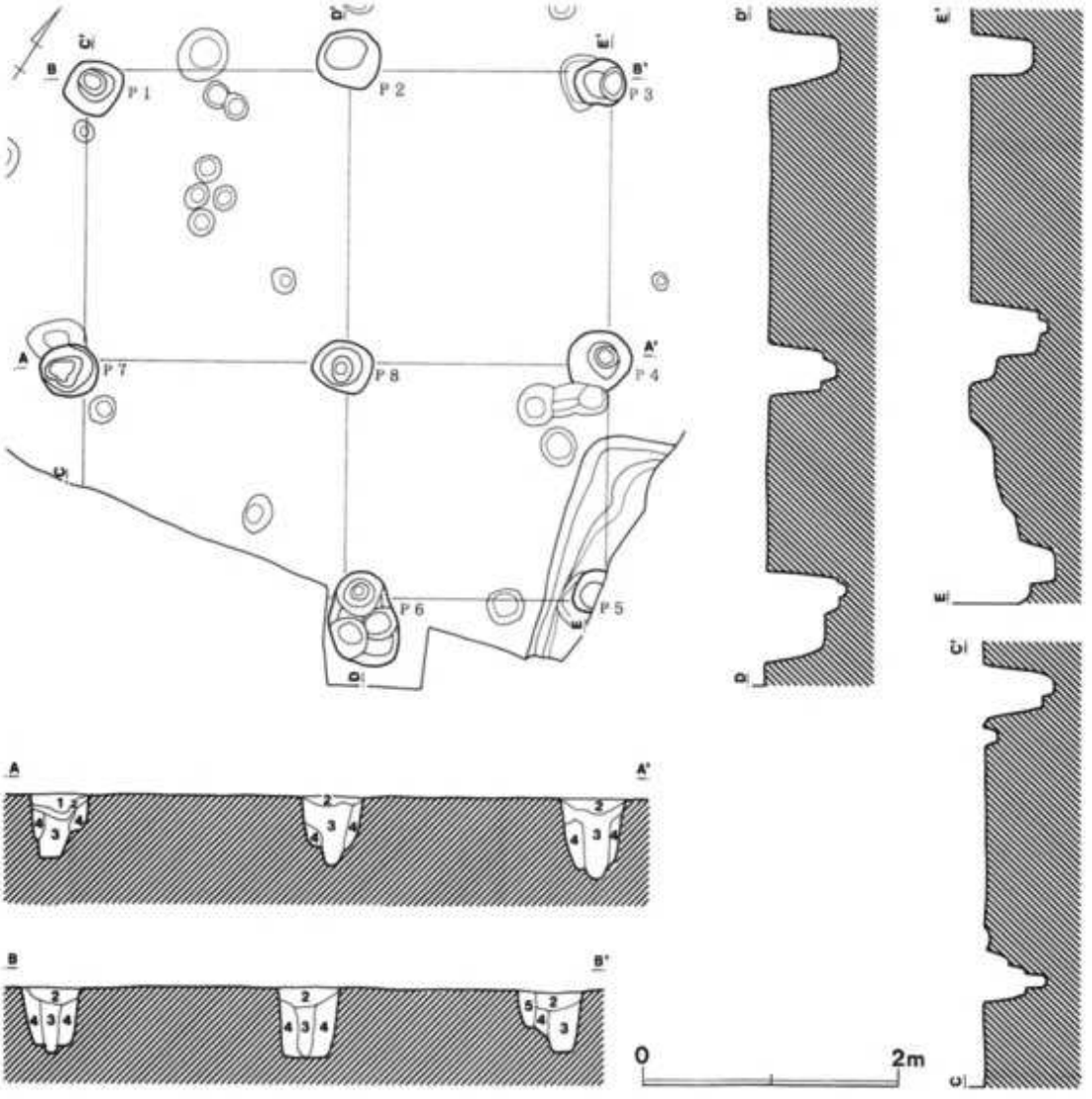
第17号住居跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土。（A軽石混入。）
第1層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：黒灰色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：暗灰色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第26図　第17号住居跡

第17号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A. 口縁部径13.0、器高3.0。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外－暗橙褐色。F. 3/4破片。G. 覆土中。H. 内面に黒斑あり。
2	坏	A. 口縁部径(12.2)、器高3.6。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外－明橙褐色。F. 1/4破片。G. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径13.4、器高4.8。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデ。D. 片岩粒、小石、白色粒。E. 外－淡茶褐色、内－淡灰褐色。F. 2/3破片。G. 覆土中。H. 内面に黒斑あり。
4	須恵器坏	A. 口縁部径(11.2)、器高4.0。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。体部外面下半回転篦ケズリの後ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外－淡灰褐色。F. 1/4破片。G. 覆土中。H. 還元焔焼成はやや不良。器表面は荒れている。



第27図　第５号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡土層説明

第１層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子・ローム粒子微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第５層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

2．掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡（第27図）

Ｂ地点の調査区南東隅に位置し、重複する第14号住居跡にＰ５の上半を切られている。また、第39号土壙とも重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

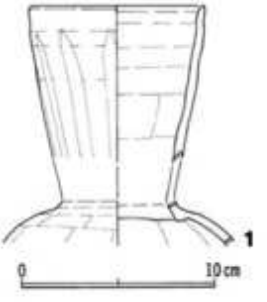
本建物跡の形態は、平面形が２間×２間の正方形で、真ん中に束柱をもつ総柱式と考えられる。規模は、いずれも一辺4.10m程度を測る。建物跡の向きは、N－34°—Wをとる。１間の柱心間は、建物跡の北東～南西方向は約2.05mの等間隔であるが、建物跡の北西～南東方向については北西側が2.30m・南東側が1.80mと不揃いである。

柱穴は直径40cm～50cm程度の円形ぎみのものが主体である。

確認面からの深さは、53.5cm～70cmで比較的深い。いずれの柱穴も、直径20cm前後の円形の形態の柱痕を残している。

出土遺物は、柱穴覆土中から古墳時代や縄文時代と思われる土器片が数片出土しただけであるが、この中でＰ３内から出土した小形直口壷（第28図No.１）は、比較的大きな破片で、同一個体の破片も数片あることから、あるいは本建物跡の時期に近い遺物の可能性もあろう。

本建物跡の時期は、覆土の状態や第14号住居跡との重複関係及び出土遺物より、古墳時代後期の可能性が推測される。



第28図　第５号掘立柱建物跡出土遺物

第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	小形直口壷	A.口縁部径(9.0)。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部外面ヨコナデの後縦方向の雑な篦ナデ、内面ヨコナデの後篦ナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.1/3破片。G.Ｐ３内覆土中。

3．土　　壙

第36号土壙（第31図）

B地点の調査区東側寄りに位置し、東側には第13A号住居跡が近接している。土壙の中央部と東側壁の一部を後世のピットに切られ、西側では縄文時代のピットを切っている。平面形は、110cm×96cmの不整円形である。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmほどである。底面は、広く平坦である。覆土は、ほぼ自然堆積と考えられ、暗褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から縄文時代後期堀之内１式の土器片が数片出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態や出土土器から縄文時代後期の堀之内１式期の可能性が高いと思われる。

第29図　第36号土壙出土遺物

第36号土壙出土遺物観察表

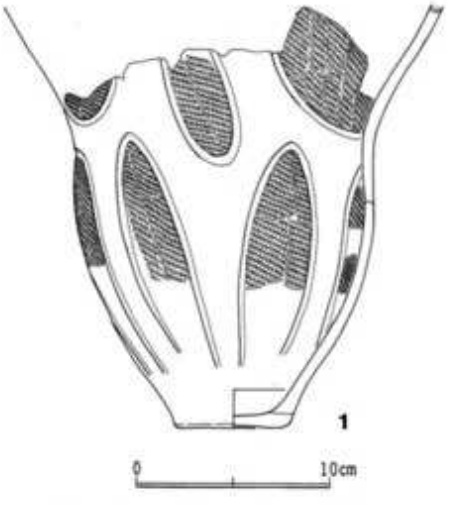
1	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面は箆状工具による横ナデ。工具痕あり。外面は４条の沈線を縦位施文。D. 砂粒。E. 内外－淡褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. 器表面は荒れている。
2	深　鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ナデ。D. 砂粒。E. 内外－淡褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. 器表面は荒れている。

第37号土壙（第31図）

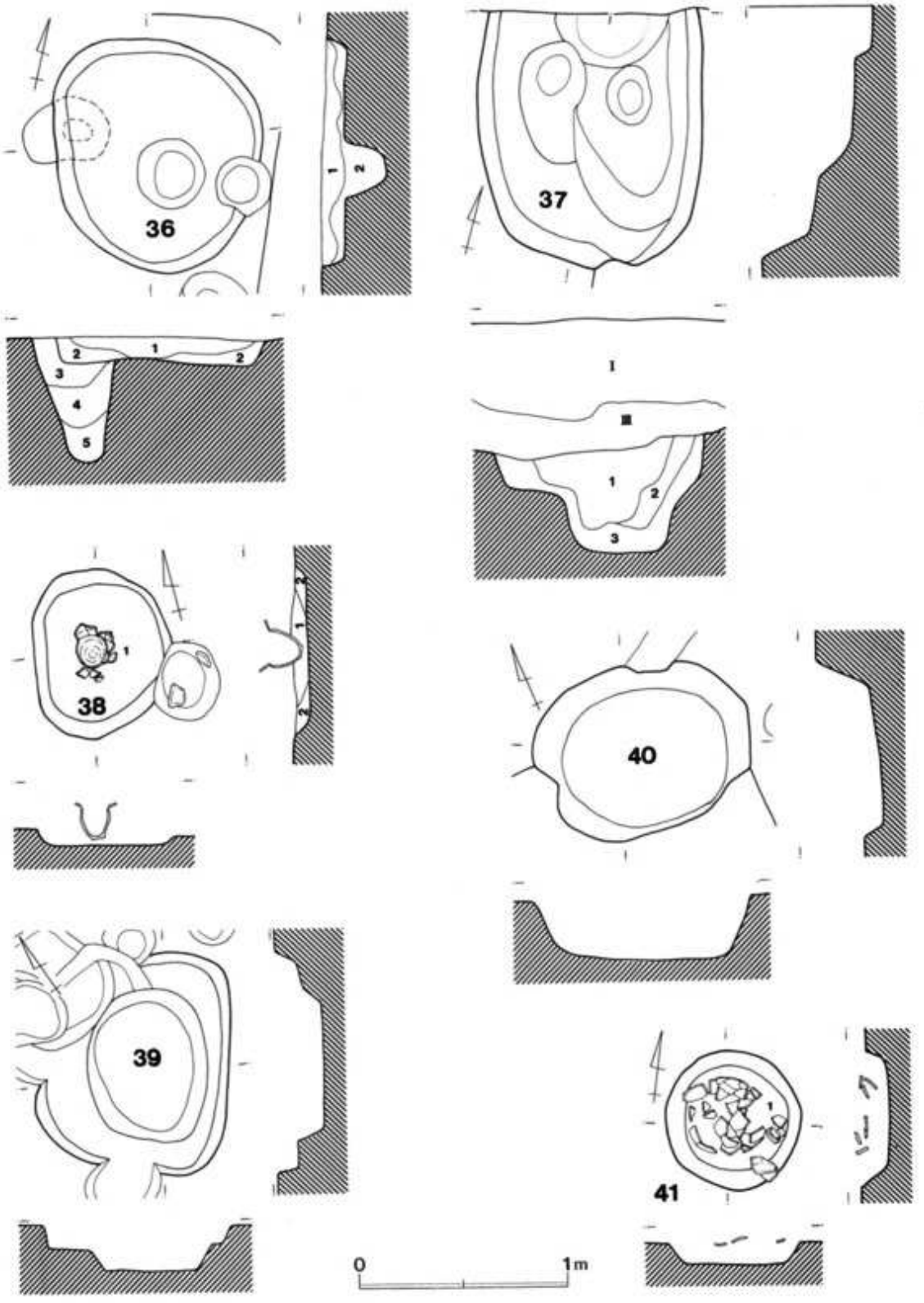
B地点の調査区北端に位置し、遺構上面の一部を重複する第13A号住居跡に切られている。土壙の北側半分は調査区外であるため、本土壙の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、楕円形かコーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態と思われる。規模は、東西方向が105cm、南北方向は120cmまで測れる。確認面からの深さは、最高で52cmある。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がる。底面は比較的広いが、大きな窪み状の掘り込みがあり、階段状に深くなっている。覆土は、本遺跡の縄文時代の遺構に特有の暗茶褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から縄文時代後期の堀之内２式と思われる土器片が数片出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態や出土土器から縄文時代後期の可能性がわれる。

第38号土壙（第31図）

B地点の調査区中央部のやや東側寄りに位置する。土壙の東側壁の一部を縄文時代のピットに切られている。平面形は、やや南北方向に長い不整円形で、規模は80cm×65cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは８cm程度である。底面は、広く平坦に掘られており、土壙中央部の底面付近では、深鉢形土器（第30図No.１）が正位になって置かれたような状態で出土している。この土器以外には遺物は出土していない。本土壙の時期は、出土土器から縄文時代中期末頃と考えられる。



第30図　第38号土壙出土遺物



第31図　土　　壙

第38号土壙出土遺物観察表

1	深　鉢	A. 残存高21.8、底部径6.1。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部内外面ともナデ。文様は単節縄文(LR)を縦方向に施文した地文をもつ沈線による楕円区画文で、胴部中位の括れを境に上下対向する。D. 小石、片岩粒、赤色粒。E. 内外－淡橙褐色。F. 胴部下半のみ。G. 底面付近。H. 外面は二次焼成を受け、内外面とも荒れている。

第39号土壙（第31図）

B地点の調査区南東隅に位置する。第5号掘立柱建物跡と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。また、土壙北側は複数のピットによって切られている。平面形は、105cm×90cmのコーナー部が丸みをもった長方形ぎみの形態であるが、その中央部には70cm×58cmの楕円形ぎみの形態の掘り込みを伴い、二段に深くなっている。壁は、上半は直線的にやや傾斜して立ち上がり、下半は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは22.5cmある。

出土遺物はなく、本土壙の時期は不明である。

第40号土壙（第31図）

D地点の調査区北側に位置し、重複する第13A号住居跡と第21号溝跡を切っている。平面形は、102cm×80cmの比較的整った楕円形である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広く平坦であるが、若干丸みをもっている。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰褐色土を主体にしている。本土壙に伴う遺物はないが、時期は覆土の状態から中世～近世と考えられる。

第36号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第5層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第37号土壙土層説明

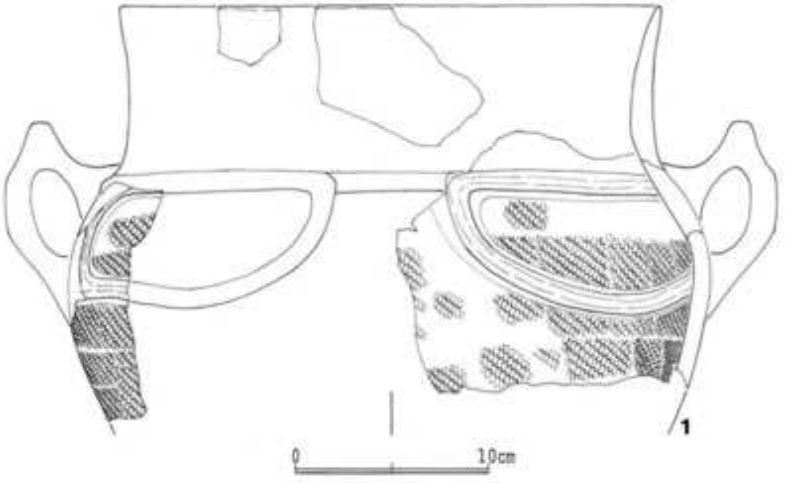
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅲ層：暗茶褐色土。
第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗茶褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第38号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第41号土壙（第31図）

D地点の調査区中央部の東側寄りに位置し、東側には第17号住居跡が近接している。平面形は、66cm×63cmの比較的整った円形に近い形態である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは12cmを測る。底面は、広く平坦である。覆土は、ローム粒子やロームブロックを含む暗茶褐色土を主体にしている。遺物は、土壙底面よりやや浮いた位置から、両耳壺の胴上半部破片（第32図No.1）が水平に置かれたような状態で出土している。本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から縄文時代中期末頃と考えられる。



第32図　第41号土壙出土遺物

第41号土壙出土遺物観察表

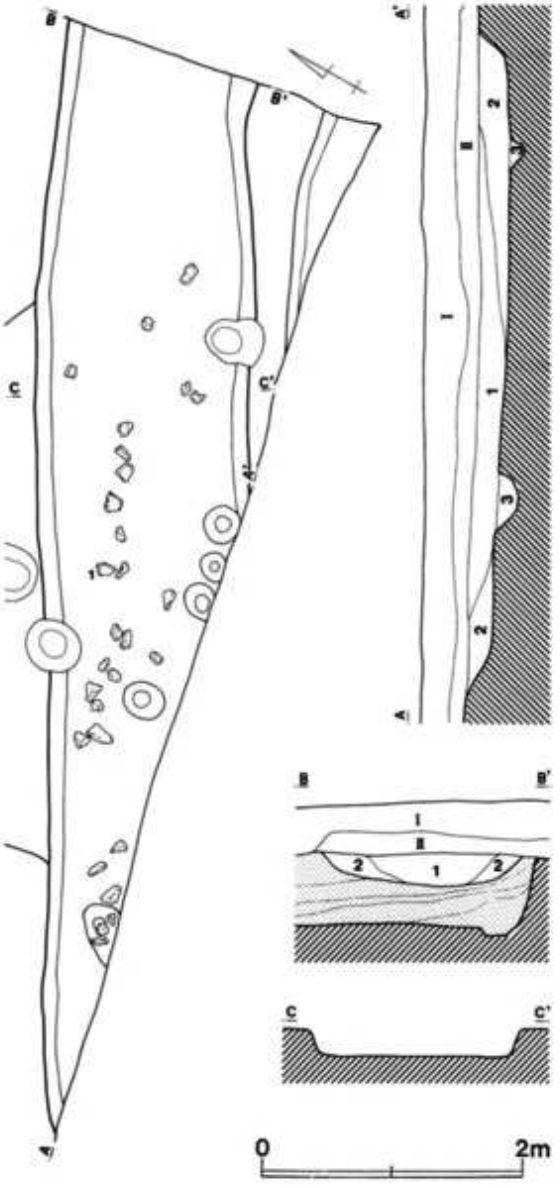
1	両耳壺	A.残存高17.0、最大径34.0。B.粘土紐積み上げ成形。把手及び隆帯貼り付け。C.口縁部内外面及び胴部内面ナデ。胴部文様は、地文に単節縄文(RL)を横方向に施文した後、上半に隆帯による楕円区画文を施す。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.胴部上半1/2。G.底面付近。H.把手は剥離している。

4．溝　　跡

第５号溝跡（第33図）

Ｄ地点の調査区南東側に位置し、古墳時代後期の第17号住居跡と第14号住居跡の上面を切っている。溝の方向は、調査区内では南西から北東方向に直線的に向いており、現地表面の等高線とは直交する流路をとっている。Ｄ地点の東側約30mに位置するＡ地点でも、本溝跡の延長部分が検出されている（第４図）。

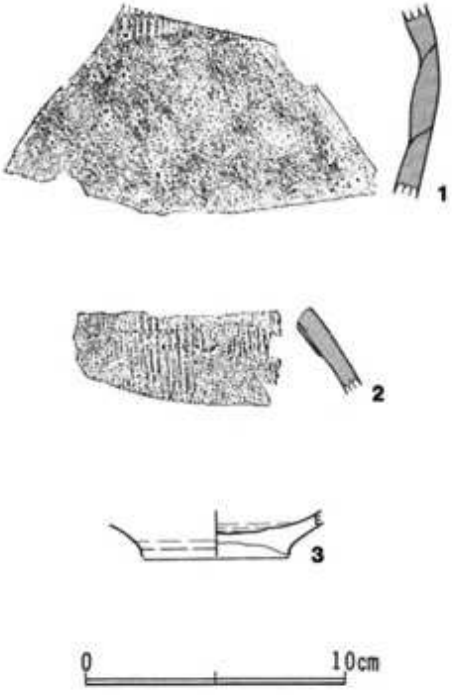
溝の形態は、上幅は確認面で170cm前後、下幅は140cm前後の均一な幅である。壁は、緩やかに立ち



第33図　第５号溝跡

第５号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：旧耕作土。（Ａ軽石混入。）
第１層：暗褐色土層（Ｂ軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子・鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第34図　第５号溝跡出土遺物

第５号溝跡出土遺物観察表

1	常滑系甕	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面篦ナデ、内面横方向のナデ。D. 黒色粒、乳褐色粒。E. 外－淡緑褐色、内－暗褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. 外面に格子目状の押印文があり、淡緑色の自然釉がかかる。
2	常滑系甕	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 胴部外面ナデ、内面横方向のナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外－暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. 外面に格子目状の押印文あり。
3	土師器皿	A. 底部径(5.6)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外－淡褐色。F. 低部1/3破片。G. 覆土中。H. 底部外面剥離。

上がり、確認面からの深さは、約20cm前後をはかる。底面は、広く平坦である。溝底面には、浅いピット状の掘り込み部分的に見られるが、本溝との関係は明確ではない。

覆土は、B軽石を均一に含む暗褐色土を主体にしている。水流による細砂粒や小石等の堆積層がなく、恒常的に水が流れていたような痕跡が認められないことから、本溝跡は、排水かあるいは敷地の区画を目的として掘削された溝と考えられる。

出土遺物は、覆土中より比較的多くの古墳時代後期の土器片や拳大の自然石とともに、中世の常滑窯系甕(No.１・２)・土師器皿(No.３)・在地産片口鉢などの破片が少量出土している(第34図)。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物より、中世の所産と考えられる。

第13・14号溝跡（第35図）

Ｂ地点の調査区北西側に位置し、重複する第15号住居跡を切っている。第13号溝跡は、ほぼ直線的に北東方向に向いて北側の調査区外に延びており、その中程より南東方向に直線的に延びる第14号溝跡が分岐している。形態は、いずれも20m前後の比較的整った均一な幅で、確認面からの深さは５cm程度の小規模な溝である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第15号溝跡（第６図）

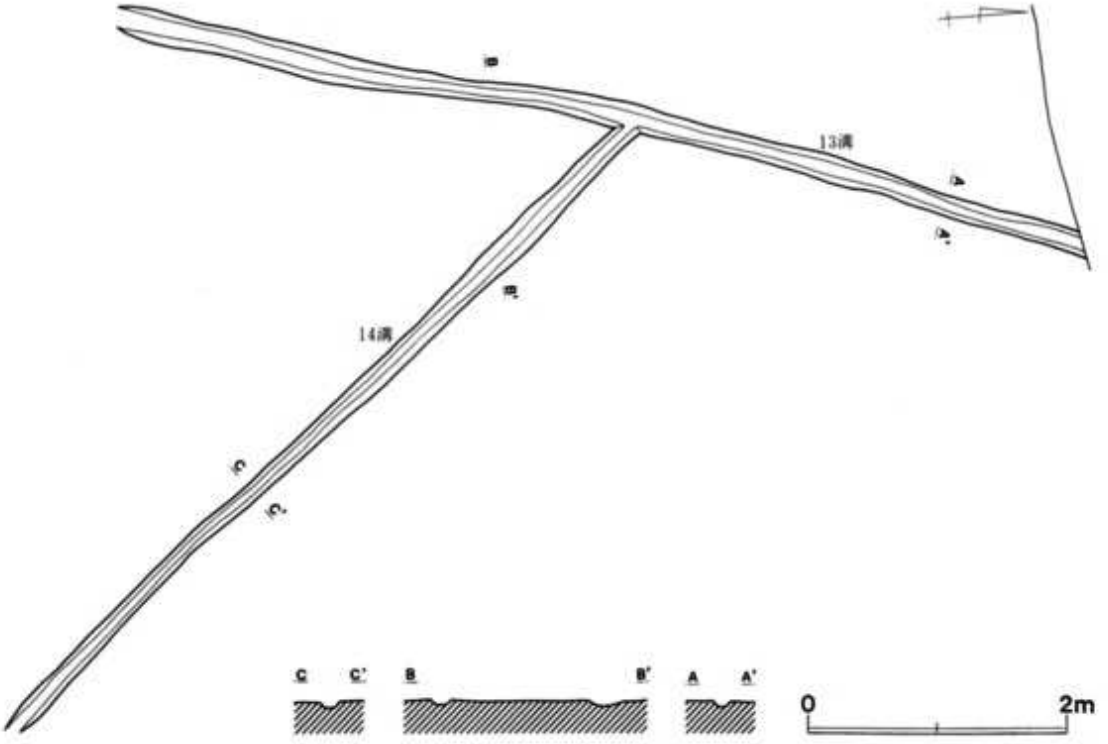
Ｄ地点の調査区南東端に位置し、北側には中世の第５号溝跡が近接している。調査区内で検出されたのは、溝の北側壁の一部であるため、本溝跡の明細については不明であるが、溝跡の覆土は浅間山系Ａ軽石を多量に含む暗褐色土の単一層であり、おそらく調査区南側の現在の畑の地境に一致する溝の一部と考えられる。

第16号溝跡（第36図）

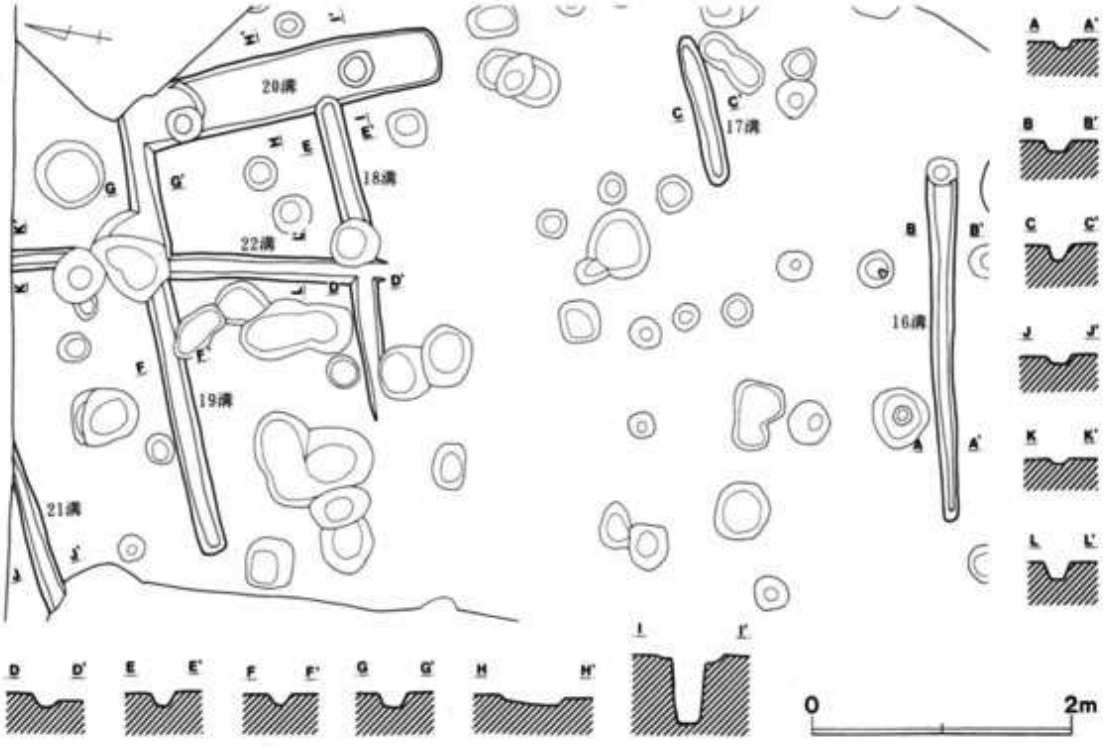
Ｄ地点の調査区中央部に位置し、ほぼ直線的に東西方向を向いている。長さ2.78mで、幅15cm前後の均一な形態で、確認面からの深さは９cm前後を測る。溝の東側端部には小規模なピットがあるが、本溝跡との関係は不明である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第17号溝跡（第36図）

Ｄ地点の調査区中央部のやや北側寄りに位置し、概ね直線的に東西方向を向いている。形態は、



第35図　第13・14号溝跡



第36図　第16～22号溝跡

長さ1.15m・幅18cmの小規模な溝で、確認面からの深さは8cm～11cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

第18号溝跡（第36図）

D地点の調査区北側に位置し、重複する第20号溝跡を切り、第22号溝跡に切られている。直線的にほぼ東西方向を向き、北側に近接する第19号溝跡と並行している。形態は、長さ2.52・幅20cm程度の小規模な溝で、確認面からの深さは8cm～11cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明であるが、第20号溝跡との重複関係から中世以降の所産と推測される。

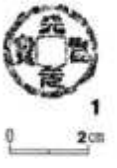
第19号溝跡（第36図）

D地点の調査区北側に位置し、重複する第20号溝跡と第16号住居跡を切り、第22号溝跡に切られている。直線的にほぼ東西方向を向き、南側に近接する第18号溝跡と並行している。確認された長さは3.40mを測り、幅は20cm前後の比較的均一である。確認面からの深さは、7cm～13cmある。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、第20号溝跡との重複関係から第18号溝跡と同じく、中世以降の所産と推測される。

第20号溝跡（第36図）

D地点の調査区北東側に位置し、重複する第16号住居跡の西側コーナー部の上面を切り、直交する第18号溝跡と第19号溝跡に切られている。溝跡の向きは南北方向を向いており、両端部は途切れて土壙状の形態になってる。規模は、長さ2.52mで、幅は52cmの比較的均一である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは2cm～4cm程度である。底面は、広く平坦である。覆土は、B軽石や焼土粒子や炭化粒子を均一に含む暗褐色土である。出土遺物は、覆土中から「天聖元宝」の古銭（第37図No.1）が1枚出土しただけである。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物から、中世の所産と考えられる。



第37図　第20号溝跡出土遺物

第20号溝跡出土遺物観察表

1	古　　銭 （天聖元寶）	A.外径2.5、重さ2.8g　B.鋳造。D.銅製。F.完形。G.覆土中。H.背字なし。渡来銭（北宋、初鋳1023年）。

第21号溝跡（第36図）

D地点の調査区北端に位置し、重複する第40号土壙に切られている。調査区内では直線的に東西方向を向き、南側に近接する第18号溝跡や第19号溝跡とほぼ並行している。北側の調査区外に延びているため、全容は不明であるが、幅は10cm～18cmの比較的均一である。確認面からの深さは、6cm程度である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、第40号土壙との重複関係や並走する第18号溝跡や第19号溝跡との関係から見て、中世以降の所産と推測される。

第22号溝跡（第36図）

Ｄ地点の調査区北端に位置し、重複する第18号溝跡・第19号溝跡を切っている。調査区内では直線的にほぼ南北方向を向いている。規模は、幅が15cm～20cmの比較的均一な形態で、確認面からの深さは３cm～13cmある。出土遺物はなく、時期は不明である。

５．調査区内出土の縄文土器・土製品

本遺跡のＢ・Ｄ地点の調査区内から出土した縄文土器は、主に包含層や後世の遺構の覆土中から出土したものである。遺物を包含する土層が粘質土であるため、器表面の剥離を呈したものがほとんどであった。このため、本遺跡出土の土器群については、その文様や形態等の分類によって、概要について示した。以下、時期をおって土器の概略を示しながら、傾向と変化について考えたい。

第Ⅰ群土器（第38図No.１～15）

第Ⅰ群土器は、縄文時代中期に属する土器で、連弧文系土器・加曽利ＥⅢ式・ＥⅣ式が少量出土している。No.１は連弧文系土器で、沈線と隆帯による口縁部文様をもつ。No.２～12は、加曽利ＥⅢ式である。No.２～５は、沈線による口縁部無文帯をもつ。No.７とNo.11は、縄文地に微隆起を貼付され、さらに微隆起に沿って沈線を施したものである。No.12は、隆帯が貼付されている。No.13～15は、加曽利ＥⅣ式である。No.13は、頸部に無文帯を有し、刺突列をもつ破片である。No.14は、両耳壺の把手である。No.15は、刻みをもつ隆帯が横走している。器形は内湾すると思われる。

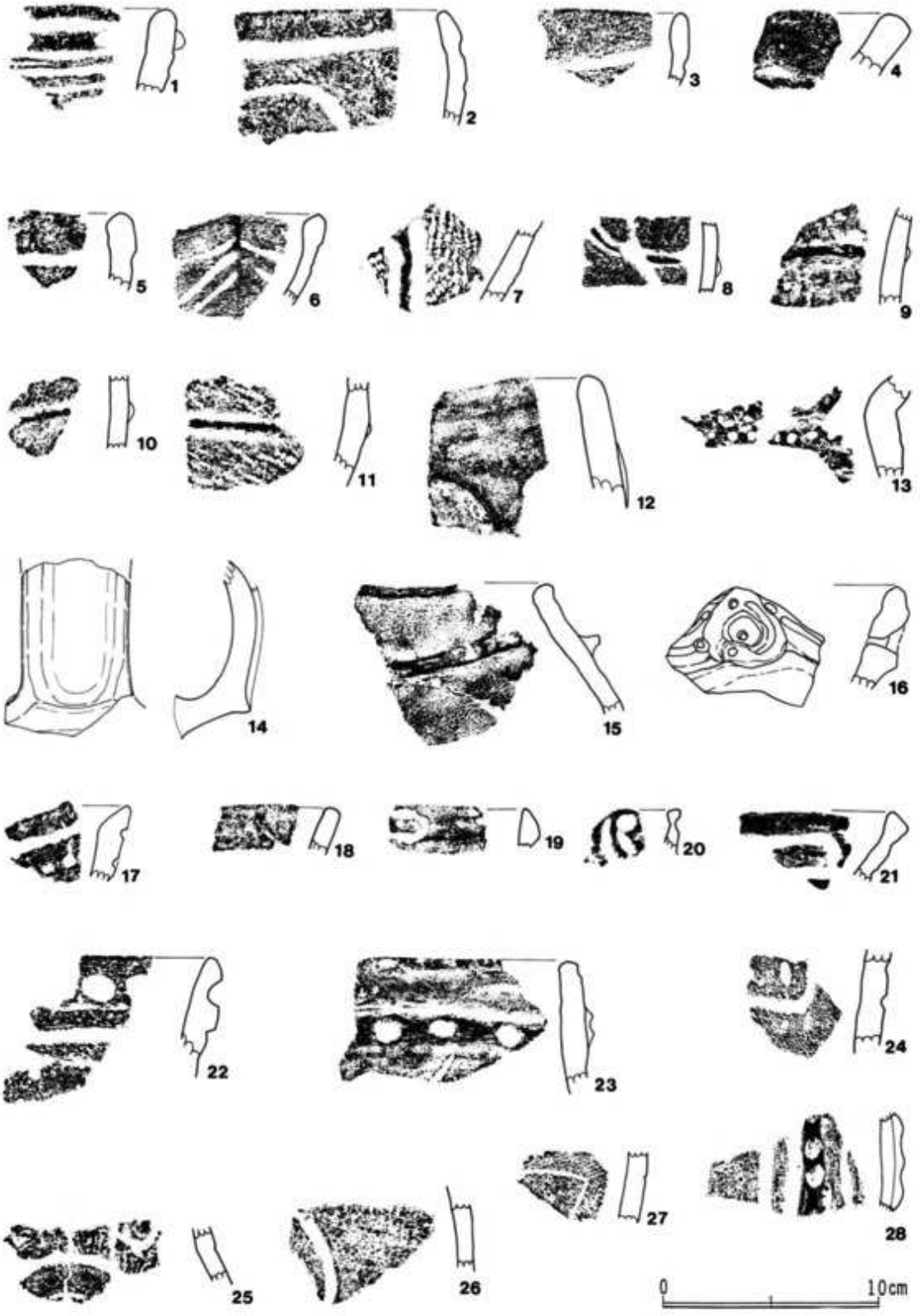
第Ⅱ群土器（第38図No.16～第40図No.55）

第Ⅱ群土器は、縄文時代後期に属する土器で、Ｂ・Ｄ地点の調査区内から出土した縄文土器の主体を占める。No.16～28は、称名寺Ⅱ式である。No.16・17・20は、緩い波状口縁につく突起部である。No.16は、突起上の対向Ｃ字状の窩紋連繋沈文が、突起周囲の口端に沿って展開されたと思われる破片で、堀之内1式への変遷の連続性を示すものと言える。No.17は、周囲の口端部に沿って沈線が展開されたと思われる破片で、沈線下には列点がある。No.22は、口縁部が肥厚し、刺突の下に細沈線をもつ。No.23は、刻みをもつ隆帯が横走し、その下に斜走する沈線が見られる。No.24～27は、胴部の破片で、Ｊ字文鉤部の破片と思われる。No.24は、沈線内に列点を充填し、No.25と27は、縄文を充填したものである。No.28は、刻みをもつ隆帯と沈線が縦走している。

No.29～48とNo.55は、堀之内１式である。No.29と33は、刺突の下に１条の沈線を施したもの。No.35と36は、口縁部に１条の沈線を施したもの。No.34と37は、刺突を施したもの。No.39は、小型鉢の口縁部と頸部の境の破片と思われる。平行する２条の隆帯により区画し、８字状貼付文が付されている。堀之内２式に下る可能性もある。No.55は、Ｂ地点のピット13から出土した深鉢形土器の胴部下半で、胴部下半が無文地であり、堀之内２式に併行する可能性もある。

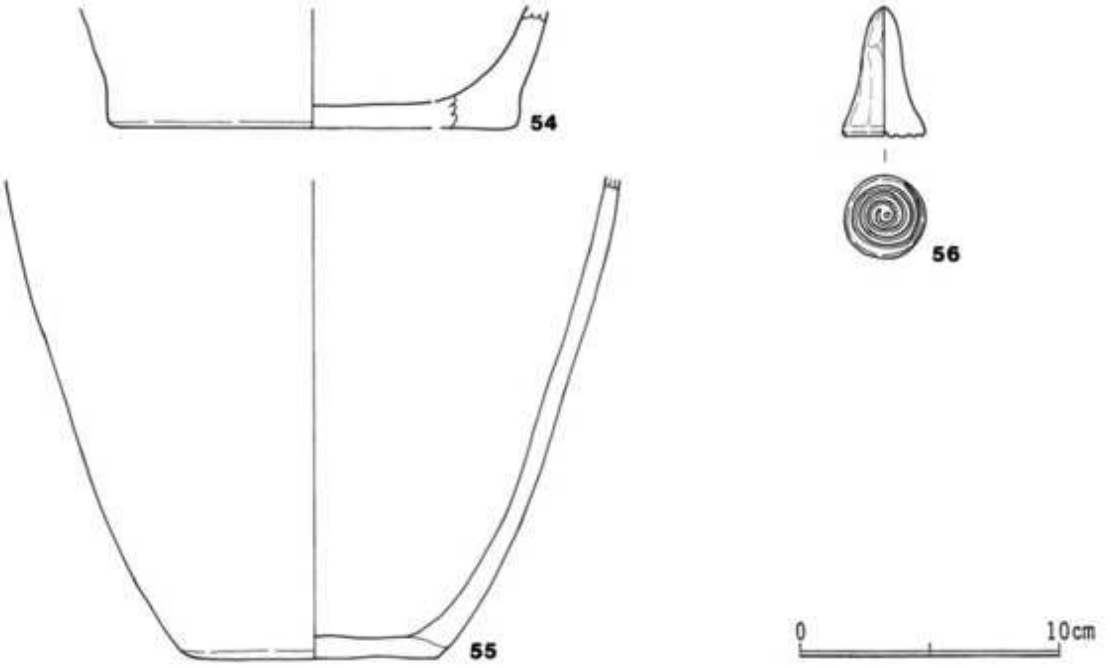
No.49～53は、堀之内２式である。No.50は、口辺部に鎖状貼付文を有する精製土器の口縁部破片である。No.49と51は、口端部文様が内面に反転し、これに平行するように沈線を重畳したものである。No.53は、沈線内に縄文を充填したものである。

Ｂ・Ｄ地点の調査区内から出土した土器群の様相は、概ね埼玉県北部地域および群馬県地域の様相と類似している。主体を占める後期初頭の土器群は、寄居町樋ノ下遺跡第12号住居跡（細田1994）・



第38図　調査区内出土の縄文土器・土製品（1）

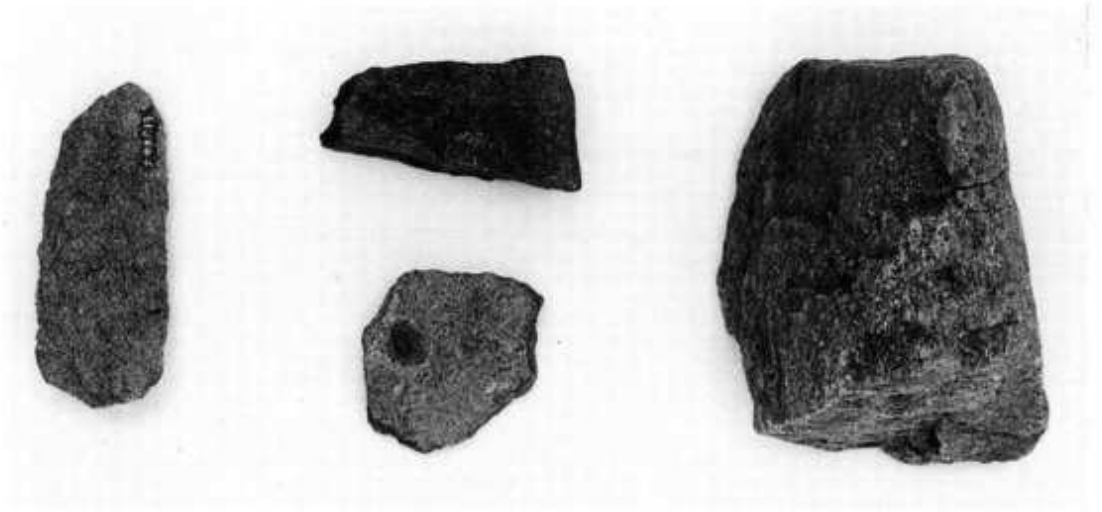
第39図　調査区内出土の縄文土器・土製品（2）



第40図　調査区内出土の縄文土器・土製品（3）

深谷市明戸東遺跡第28号住居跡(礒崎1989)・花園町北塚屋遺跡SK107(市川1983)や、神流川左岸の群馬県藤岡市域の様相と類似性を認めることができる。この地域は、中期後葉から後期中葉の土器群の変化の様相については不明確な部分が多い。今後は、この地域の資料の増加を睨みつつ型式論的な整備を行う必要があろう。

なお、No.56は、スタンプ状土製品である。「スタンプ面」は円形を呈し、沈線による渦巻文が施されている。柄部は指ナデである。「スタンプ面」の直径は3.2cmで、長さは5cmを測る。



調査区内出土の縄文時代の石器

≪参考文献≫

恋河内昭彦（1993）『川越田遺跡Ⅱ』 児玉町遺跡調査会報告書第５集

（1997）『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集

（1999）『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第31集

駒宮　史朗（1977）『御林下遺跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集

坂本和俊他（1986）『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室

立石　盛詞（1982）『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集

（1983）『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

利根川章彦（1998）『御林下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第223集

富田和夫・赤熊浩一（1985）『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集

長谷川　勇（1983）『二本松遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第５集１分冊

（1985）『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第５集２分冊

本　庄　市（1986）『本庄市史』通史編Ⅰ

写　真　図　版

図版 1

女池遺跡 B 地点遠景

女池遺跡 B 地点全景

図版 2

B 地点全景（東より）

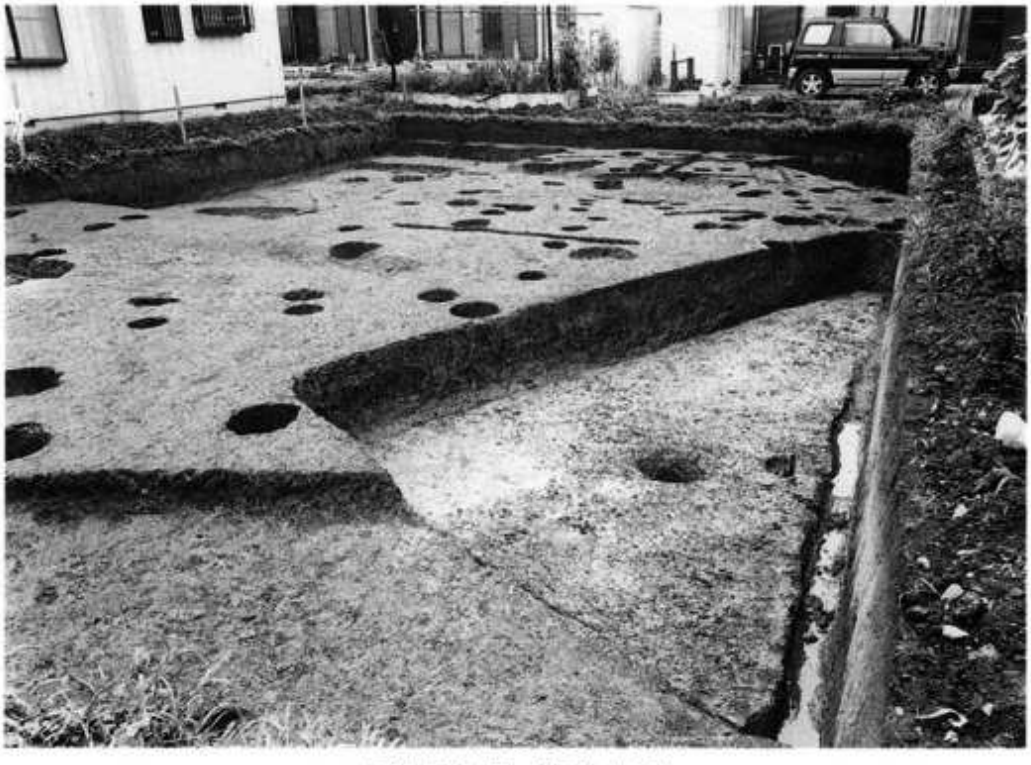
B 地点全景（南東より）

図版3

女池遺跡D地点遠景

女池遺跡D地点全景

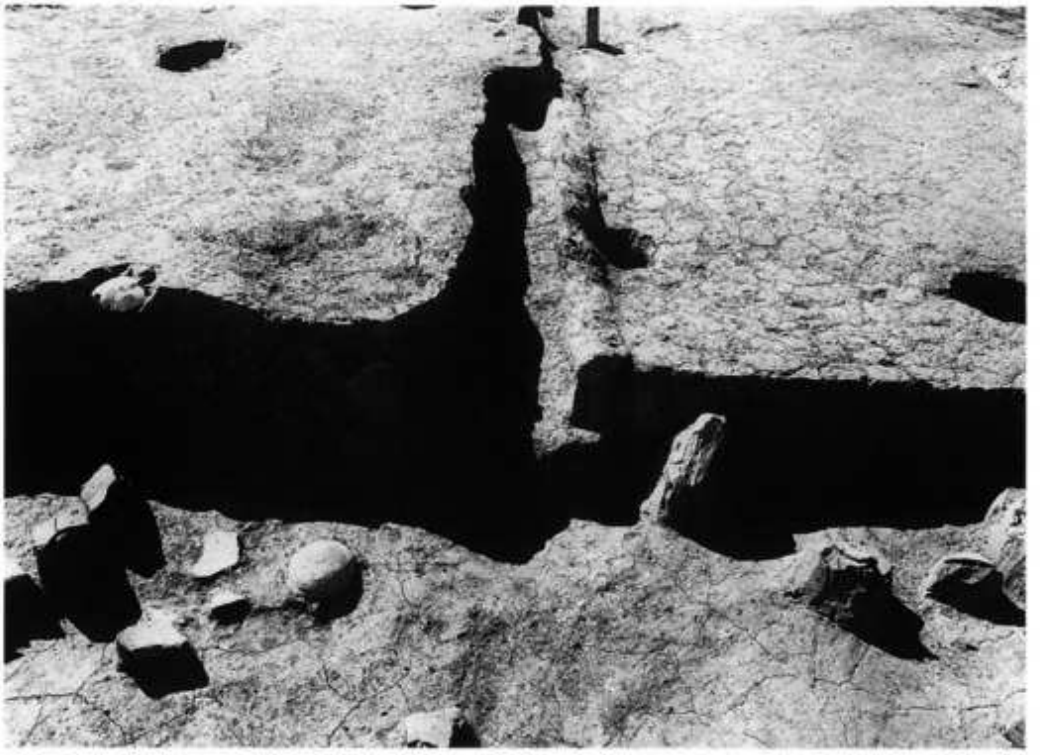
D 地点全景（北より）



D 地点全景（南東より）

第13A号住居跡（B地点側）

第13A号住居跡（D地点側）



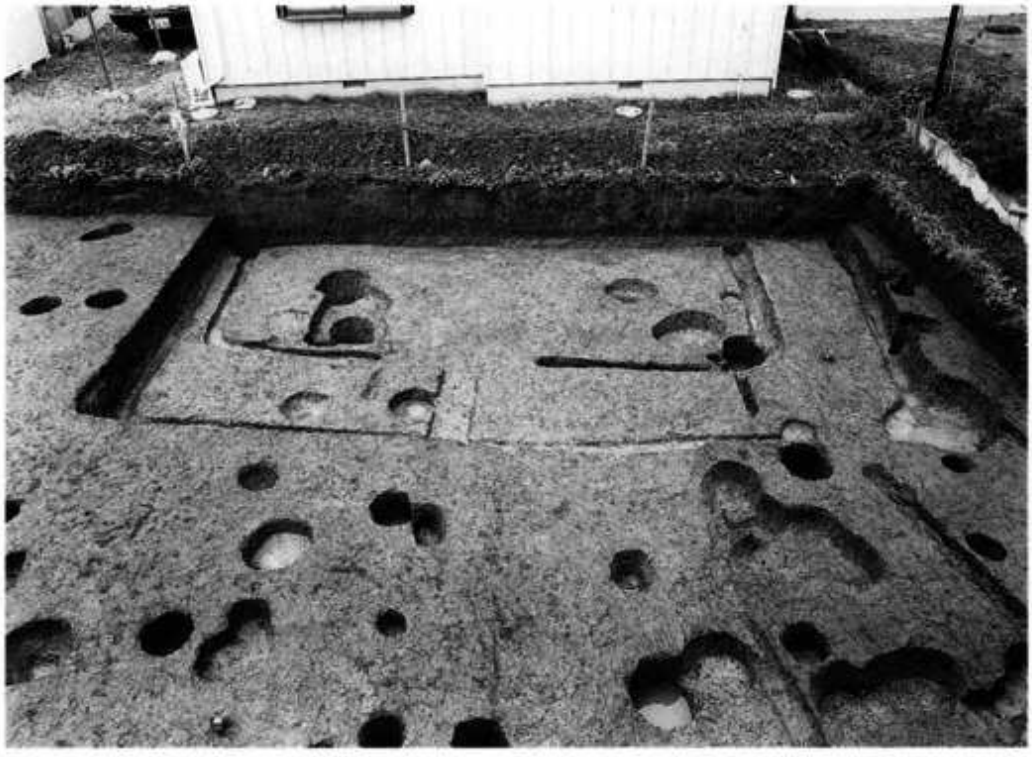
第13A号住居跡カマド

第13A号住居跡貯蔵穴

第13A号住居跡須恵器高坏出土状態

第13A号住居跡土師器甕出土状態

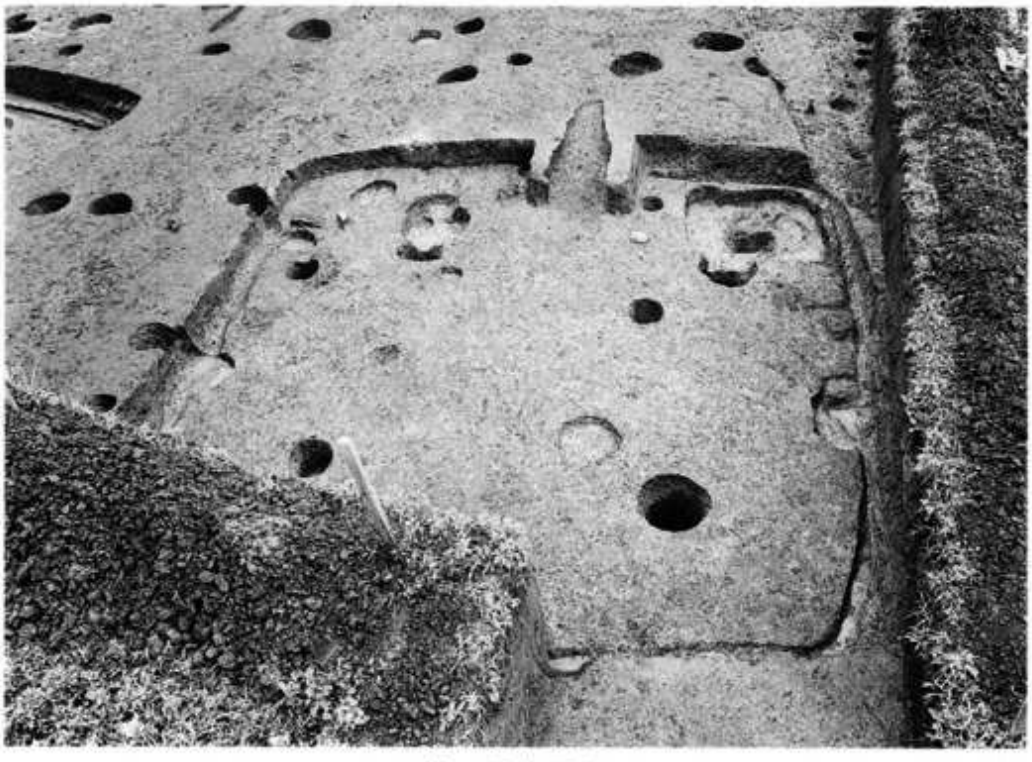
第13Ｂ号住居跡（Ｂ地点側）



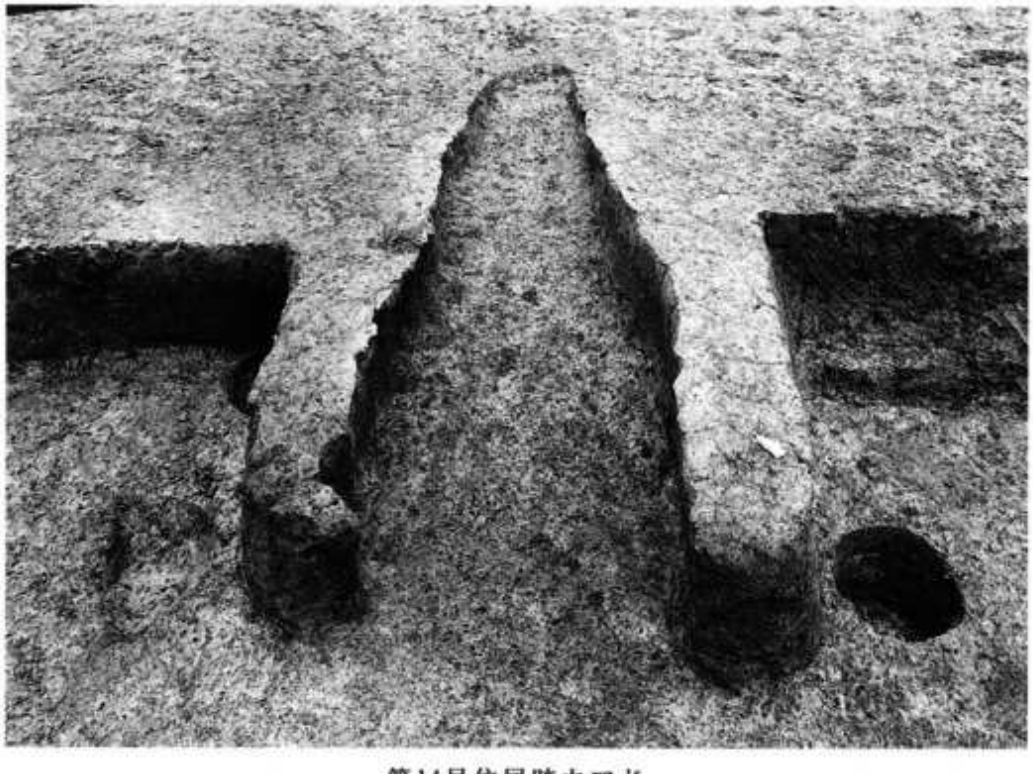
第13Ｂ号住居跡（Ｄ地点側）

第13B号住居跡（B地点側）

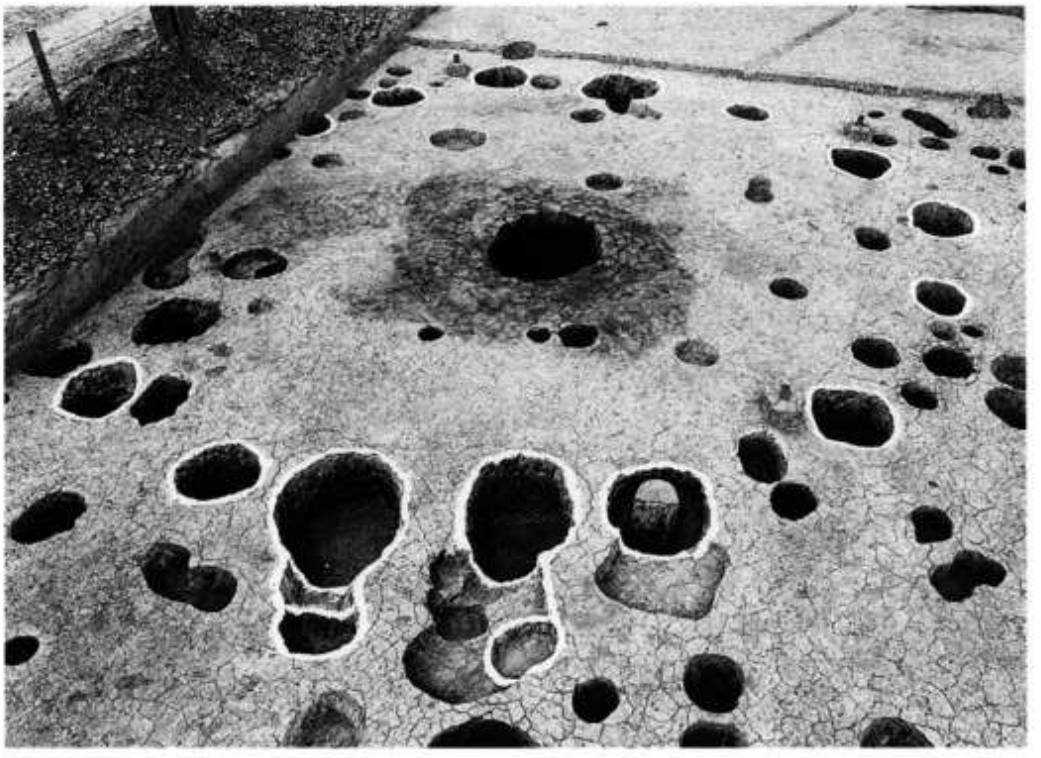
第13B号住居跡（D地点側）



第14号住居跡



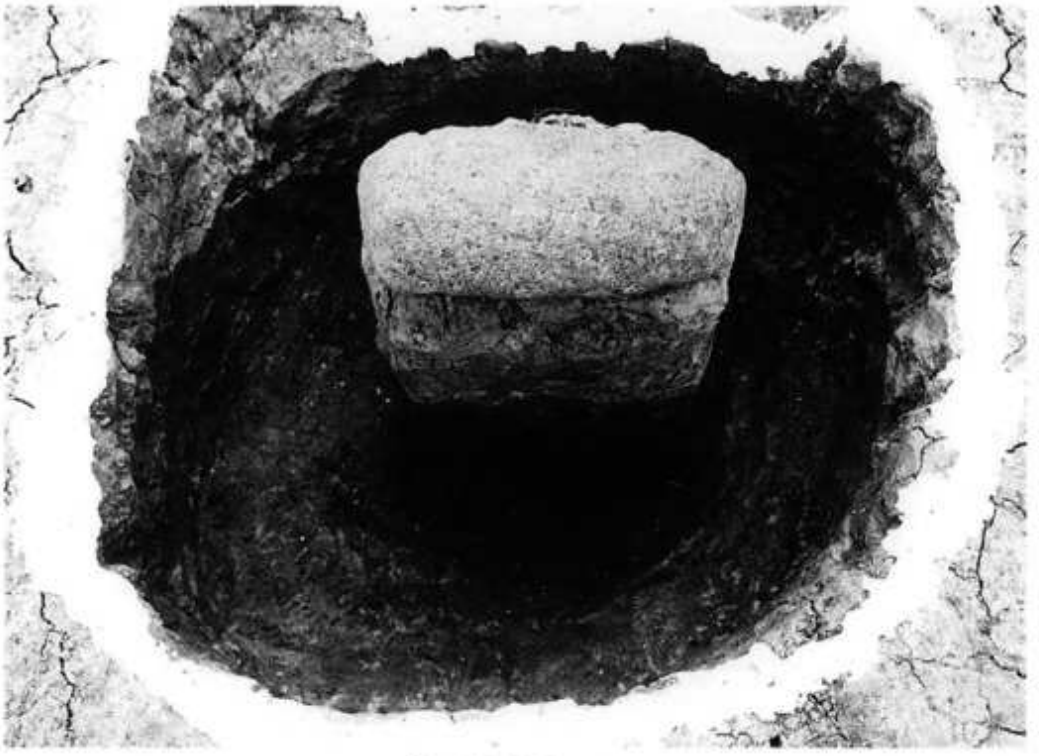
第14号住居跡カマド



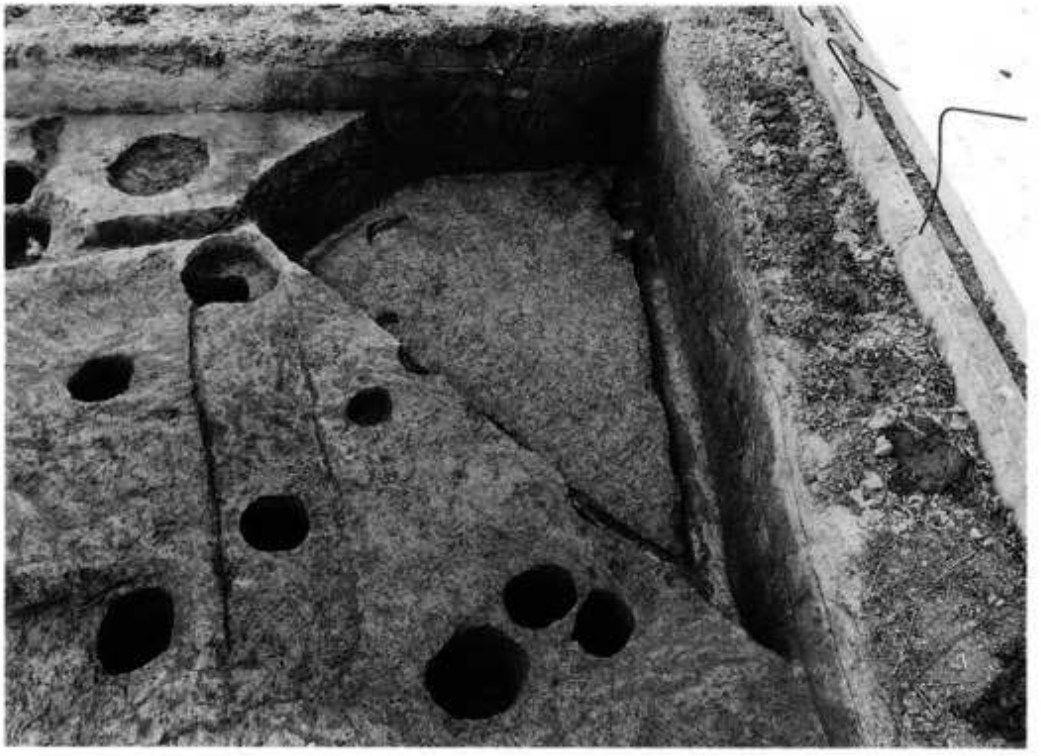
第15号住居跡（南側より）

第15号住居跡（北西側より）

第15号住居跡炉



第15号住居跡P13

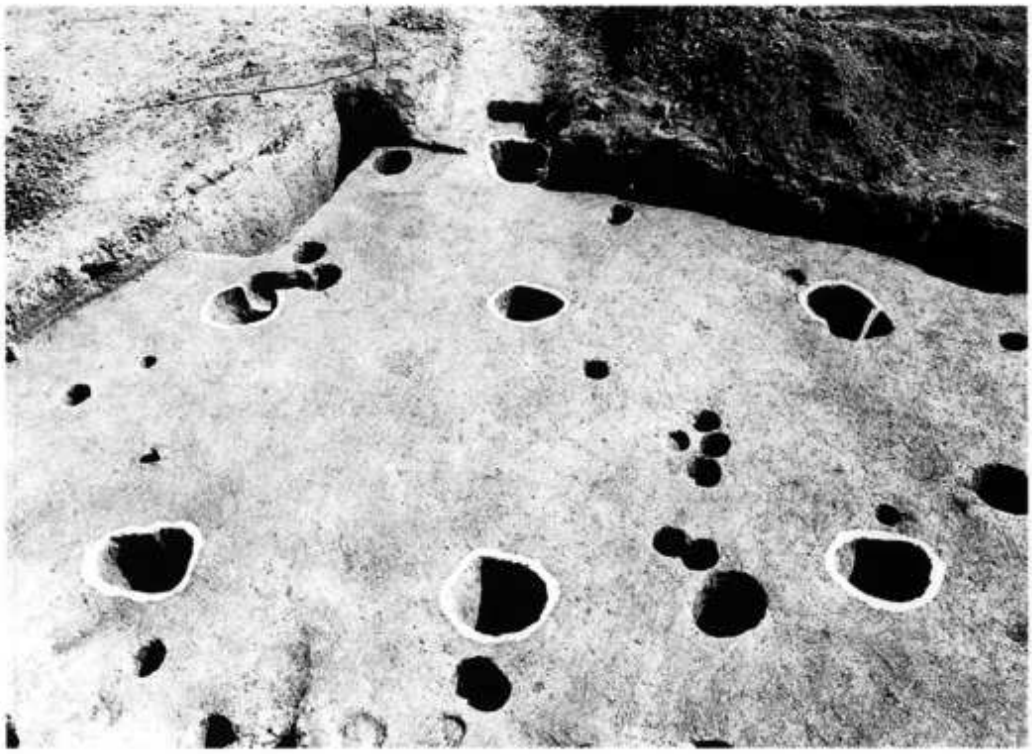


第16号住居跡（南側より）

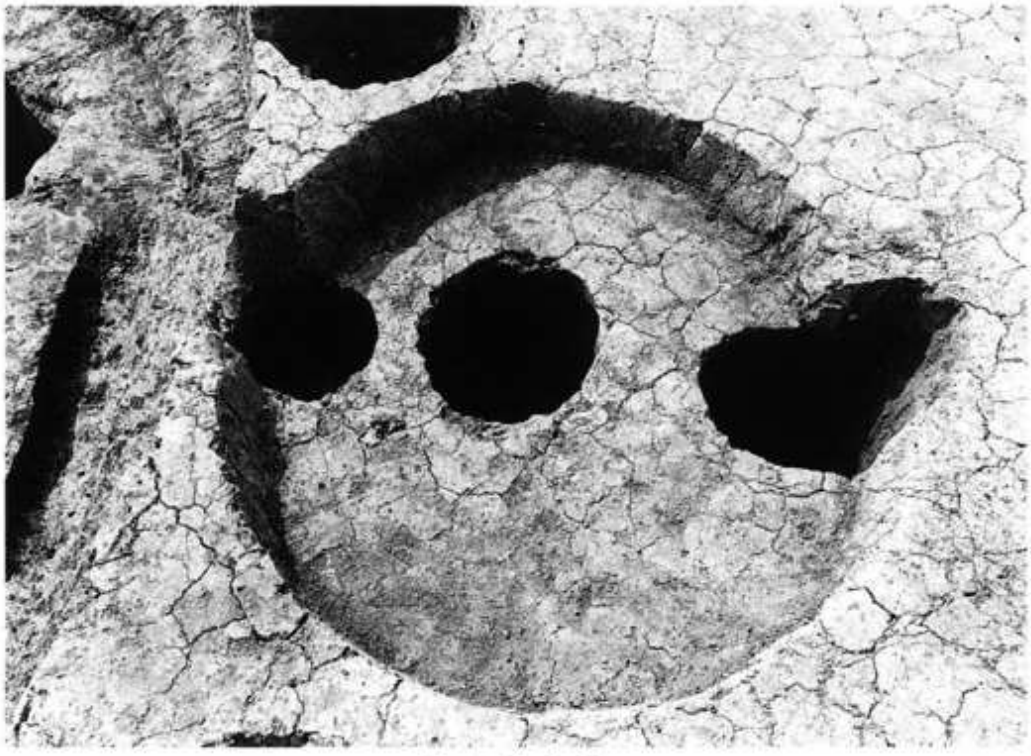
第16号住居跡（東側より）

第17号住居跡（西側より）

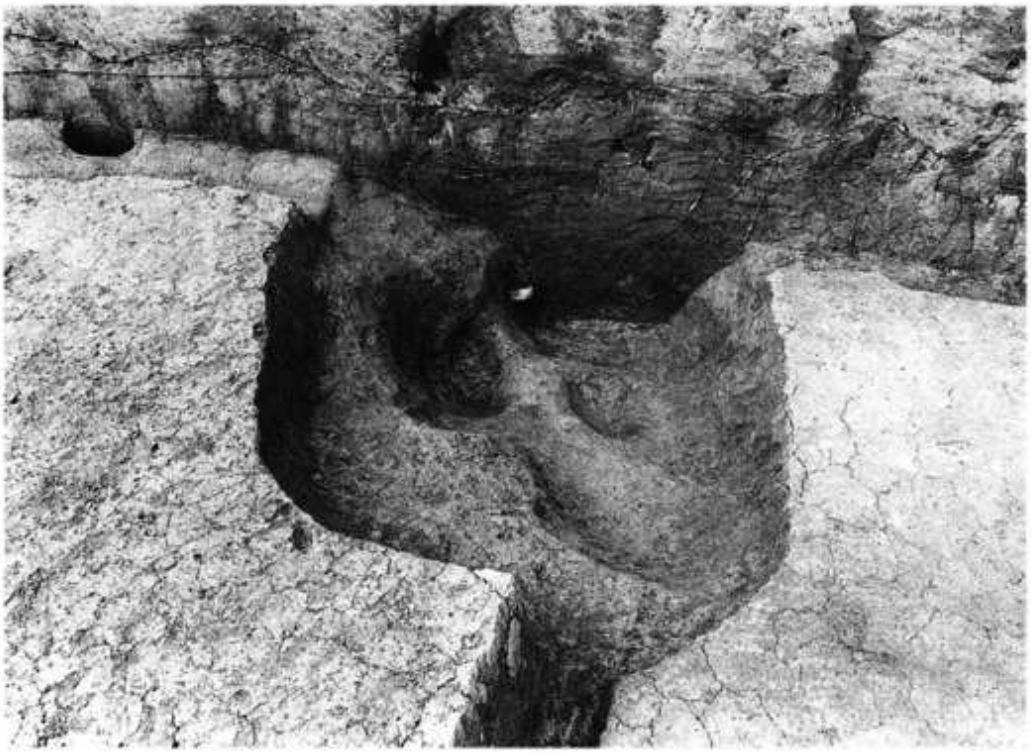
第17号住居跡（北側より）



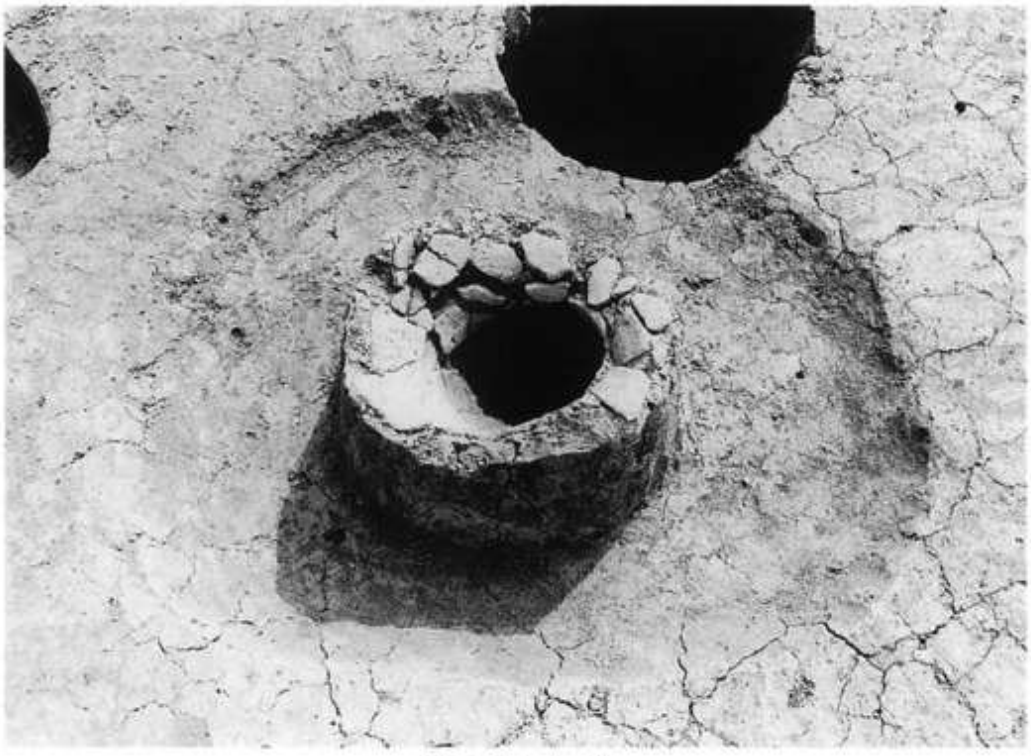
第5号掘立柱建物跡



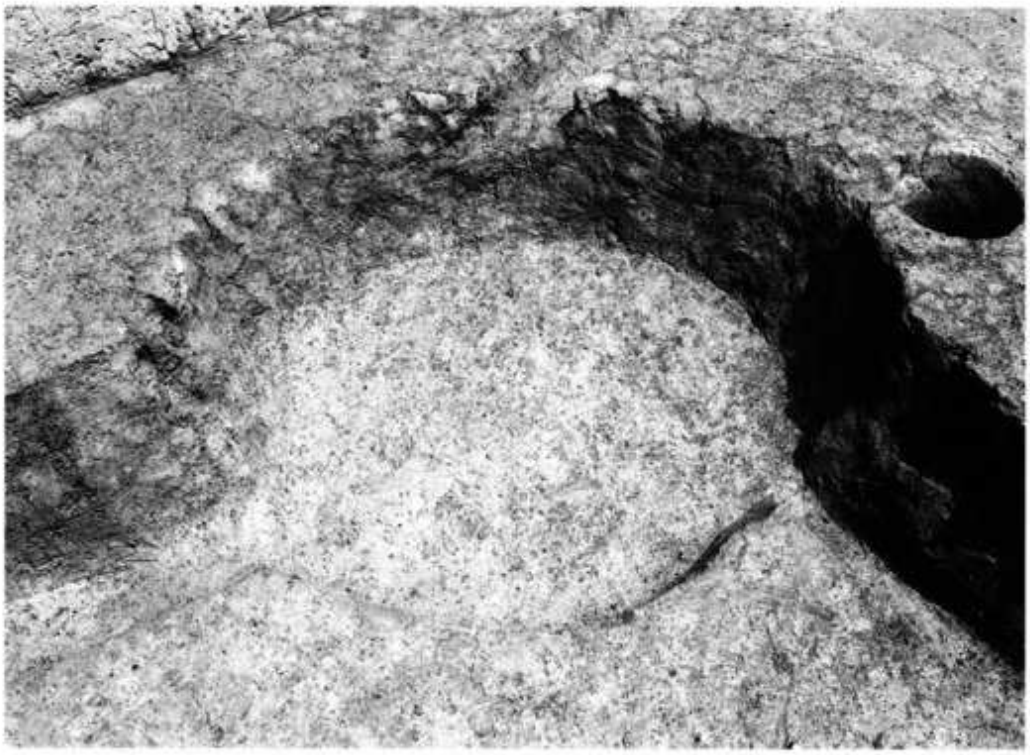
第36号土壙



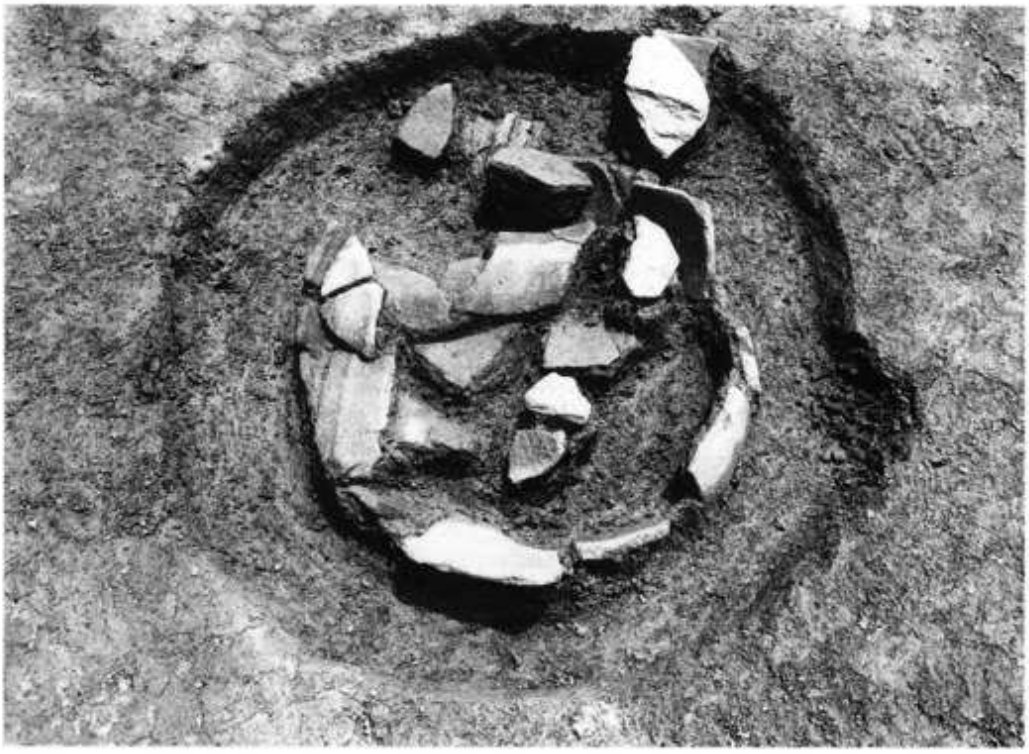
第 37 号 土 壙



第 38 号 土 壙



第 40 号 土 壙

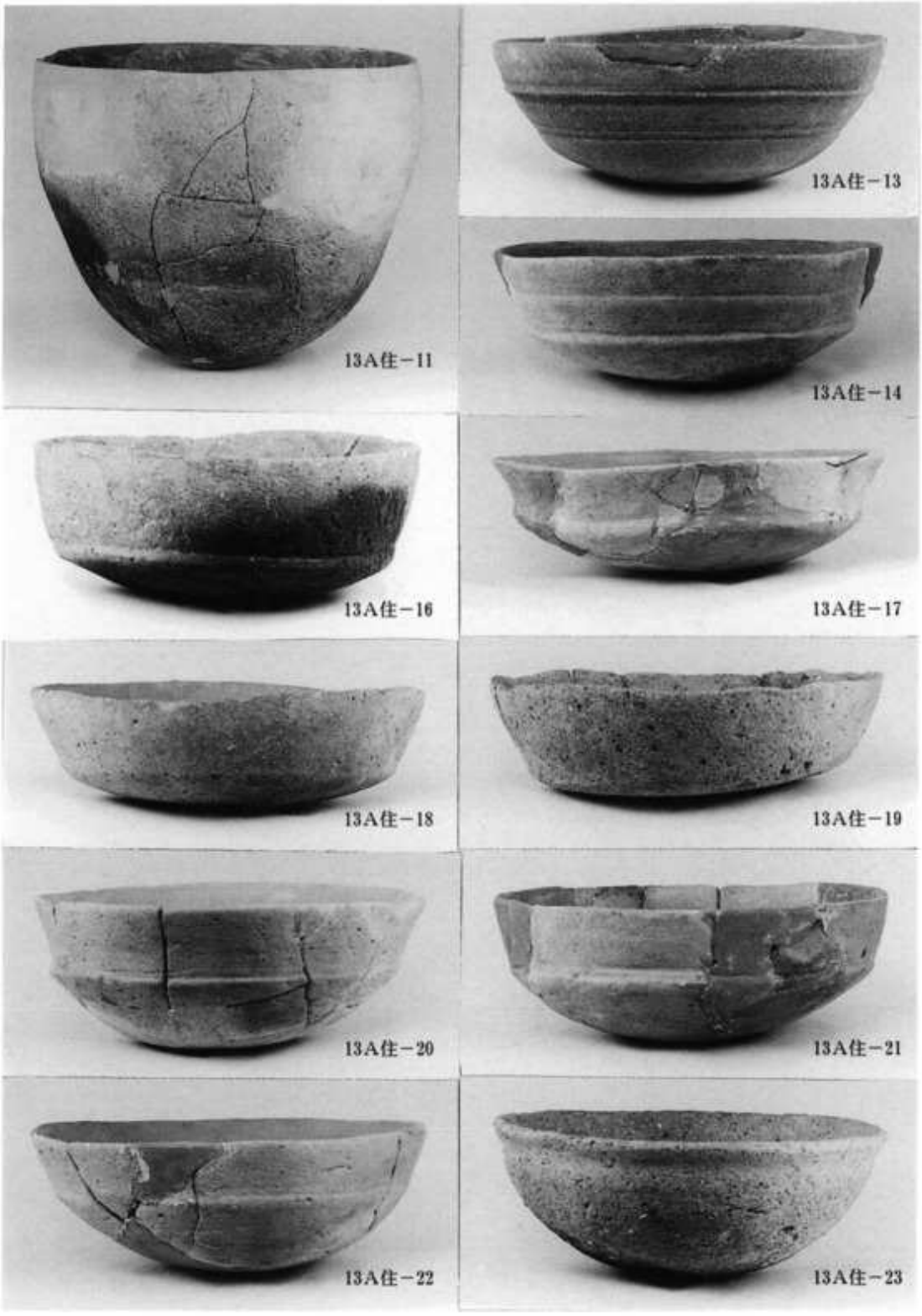


第 41 号 土 壙

第 5 号 溝 跡

B地点ピット13

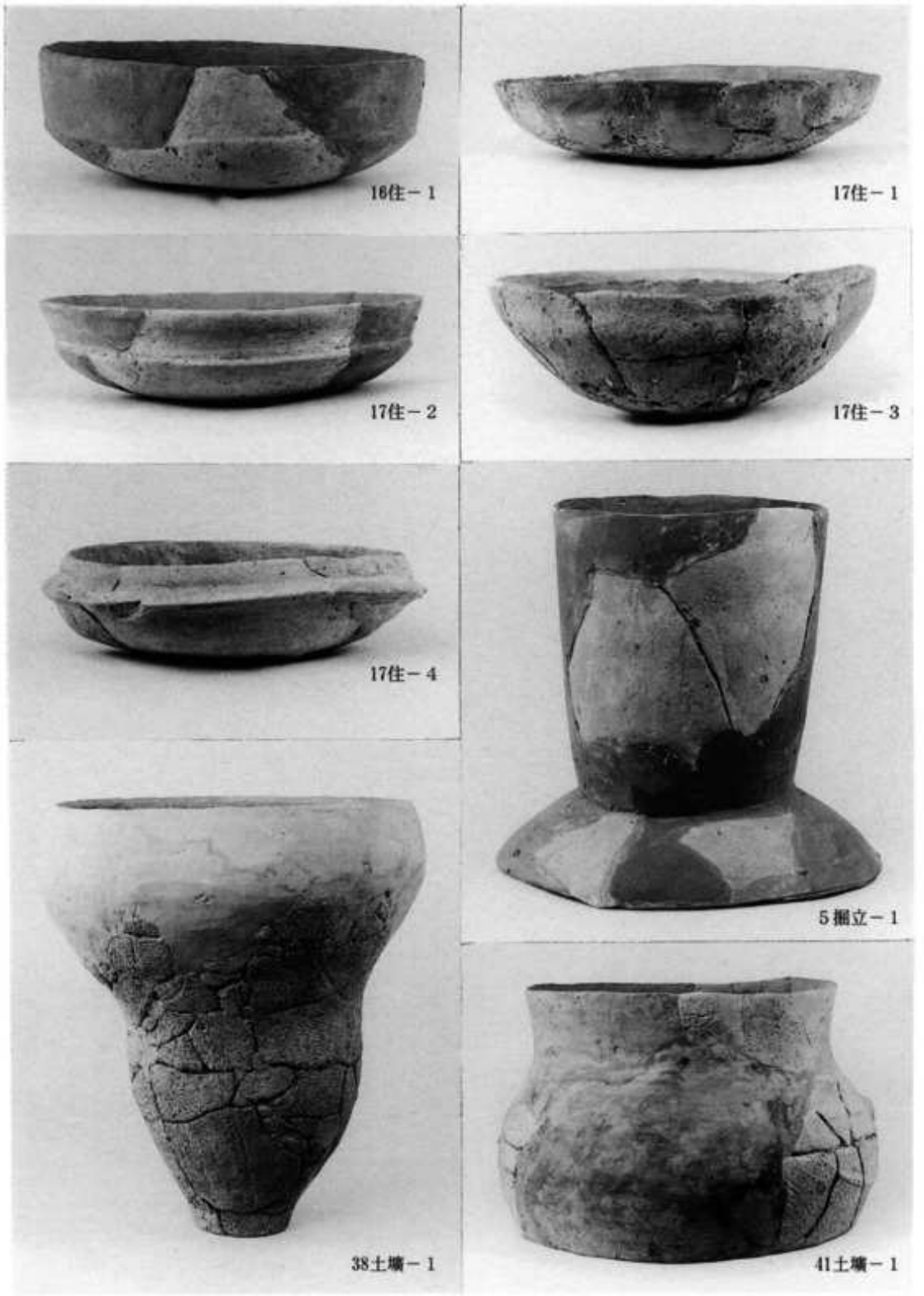
女池遺跡出土遺物（1）


13A住－11
13A住－13
13A住－14
13A住－16
13A住－17
13A住－18
13A住－19
13A住－20
13A住－21
13A住－22
13A住－23

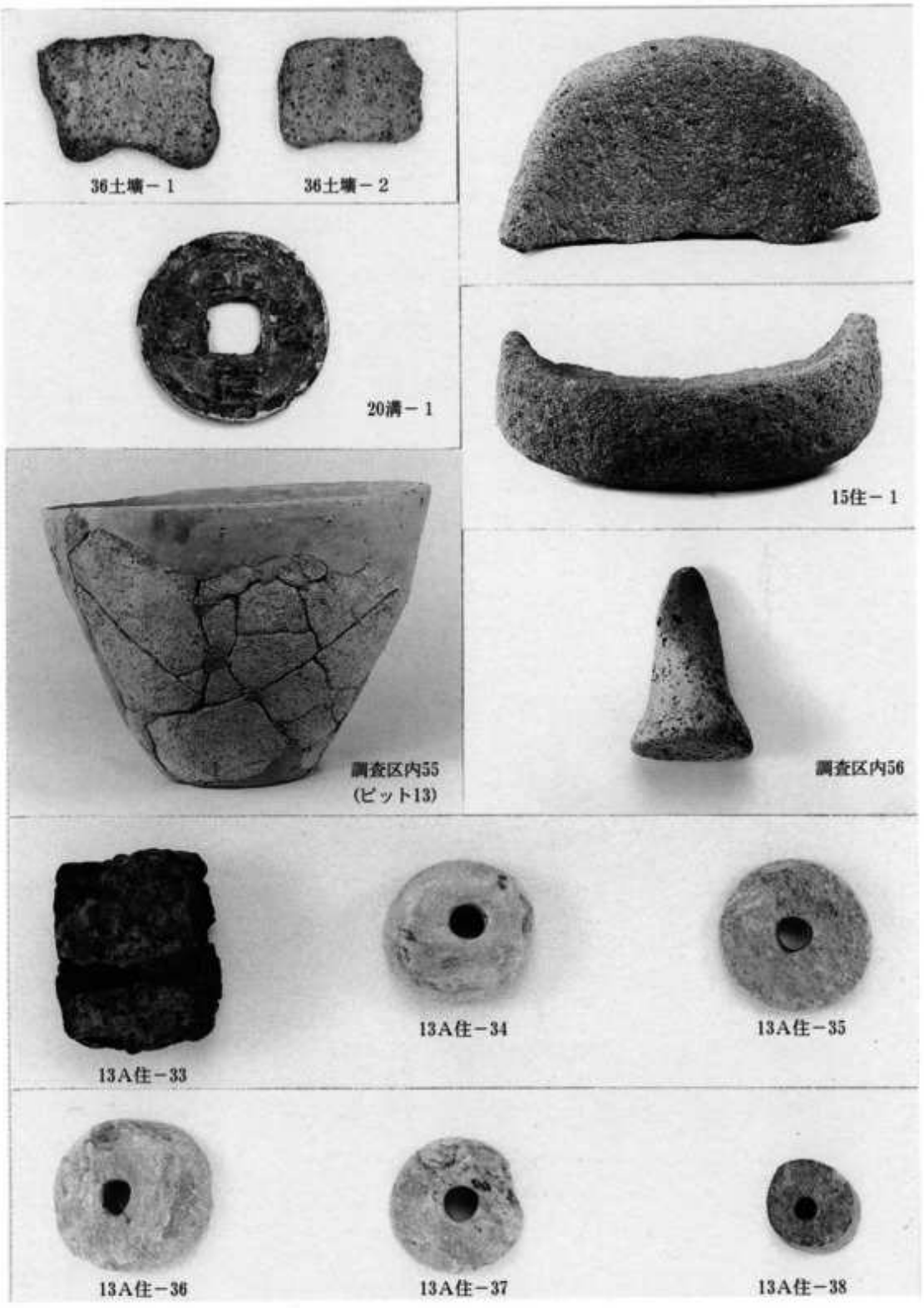
女池遺跡出土遺物（2）

13A住－24
13A住－25
13A住－27
13A住－29
13A住－30
13A住－31
13A住－32
13B住－1
14住－1
14住－2

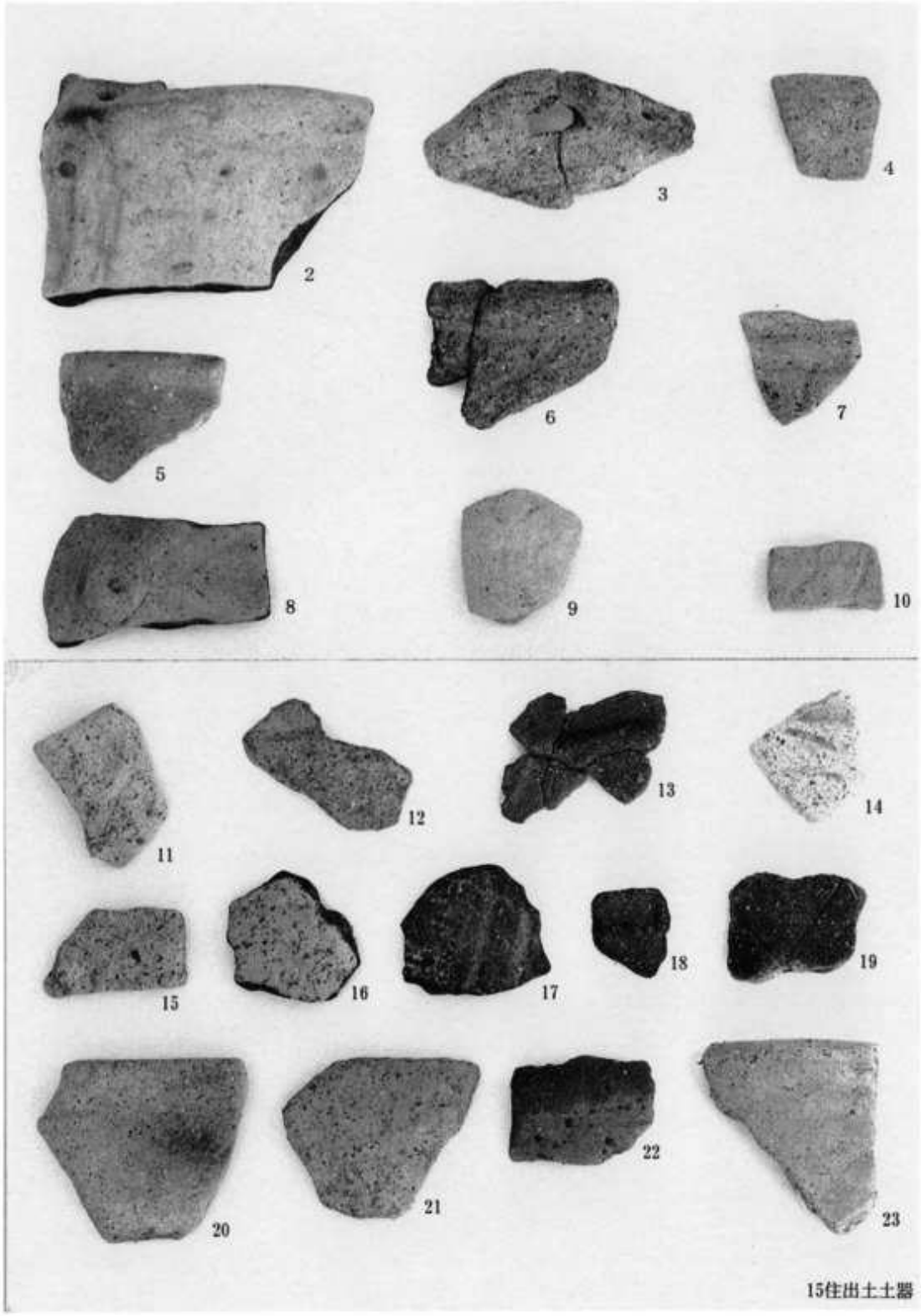
女池遺跡出土遺物（3）



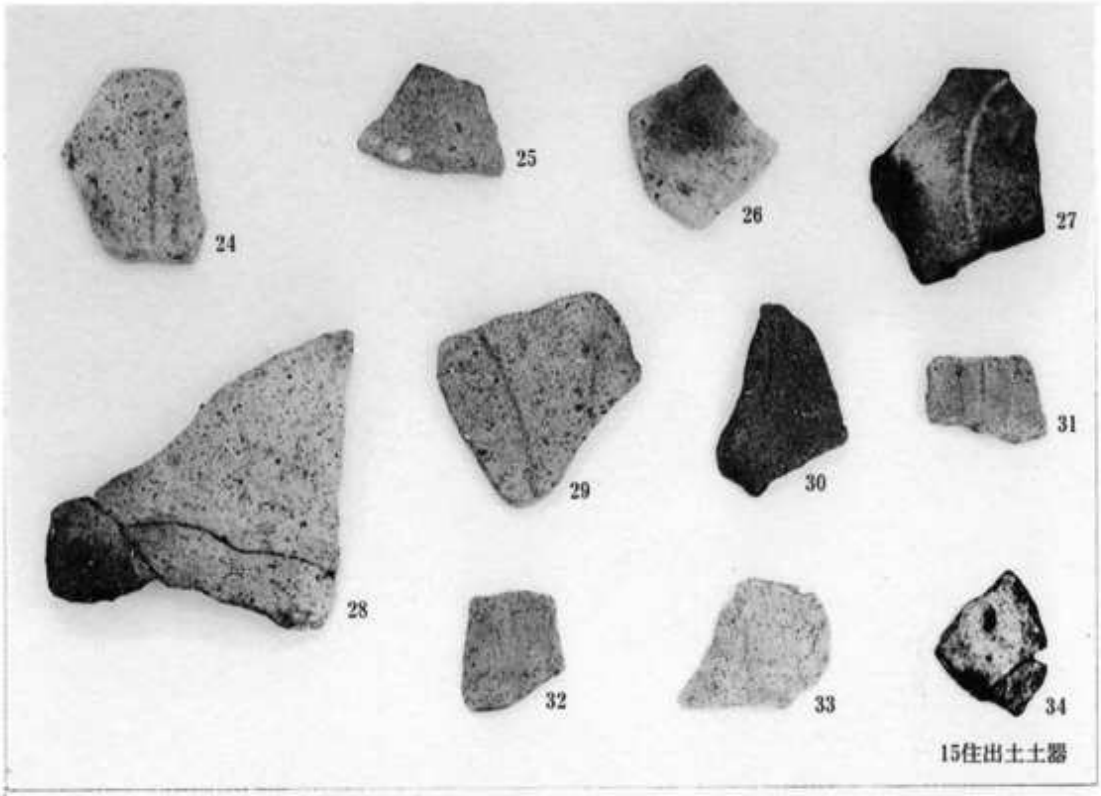
女池遺跡出土遺物（4）

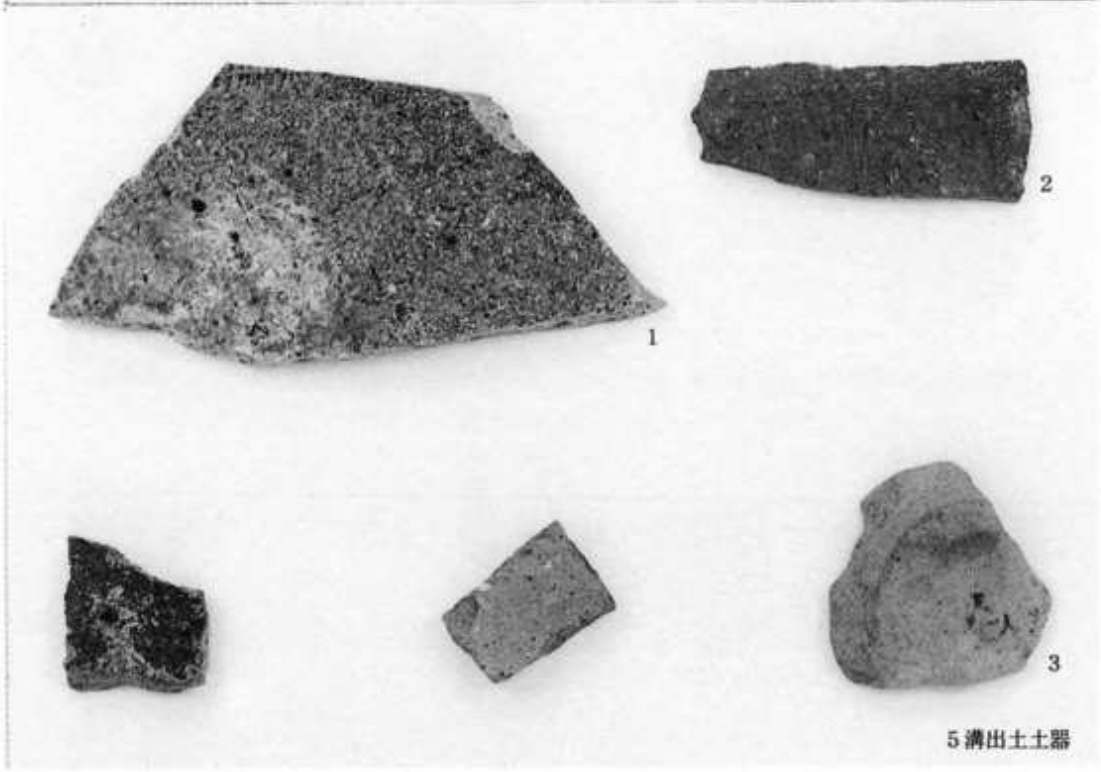

36土壙－1
36土壙－2
20溝－1
15住－1
調査区内55
(ピット13)
調査区内56
13A住－33
13A住－34
13A住－35
13A住－36
13A住－37
13A住－38

女池遺跡出土遺物（5）

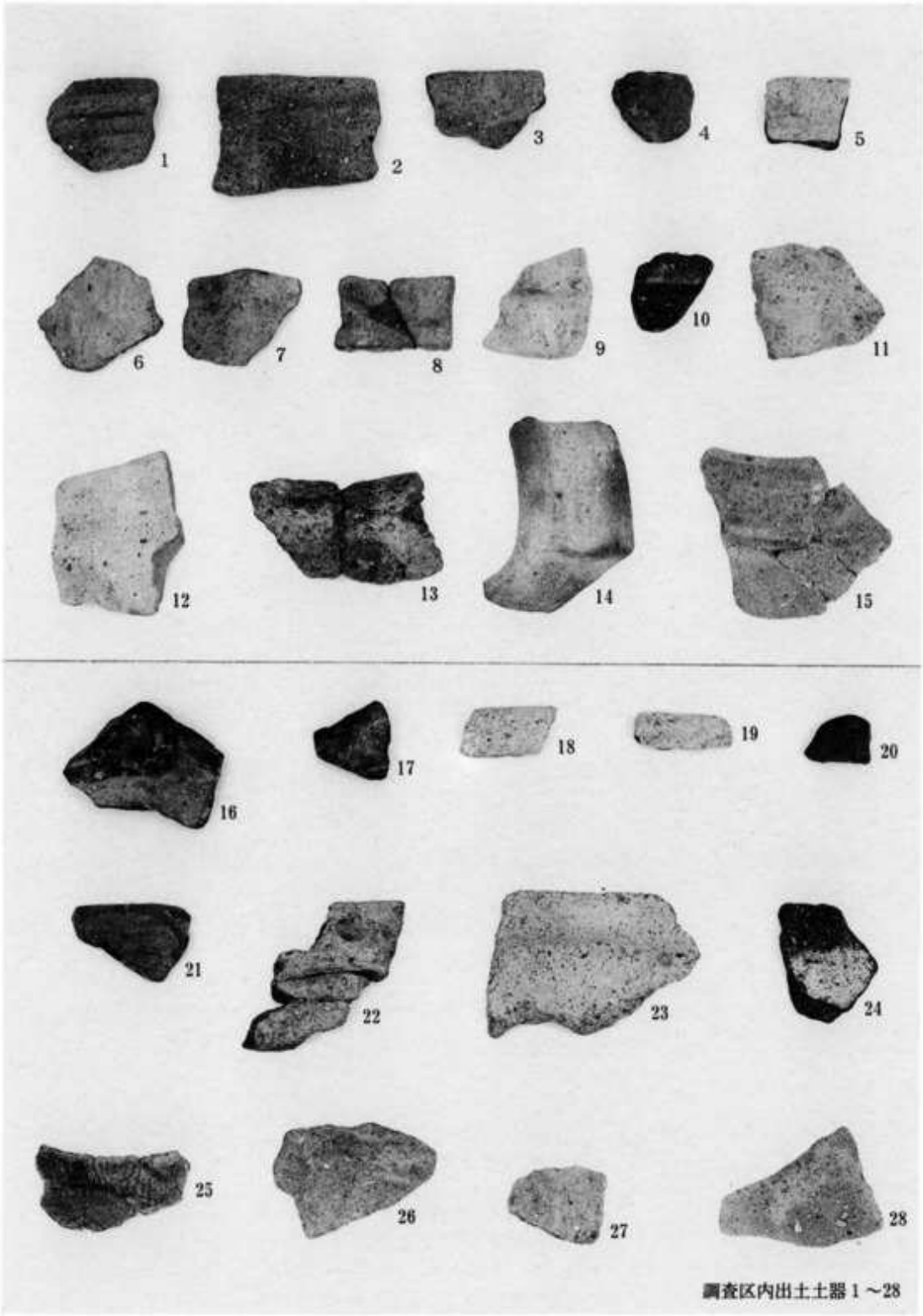


女池遺跡出土遺物（6）

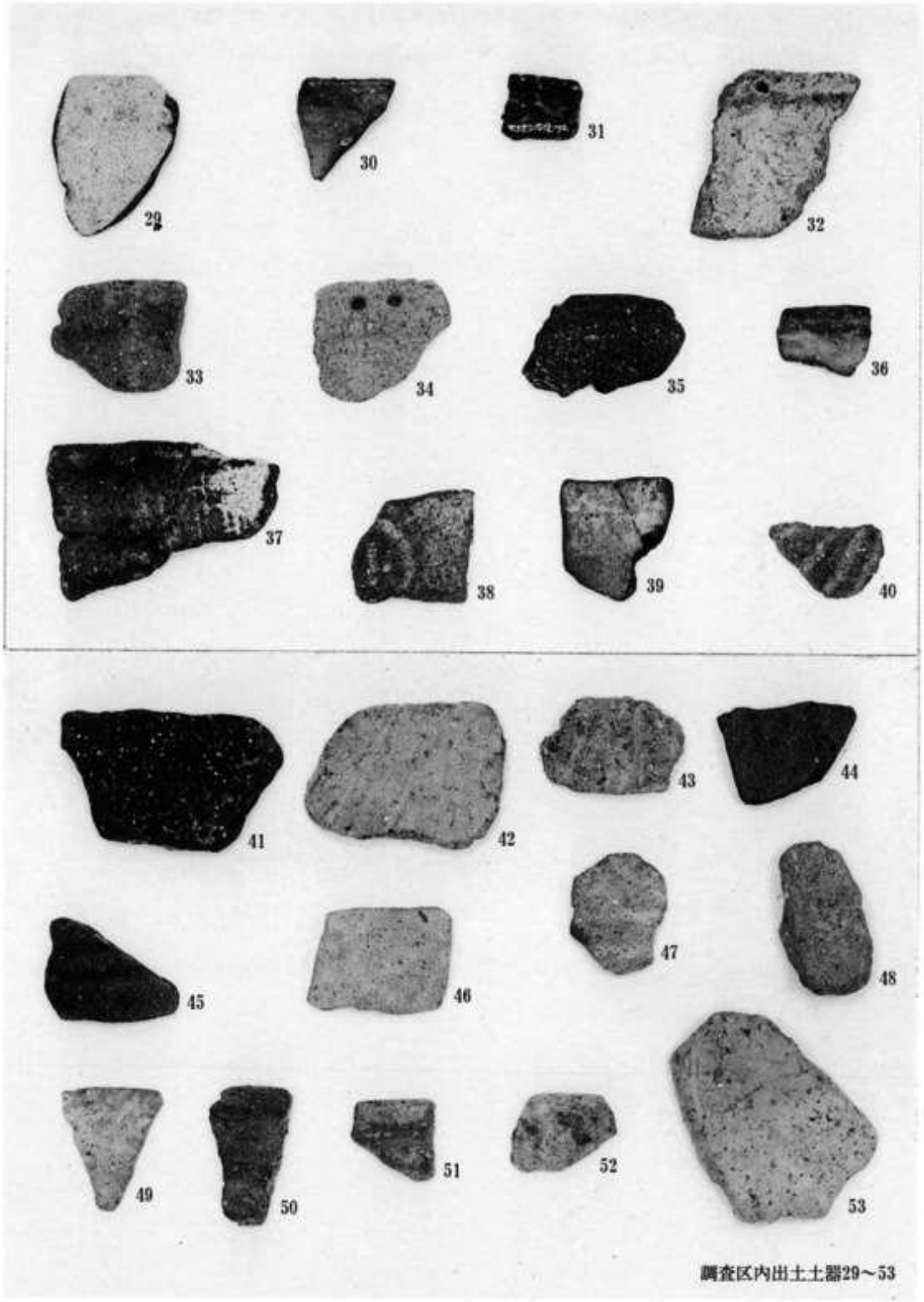




女池遺跡出土遺物（7）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
調査区内出土土器 1 ～28

女池遺跡出土遺物（8）


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
調査区内出土土器29～53

女池遺跡出土遺物（9）

報告書抄録

フリガナ	メイケイセキ		
書名	女池遺跡（B・D地点の調査）		
副書名	町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書30		
シリーズ	児玉町文化財調査報告書	巻次	第35集
編著者	恋河内昭彦、増田久江、松澤浩一		
編集機関	児玉町教育委員会		
所在地	〒367－0298　埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地　TEL 0495（72）1331		
発行日	2001（平成13）年3月30日		

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
女池遺跡 B地点	児玉町大字吉田林93番地－8	113824	305	36°11′30″	139°8′22″	19960226 ～ 19960328	190㎡	個人住宅
女池遺跡 D地点	児玉町大字吉田林93番地－9	113824	305	36°11′30″	139°8′23″	19970701 ～ 19970805	220㎡	個人住宅

所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女池遺跡 B・D地点	集落	縄文時代中・後期	竪穴住居1、土壙4	土器、石器、土製品	
	集落	古墳時代後期	竪穴住居5、堀立柱建物1	土師器、須恵器、鉄製品、石製品	
	屋敷	中世以降	土壙1、溝5	土師器皿、常滑系甕、古銭	

発掘調査組織（平成７年度）

主体者　児玉町教育委員会

	教育長	冨丘文雄
事務局	社会教育課	
	課長	大塚　勲
	課長補佐	関根安男
	社会教育係長	清水　満
	主任	鈴木徳雄
	主任	田島賢二
	主任	倉林美恵子
	主事	恋河内昭彦
	主事	徳山寿樹
	主事	大熊季広

発掘調査組織（平成９年度）

主体者　児玉町教育委員会

	教育長	冨丘文雄
事務局	社会教育課	
	課長	関根安男
	社会教育係長	根岸敬明
	主任	倉林美恵子
	文化財係長	鈴木徳雄
	主任	杉山茂俊
	主任	恋河内昭彦
	主事	徳山寿樹
	主事	大熊季広

整理・報告書刊行組織（平成12年度）

主体者　児玉町教育委員会

	教育長	冨丘文雄
事務局	社会教育課	
	課長	前川由雄
	課長補佐	永尾清一
	社会教育係主任	萩原千恵子
	文化財係長	鈴木徳雄
	主任	恋河内昭彦
	主事	徳山寿樹
	主事	大熊季広
	主事	松澤浩一

児玉町文化財調査報告書　第35集

女　池　遺　跡

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書30

平成13年3月21日　印刷
平成13年3月30日　発行

発行者　児玉町教育委員会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所　たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地